

---

# また会える日まで

a n g e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また会える日まで

### 【Nコード】

N0524F

### 【作者名】

angel

### 【あらすじ】

哀とコナンは組織を壊滅させるため動き出す。しかし平次や蘭たちを巻き込んでしまうことに悩む。そんなコナンが逆に平次、快斗、また、探など、さまざまな人から協力してもらい、組織壊滅のため、動き出す。そんな話です。名探偵コナンのFF、初投稿、読んでみてください！これは新蘭、平和、快青で、少し園真も出てきます。

## file1:プロローグ ジンのつぶやき(前書き)

初めて書きます!!

週1投稿の予定ですが、不定期になりそう・・・デス・・・  
よかつたら読んでください!!

どんなことでも良いんで、評価・感想お待ちしてます!!

## file 1: プロローグ ジンのつぶやき

夜、辺りに誰もいない雪の降る道で、2人は話していた。

「やっと見つけたぜ、シェリー。」

ジンはそう言って笑った。

「とうとう見つけたんですかい、兄貴。」

「ああ、やっとな。だが、正確な位置が把握できない。まあ、今、調べているからそのうち分かるだろう。」

「どれぐらいかかるんですかい？」

「3週間というところだろう。ウォッカ、そろそろ行くぞ。」

その言葉を残して2人は車に乗って、行ってしまった。

file1:プロローグ ジンのつぶやき(後書き)

プロローグでしょうか？

短かったですよね・・・

次は哀ちゃんとコナン出します！！

(たぶん・・・)

感謝ください！！おねがいします！！

## file 2・哀の呼び出し

その日、コナンは哀に呼ばれた。

コナンは不思議だった。哀はめつたに人を呼ばないからだ。博士に連れられ、部屋に入った瞬間、コナンはその一言を聞いてしまった。

「工藤君、組織が動き出したわ」

「えっ!？」

コナンは驚いた。哀がそんなことを言うなんて意外だったからだ。

「いきなりなんだよ。っていうか何でお前がそんなこと知ってんだ？」

「昨日FBIから報告が入ったの。あなた昨日蘭さんたちと出かけててケータイ出なかったでしょ」

「わかった。で、どんな感じなんだ？」

コナンはコーヒーを飲みながら聞いた。

「くわしいことは後で来て言うらしいわ」

「じゃあ、それまでここで待つぜ」

コナンは、それまでゲームをして待つことにした。この家は結構何でもあるので十分暇はつぶせる。

哀は疑問に思っていることを聞くことにした。

「何で昨日電話に出なかったの？ ジョディ先生5回もかけたらしいわよ」

「ケータイおいてきちまってな。コナン用のならあったんだけどよ」

コナンは悪げもなく答えた。

「あなたねえ、あのケータイ見られたら大変なことになるの知ってるでしょ。気をつけなさいよ」

哀はコナンに呆れた。事の重大さがわかってないからだ。そのとき博士はコナンに話しかけた。

「そうじゃ、これ君に頼まれてたスケボーじゃ。強度も上げておいたぞ」

「ありがとな博士。恩にきるぜ」

コナンは再びゲームを始めた。

この日が最後の平和な日になると知らずに・・・

file2・哀の呼び出し（後書き）

早く書けると思ってたんですが・・・  
パソコン触らせてもらえなくて・・・

私昨日運動会だったんですが、なんと！！！！  
雨の中でやったんですよ！！ありえないですよね  
ホントにびっくり（――）  
しかもそのせいでリレー走れなかったんですよ！！  
むかつきますよね

ごめんなさい。話違いますね（汗）  
次はFBI出します！！  
見てくれるとうれしいです！！

### file 3：FBIの来訪

「ハアイ、クールキッド」

ジヨディは夕方やってきた。

「先生遅かったね。で、話って何なの？」

コナンは単刀直入に聞いた。

「これは、とても重要な問題よ。最初から説明するわ。FBIがたまたまジンの車を見つけてつけていたの。でね、そのとき、彼らは『シェリーを見つけた』と言ったわ。幽霊船の事件から、私達はシェリーを哀と判定したわ。だから電話したの」

哀は驚いて声が出なかった。かわりにコナンが聞いた。

「灰原の場所がばれたのか！？」

「あと3週間って言ってたらしいわ。だから早く見つけないといけないの。」

2人はとりあえずほっとした。

「つづきをはなすわ。それで私達はあなたたちに協力してもらおうと思ったの。哀は証人保護プログラムは受けてくれなさそうだしね。」

哀は悩んだ。これを受ければみんなは狙われない。そう思ったから

だ。

その沈黙を破ったのは博士だった。

「よかったのぉ、哀君。君はあのことで悩みすぎてたじやろつ。これでそんなことはなくなるんじゃないかのぉ」

「そうだぜ。受けたりしたら、探偵団のメンバーも悲しむだろ?」

哀は少し悩んだがうなずいた。

「ただ、ひとつだけ聞きたいことがあるの、哀ちゃん」

「なんなの?」

「あなたはシェリーと呼ばれてたの?」

「それは答えられないわ」

この間わずかに沈黙があつた。そして、ジョディは答えた。

「わかったわ。言いたいときに教えてちょうだい。たぶん明日計画の連絡を入れるわ。じゃあね」

ジョディはそれだけ言って帰っていった。

3人はただ見ていた。

その沈黙を破るようにコナンが最初に話し始めた。

「いきなりだったなあ。さすがにびつくりしたぜ。」

「何のんきに言ってるの。組織と戦うのよ。あなたそれがわかって

るの？」

哀は少し興奮していた。博士は哀をなだめるように言った。

「哀君。チャンスじゃないかのお。これで勝てば君たちは元に戻れるのじゃろ？」

「博士は何もわかってないわ。これは命がかかっているの。私はともかく他の人たちに迷惑がかかったら……」

哀は持っていたコーヒーを落とした。

「灰原、お前逃げる気か？運命から逃げんなよ」

コナンは静かに有無を言わずにそういった。哀はその語調に負けたのか、納得したようだった。

「分かったわ。だけど居場所がばれたらおしまいよ」

「分かっている。だから今戦うんじゃないか」

コナンは哀にそう言うと言った。

哀はまだ不安があったが、明日からのことを考えていた。希望を持つて……

### file 3 : FBIの来訪（後書き）

どうですか？ 一番考えたのは『運命から逃げんなよ』ってところで

バスジャック事件から出てきました。考えた結果あそこに入れる  
ことに・・・

次もFBIですね。その後他の登場人物入れていきます。

訂正や感想お願いします！！！！

## file 4 : CIAとの連携

「言っただとおり、連絡するわ。」

その日の下校中、電話はいきなりかかってきた。

「ジョディ先生、何が決まったの？」

コナンは待ちきれずに聞いた。

ジョディは落ち着かせるかのように静かに語り始めた。

「まず、開始は20日後に決定したわ。FBIの調査の結果、彼らは東京都にすることまでしか知らないらしいの。だから分かるのは25日前後と踏んでいるわ。後、君は機転も利くし、運動神経もいいから、戦闘班に入ってもらわね。けど、先陣切って戦う訳じゃないから安心して。で、哀ちゃんのほうは、研究班ね。あの子はああいったことに長けているようだから・・・」

コナンは探偵団のみんなと別れて、裏道にはいった。

コナンはおとなしく聞いていたが、疑問が残った。それに気づいたのか、ジョディはまた喋り始めた。

「研究班と言うのは、組織の情報を盗んだ戦闘班が、情報を送って別のところで研究するの。ここにいる人に情報を送ればその場で研究してくれるわ。それ用のケータイも作ってもらってるし」

「組織のアジトはどこなの？それがわからないとどうしようもないんじゃない？」

「いいところに気づいたわね。私達はCIAと連携を組んで組織のアジトを割り出そうとしたの。だから昨日わざと組織と戦って末端のメンバーに発信機入りの銃弾を打ち込んだの。これで分かるはずよ。上のほうは末端なんかに興味ないだろうし」

コナンはそこまで聞くと安心した。

「ありがとう、ジョディ先生。じゃあ、また連絡入ったら連絡して」  
ジョディは急いで一言付け足した。

「CIAと組んだときに本堂瑛祐くんがあなたに会いたいって言うてるの。明日向こうと会って細かいことを決めるんだけど来ない？」

コナンすこし嬉しくなった。会ったときに何を瑛祐が話すのか気になったからだ。コナンはすぐに答えた。

「わかった。行くよ。またねジョディ先生」

コナンはそういつて電話を切った。コナンの心はクールな外面とは裏腹に、躍っていた。明日の集合ですべてが分かると思うと期待は膨らんだ。そのときは気が付かなかった。

蘭がコナンの正体に気づき始めたことに……

file 4 : CIAとの連携（後書き）

やっと書きました。1日に二話は疲れますね（^ ^ ;）  
次からは新蘭です！！平次たちはどこ行った！！と思う人も多いで  
しょう。

大丈夫！！この新蘭終わったら出します。  
評価お願いします。

## file 5・気づく正体

「何よこれ!？」

蘭は驚きを隠せなかった。コナンが忘れていたと思っていた携帯電話話は蘭がコナンに渡そうと思ってもっていたのだ。

蘭がふと中を見るとロックがかかっていた。それであるときの番号を入れると開き、見てみると中には蘭とのメールや、服部との電話の履歴があつたのだ。

試しにメールを送るとメールはその携帯電話に届いた。

これを機に、蘭は疑い始めた。

蘭はコナンに疑問があつた。

新一がいなくなったとき、コナンがきたときなどいろいろな考えても1つの結論しか思いつかなかった。

それはコナン「新一」という事実。

蘭は決意してコナンに聞くことにした。

コナンが瑛祐と会う前日の夜、蘭は言った。

「コナン君は新一なんですよ?」

コナンはびっくりした。まさか今日言われるとは思ってなかったからだ。

「どうしてそんなこというの?」

コナンは動揺していたが、冷静に返事をした。

それに比べ蘭は素直に言うてくれないコナンに腹立ちを覚えた。

「何も言ってくれないのね。でもこっちは証拠があるのよ。」

コナンはドキッとした。あの携帯電話のことを思い出したからだ。動揺が大きくなった。それでも平静を取り繕って言った。

「証拠って何？」

次の瞬間決定的な、聞きたくない答えが返ってきた。

「ケータイよ。分かてるんでしょ!!」

「そんな。それは新一兄ちゃんのもかもしれないじゃんか」

蘭はまだ疑っていたがなんとなく流されてしまった。だからそれ以上追求しなかった。

コナンはそんな空気を読み取って言った。

「本当は、今詳しい話をしてあげたいけど出来ないんだ。もう少しだけ待って」

「わかった。けど、そのときになったら必ず話してね」

「絶対に話すよ」

この一言で、蘭はいつも通りに戻った。

コナンも少し心が軽くなった。

file5:気づく正体(後書き)

ついに新蘭書きました！

蘭だけは先に正体言いたかったんです！

新一と蘭は特別扱いですから(笑)

次回はまだ考え中です。大体は決めたんですけど・・

## file 6：悩み

朝起きると、携帯に1件の着信が入っていた。

かけなおしてみるとコナンの今の気持ちと正反対のような明るい声が聞こえてきた。

「おお、工藤か！」

コナンは眠そうな声で言い返した。

「なんだんだよ？朝っぱらから」

「1時間も前に電話入れたんやで？何ででんかったんや？」

「寝てたんだよ、1時間前は6時だぞ？」

「そうやな、ああ、今そっちいつてるんや。しばらく泊まるで」

コナンは急な展開にびっくりした。

「ええ！？なんで来んだよ？」

平次は低い声でつぶやいた。

「詳しい話は後や。長くなりそうやからな」

そんな意味深な発言を残して、平次は電話を切ってしまった。

コナンは考えた。何で今平次がやってきたのか。話とは何なのか。それはなんとなくわかったが、すべては詳しい話を聞いてから考え

ることにした。

2時間後、平次はやってきた。蘭はまるでそのことを知っていたかのように、驚きもせず、平次を3階へ案内した。

平次は入ってきた瞬間、珍しく真剣に、一言だけつぶやいた。

「姉<sup>ねえ</sup>ちゃんに正体ばれてるで」

「ええ!？」

コナンは知ってはいたが改めてびっくりした。

平次はまた話し始めた。

「それでな、俺になんでそうなったか聞いてほしいんやて」

「そついわれても、言えねえよな。教えてやりたいけどな」

平次はコナンを諭す口調で言った。

「でも、だらだら伸ばしてたら言いとうなくなってくるで」

「そつだよなあ・・・どうしようか・・・」

「理由はきとうにつけるとしても、これからどうするんや?もう工藤の正体を知つとる今、今までどおり誤魔化せんなるで」

「じゃあ、やっぱり言ったほうがいいか・・・」

そのとき蘭がお菓子を持って部屋に入ってきた。

「服部君、ゆっくりしていつてね」

それだけいうと蘭は帰っていった。

コナンはその直後平次に決意を話した。

「服部、俺理由ちゃんと言う」

平次はいきなりのことに、うろたえていた。

「なんでや？さっきまであんなに悩んどったやないか」

コナンは説明した。

「さっきの蘭の顔を見たか？すごく疲れていただろ？あのままいつたら病気になる気がするし・・・」

平次は納得したようだった。

「じゃあ、早う言いや。でも俺はまだここにいるけどな」

「用事はこれだけじゃなかったのか？」

平次は考えをコナンに話した。

「姉ちゃんの話によると、ケータイに組織の話がめっちゃ書いてあったんやろ？これは手伝わんと」

コナンは2つのことをどっちに話すか迷ったが蘭の事を先にすることにした。

「服部、その話は後でしょう」

これから、起こることに不安はあったが、コナンは一点の希望を見つけていた。

file 6：悩み（後書き）

遅くなりました（汗）

おとといできてたんですけど、投稿できなくて・・

次は平次です！！

展開予想してみてください！！

（和葉だそうかなと思ってます）

file7：平次×和葉

平次が毛利探偵事務所へ行くときのこと・・・

和葉は駅に急いでいた。和葉は珍しく怒っていた。

（おかしいて思つたんや！！ここ最近工藤君の話ばかりするし、滅多に面白い物誘つても来ん平次があんな乗り気なんは100%裏があるに決まつてるやん！なんでうち気づかんかったんやろ？）

和葉はそれを確かめに平次に会いにしているのだ。

しかし、行く理由はそれだけではなかった。

（蘭ちゃんもおかしいんよねー。電話しても声が暗いし、昨日はメール返つてこなかったし。

平次がしゃべってたん聞いたら工藤君がかかわってるっぽいし。これは確かめにいかんと。もし蘭ちゃんになんかあったら工藤君でも許さんから！！）

和葉が怒つてたのはこれだったのだ！この二つのことが、周りの人が和葉に近づけないほどにしていた。

もうすぐ電車が発発してしまう。和葉は全速力で走った。

その頃平次はバイクを走らせていた。

平次は和葉が怒っていることに気づいてなかった。

（工藤大丈夫やるか？姉ちゃんが知ってたんやから正体ばれてるんやろうしなあ。やっぱ俺が助けんと！）

考えているのはコナンのことばかりで他のことは考えていなかった。そういつたことを考えている間に景色は森に変わっていった。

（何で東京と大阪はこんなに遠いんや！！もっと早う出ればよかった。急がな！！）

2人は互いに別々に、また同じ目的地に向かっていった。

この2人の行動は後にコナンに影響を及ぼすことになる。

file7・平次×和葉（後書き）

投稿遅くてごめんなさい。

中間テストだったんです・・・

明日までなんですけどね。

次回は書いています！！早ければ明日出せると思います！！！！

最近気づいたんですが、私、哀ちゃん最初しか出してませんね・・・  
あらすじと反してるような・・・  
もう少ししたら出しますからね！！

読んでいただいてありがとうございました。

file 8：絆

コナンは服部と話し合った後、蘭の部屋に行った。

コナンは緊張していたが、蘭の部屋の戸をノックした。

「蘭ねえちゃん？入ってもいい？」

蘭は戸越しに答えた。

「うん。入って」

コナンは静かに入った。

「蘭ねえちゃん、話があるんだけど」

コナンは早速本題に入った。そのとき部屋が静まり返った。

「何なの？」

その口調は小学生に対する口調というよりも、高校生に対する口調に近かった。

コナンはそのことには触れず話し始めた。

「俺は・・・工藤新一だ」

コナンはとうとう正体をばらした。蘭は納得出来ないことがあった。それに気づいたのか続きを話し始めた。

「俺が小さくなったのは、最後に蘭とトロピカルランドに行ったあ

の日だ。よく調べたら、俺は出ていないとわかんと思う」

蘭は続きを話すように促した。

コナンは続きを話し始めた。

「俺が先に帰ってくれって言ったの覚えてるか？」

蘭はうなずいた。

「実はあの時、取引き現場を見たんだ。それを見ているときに、その仲間のやつに殴られて、変な薬を飲まされて、幼児化した」

コナンはすべてのあらすじを話し終えた。そのとき部屋の時計には、4時と刻まれていた。

蘭はそれ以上は追求してこなかった。しかし一言だけ言った。

「何で・・・何で話してくれなかったの？」

コナンは説明した。

「そいつらは犯罪者で、人を殺すのが平気なやつらだ。だから誰かに言えばその人は殺されるかもしれない。周りの人たちも・・・だから、言えなかったんだ。」

コナンは続けた。

「ホントはお前をこんなことに巻き込みたくなかった。けど、最近・・・お前と一緒に居たいと思ってる。こんな危険な状況でも・・・一緒に居てくれるか？」

蘭は笑った。そして答えた。

「うん。居てあげる」

「ありがとな。」

コナンは言った。

この瞬間、二人はうち解けたようだった。

コナンはもっと話していたかったが、平次のこと、瑛祐のこともあったのでコナンは部屋を出た。蘭はそれを眺めていたが、その後すぐに、買い物をしにいった。

この日は二人にとってとてもいい日になった。

file 8：絆（後書き）

結局投稿おくれてごめんなさい。

今回とうとう正体が……！！

でも話はこれからです。

次は平次とコナンです。途中で何か入るかもしれませんが……

読んでくださった方ありがとうございました。

file9・予定変更!?

ちょうど話し終わったところに電話がかかってきた。

「ハアイ！クールキッド！」

「あ、ジョディ先生？確か今日だよね？」

そのことを話し始めたたん、ジョディは少しトーンダウンした。どちらかと言えば痛いところをつかれた顔だっただろう。

「あ、そのことなんだけどね・・・今日はなくなったの。」

「なんで!？」

コナンは驚かすにはいられなかった。その様子は遠足がなくなった子供のようだった。

「FBIとCIAの予定では今日中に組織の情報が手にはいるはずだったの。だけど、組織の情報がうまく取れなくて・・・」

納得した顔で聞いていると、ジョディが話しかけてきた。

「それでね、あなたも思っているでしょうけど、ジンから情報が洩れるなんて変なのよ。だから相談しに哀ちゃんと会いたいんだけどいいかしら？」

「聞いてみるね」

コナンは携帯を取り出した。そしてコナンが電話をかけようとする  
と、ジヨディが一旦とめた。

「OKが出たらクールキッドも来て頂戴」

「わかった。」

コナンはそういったあと、博士の家に電話した。

「もしもし？博士？ジヨディ先生が行きたいらしいけどいいか？」

「ああ。けど、なんでじゃ？」

「細かいことはあとでな」

コナンはそういつて電話を切った。  
すぐにジヨディは聞いてきた。

「大丈夫だった？」

「うん。大丈夫」

ジヨディはほっと一息ついた。そして話し始めた。

「じゃあ今から毛利探偵事務所に行くから」

「うん。待ってるね」

コナンはそういつて電話をきったが少し疑問があった。  
なぜ今頃になって話すのか、理由がわからなかったからだ。

コナンは来るまで考えることにした。

今はまだ知らない。このわけを・・・

file9・予定変更！？（後書き）

今回の話は、電話が2つ使われています。  
一応言っておきます！

最近不定期です。すいません。

しばらくは早く連載できると思います！

ここまで早くできることはあまりないので注意してください！  
まあ、部活で試合も終わったので、早くはなります（たぶん）。

それでは次回まで！

file 10：阿笠邸へ

10分ぐらいして、ジヨディは探偵事務所へやってきた。  
蘭は急にやってきたジヨディを見てびっくりしていたようだったが、適切に対応した。

「ジヨディ先生、もう夜なのにどうかしたんですか？」

「毛利サンね？コナン君に用事があるの。出してもらえないかしら？」

ジヨディは用件だけを単刀直入にいった。  
蘭はすぐにコナンを呼んだ。

「コナン君、ジヨディ先生が来たわよ」

「すぐ行くよ」

そういつてコナンは3階からすぐに降りていった。  
降りたらすぐ出かけることを蘭に伝えた。

「ボク、これからちょっとジヨディ先生と出かけてくるね」

蘭は少し考えていたが、すぐに行つていいと言った。

「ありがとう、じゃあ行つてくるね！」

「じゃあ、またあとでね、毛利サン」

そういつて2人は出かけていった。

少し経つと、2人は車内で話し始めた。はじめに切り出したのはコナンのほうだった。

「ジョディ先生、何でいまさらこんな話をしようと思ったの？」

コナンは子供の声だが、有無を言わせぬような語調で切り出した。

「それはちゃんと博士の家に着いたら話すわ。それとも予想が付いてるの？」

ジョディもコナン同様有無を言わせぬ口調だった。コナンはそれに返事した。

「まあね。でも証拠はないよ？」

「じゃあまたあとで聞かせてもらっわ」

そういつとまた沈黙が訪れた。

話さない間、窓の外を見ていると、雪が降っていた。

「あ、雪だ」

そうポツリとつぶやいた。ジョディはそれにあわせて返事をした。

「そうね。さあ、博士の家に着いたわ」

気が付くと、そこは博士の家、そして工藤新一の家の前だった。コナンはしばらく眺め回したあと、阿笠邸に入っていた。

file10：阿笠邸へ（後書き）

投稿最近早いですね。

基本的に考えてないので、不定期になるのは間違いない感じがします・・・

早く投稿できるように頑張ります！

読んでくださってありがとうございます

## file 11・実状

コナンが博士の家の呼び鈴を鳴らした。

どうやら待っていてくれたようで、すぐ出てきた。

「おお、新・・・いや、コナン君、待つとたぞ！」

博士は笑顔で迎えてくれた。少し問題はあったが・・・  
そしてコナンはそのままリビングに入って行った。

「そっぴや、灰原は？ いねーけど」

博士は少し顔が曇った。

「昨日、実験室に入ったきりなんじゃよ。ご飯のときとかは出てくるがのう」

コナンは状況を理解したようだった。

「わかった。博士はどうかして灰原をここに連れてきてくれ」

「わかった」

そういつてドスドス音を立てながらも哀を呼びに行った。

2人はたわいもない会話をし、時間をつぶした。

10分ほどして、博士と哀が来た。

コナンが哀に聞いた。

「なんで、お前実験室にいたんだ？」

「別に。悪い？」

そっけない口調で哀は答えた。

そのあと口火を切ったのは、やはりジヨディだった。

「で、何で私がこのことを言いに来たかって言つと・・・」

少し間があいてからジヨディはいった。

「・・・やっぱりコナン君に言ってもらふことにするわ。教えたはずだし」

そういわれたのでコナンは話し始めた。

「言いたかったのは、何でジンから情報が洩れたかっていうことだ。あの慎重派のジンからばれるなんておかしいからな」

「コナン君、そうよ。けど、君たちはなんかあの組織とかかわっている気がするって言うのもあるのよ」

一息おいてから話し始めた。

「あのことについてなんだけど、おそらく向こうから流したもののよ。事情は分からないけど、怪しいわ。だから今は計画を少しはやめよ」

うと思うの。貴方たちはそれでいいかしら？」

2人はほぼ同時に答えた。

「いいよ（いいわよ）」

「わかったわ。じゃあその方向でいくわ」

ジヨディは去り際にコナンに一言言っ去っていった。

「これから大きなことがおこるかもしれないわ。きをつけてて」

そっいつて帰ってしまった。

「何を話してたのかしら？」

「なんでもねーよ」

コナンはそっいつたが、心配だった。ただ、無駄な心配をさせないために、その場は何も言わなかった。そして、そのあと3人で少し話したあと、コナンは家に帰っていった。

## file 11・実状（後書き）

とうとうPV10000突破することが出来ました！！

正確には11143でPCだと4221、ケータイだと6992です！！

ただユニークは4830でPC2472、ケータイ2358と少ないので今後はもっとうまく書けるようにします！

最近、ジョーディ先生との話ばかりで暗かったのでつぎは明るい話を書いていきます！

subに出てきた平次&和葉で！！

青子と快斗はもう少ししてから出します。

## file 12：譲れない気持ち

コナンは帰ったあと、疲れを理由に平次とは話さずにすぐ寝てしまった。そのあと、10時ごろまで、ここ3日、特に昨日の疲れがたまっていたせいか、遅くまで起きてこなかった。ちょうど学校側の用事で連休となっていて都合が良かった。

しかし起きたとき、聞こえるはずのない声が響いてきた。

「蘭ちゃん、疲れてるやろ？ウチが作つといたるよ！！急に来たんも悪いし」

「いいわよ。私が普段作ってるんだし。和葉ちゃんはゆっくりしてて」

そこで、和葉が来たことが分かった。しかし、来る理由がないので出来事を思い出していると、突然、何も無いはずの場所から、声が聞こえてきた。

「和葉は俺を追いかけて来たんや」

コナンはびっくりした。無理もない。いきなり気配を現したのだから。

「なんでそこにいんだよ！！」

コナンはそう思ったが、平次は気配を隠してる気持ちはなかったらしく、

「さっきからおったやないか!!」

と言った。コナンも自分の寝不足のせいで、感覚が鈍ってるんだろ  
うと思い、それ以上追求しなかった。その後、コナンは聞いた。

「お前、またなんかやらかしたのか？」

コナンはそういつて平次を睨み付けた。

平次は首を横に振って答えた。

「ちゃうちゃう!!俺がちよつと普段とちがつとったからって“怪  
しい”言つて追いかけて来たんや。後姉ちゃんの様子もおかしいつ  
て気づいたらしいで」

「すげえな。電話だけで気づくものなのかよ。それに、服部を追  
かけてつてのもすごいな」

コナンはただ感心するばかりだった。

その後へ平次は話を切り出した。

「それで、俺は何を手伝ったらええんや？」

「お前マジで手伝う気だったのか？」

「当たり前やないか。親友の一大事やつちゅーのに!」

平次は強い意思を表した表情を、コナンは少し当惑気味な表情をし  
ていた。

「やめとけ服部。これやってしまったらお前は死んじゃうかもしれないんだ!!俺は自分の責任だからいいけど、お前まで身をはる必要はねえよ」

コナンはそういつて平次をあきらめさせようとした。しかし言うことを簡単には聞いてくれなかった。

「何言うてんねん!!お前がもし俺の立場だったらどうする?行かへんのか?」

「それは・・・」

コナンは返事に戸惑っていた。その隙を見計らったかのように平次は言った。

「だから俺も手伝うわ!!任せとき!!」

「そんなわけにいくかよ!!」

このまま、夜まで2人は対立し続けていた。

## file 12：譲れない気持ち（後書き）

ここ最近、ハロウィンのやつばかり書いてて、こっち投稿してませんでしたね・・・

今後は配分を考えてやりたいと思います><

今回からしばらくは4人の（主に新一&平次）で書くつもりです。

とりあえず後2作はストック作つてあるのでそれは変更はないと思います！！

駄作ですがよかったら次も読んでください！！

### file 13・相談

朝から家でも、でかけている時でもこの話ばかりしていたら、ついに10時間が経ってしまった。それでもまだこの話ばかりしていた。

「だーから、お前が手伝わせてくれたら俺やってこんなしつこう言わへんわ!!」

「お前がおとなしく家に居りゃーこの話はすぐおわるんだよー! だいたい彼女だつて居て欲しいだろーよ」

服部は首をかしげた。

「“彼女” って誰や?」

「はあ? 和葉ちゃんのことだよ」

コナンは苛立たしそうに言った。

「和葉のことかー。彼女ってイメージやないから気づかんかったわ」

こんな今関係のない無駄話でまた時間を食ったらかなわないと思い、コナンは1つの案を提案した。

「じゃあ、実際にその和葉ちゃんに決めてもらおうか」

平次はその提案をしたことに驚いた。

コナンはクールなので自分に少しでも不利な条件は言わないと思ったからだ。

だからホンネがこぼれた。

「ホンマに聞くんか？」

しかしそういつて数十秒後、何か思いついたのか結論を出した。

「ええやろ。じゃあ2人で聞きに行こや。けど、その代わり姉ちゃんにも聞くで！！」

コナンと平次はお互い見つめ合って笑みを交わした。その後、下に取りていった。

真っ先に聞いたのはコナンだった。もちろん聞く相手は和葉だった。

「ねーえ、和葉姉ちゃん」

「なんなん？コナン君」

和葉の口調は小学生に対する口調だった。蘭は和葉に正体をばらしていないと知ってほっとすると同時に、蘭に感謝するばかりだった。そこから2人に対する尋問（？）が始まった。

### file 13・相談（後書き）

11話目とうとう投稿しました！

ストックあれから作ってないんで減っていつてしまっでなんか悲しいです・・・

最近続きが思い浮かばなくて・・・  
特に快斗と青子をどう出すかとか・・・  
思いつき次第書きます！！

ミスばかりですが、良かったら続きも読んでください！

## file 14・和葉のキモチ

コナンは和葉に対する最初の質問をした。

「もし、平次兄ちゃんが危険なことをしようとしてて、和葉姉ちゃんがそれを知ってたらどうする？」

そんな小学生離れした質問にも、和葉は丁寧に答えてくれた。

「そうやなあー、私としてはめっちゃ止めたくないやろなあ。平次が居ない生活なんて今までなかったんやし」

コナンは一瞬だけ勝ち誇ったような顔をした。しかしこの話には続きがあった。

「けどな、コナン君、うちは平次がどうしてもいかなあかんって言うたらそのときは笑顔で送り出すと思うわ」

コナンは心底意外だった。まさかそんな返事が来るとは思わなかったからだ。

コナンは続きを聞かずにはいられず、つい、どうしてか聞いた。

和葉は間をおいたあとゆっくりと話し始めた。

「あの子、もしコナン君が自分の大事なことをしようと思ってるとき、他人に止められるなんて理不尽やと思うやろ？それと一緒に。結局、他人のことを自分が止めたら迷惑やしその人にしか決められんのか、分かった？」

「でも、それが“死”に関わってたら？」

すでにコナンの聞いていることは小学生ではないと思う域まで達していた。

しかしそれに気づいているのかいないのか、そのことは気にせず話してくれた。

「それでもうちは送り出すわ。笑ってあげてな。さっきも言ったけどうちに平次を止める権限は無いんや。死んでもいかなあかんってことはめっちゃ大事なことや。だったら行かせてあげんと一生後悔するかもしれんし・・・」

「そっか」

コナンはそれしか言わなかったが、和葉の謙虚さと考えの深さにはただすごいと思うばかりであった。そのあと2人から一緒に遊んであげようと言われたが、平次兄ちゃんと遊ぶと言って断った。それを見て蘭と和葉は、

「あの2人、兄弟みたいに仲ええなあ」

「そだね」

とつぶやいていた。

file 14・和葉のキモチ（後書き）

やっと13話を投稿することができました。

私は一番のお気に入りです！！

和葉の平次に対する純粋なキモチが好きです

シリアスなものを書くのが苦手なのでこんなものしか書けません、  
楽しんでもらえたら嬉しいな

次は蘭です！！和葉との違いを見てください！！

## file 15：経過

コナンは話を終えたあと、すぐに3階へ戻ってきた。

そのとき平次に話しかけようとしたが、待っていたはずの平次が、少し汗をかき、ハアハア言いながら座っていた。

「お前、ここで待ってるんじゃないかったのかよ」

服部は少し黙っていたが、やがてぼそぼそつぶやいた。

「俺も和葉の答えが知りたくなっただんや」

平次は顔を赤らめていた。コナンはそんな平次に一つ聞いた。

「お前が和葉ちゃんのことが好きなのはよく分かった。だから最初からなんていうか見当が付いてたんだろ」

コナンの目つきは鋭かった。普段能天気な平次が萎縮するほどだった。

しかし萎縮している割にははっきりと答えた。

「確かに予想はついていた。けど、俺が和葉が好きだからうちゅーのは間違ってる。それにあそこまで良う言うてくれるとは思ってらんかったなあ」

「ええ！！」

コナンは驚いた。平次はてっきり推理でこれまでのことを予想してたと思っていたからだ。そんな心中に気づいたのか平次は話し始め

た。

「そりゃそうやる。これは和葉と長くいたから気づいただけのことやからな」

「そうか。お前ら2人ってすごいな」

コナンは素直に感動した。平次は意外そうに答えた。

「そうか？俺は正体を言うても信頼し合えるお前らのほうがすごいと思うてるけどな」

そこまで言って少しの沈黙があつた。その後平次が沈黙を破った。

「じゃ、次は姉ちゃんに聞いてくるわ」

「おう！じゃ、俺はここで待ってるぜ」

そうやって2人で話した後、蘭に聞きに行った。

## file 15：経過（後書き）

初！ケータイ投稿です

今回は話のつなぎとしてこれを入れました！急いで作ったので出来は分かりませんが、話的にはおかしく無いと思います！  
では、また（＾・＾）ノ

file 16・蘭のキモチ

平次は降りてきた。ちょうどいいタイミングで蘭が声をかけてきた。

「あら、服部君じゃない。どうしたの？」

平次には会話の流れのなかで聞くという高等なテクニックが使えなかったため、単刀直入で聞いた。

「なあ、姉ちゃん、もし工藤がいなくなってもたらどうする？ いままでも居らへんかったかもしれないけど、今言うとるんは一生って話や」

蘭は少し戸惑った。そのことについては今まで散々悩んできたからだ。しかし自分なりの答えに余り自信が持てなかったからだ。蘭は和葉が居ないのを確認して言った。

「和葉ちゃんが聞いたら笑うかもしれないけど、私は新一がいなくなったら耐えられないと思う。あの時　そうトロピカルランドで新一がいなくなってから、私は悩んだの。あそこで手を離さなければって。和葉ちゃんみたいに強かったなら良かったなってさっき思った」

そこまでいって、蘭はお茶を飲んで一息ついた。平次も釣られてテーブルの上にあったお茶を入れて飲んだ。

そのときその動作に気をとられて2人とも気づかなかった。背後の人影に・・・

そして、平次が第二の質問をした。

質問というよりは、さっきの話に疑問をもったという感じだった。

「でも耐えられたんやないんか？ 実際工藤はしばらく居らんかったんやし」

蘭は少し微笑んで答えた。

「あの時だって最初はパニックだったわ。けどしばらく過ごすうちになんとなく新一とコナン君が似てるなって思ってた・・・それから落ち着いたわ。その後、もっと過ごしていくと新一とコナン君は同じ人だって思っただの。証拠はないけどなんとなくね。もしかしたら幼馴染だったから気づけたのかもしれない。だから、私は耐えられたのよ」

平次は和葉と全く考えの違う蘭に驚いていた。2人の話両方に納得している自分が少し可笑しかった。

そしてその後、一つだけ聞いた。

「じゃあ、もしなんか言っただ居なくなってもたらどうする？」

ここまで言っただ平次は後悔した。こんなことを言っただらまるで今から危険なことをしにいくと言っただようなものだからだ。しかし蘭はそれに気づいているのかいないのかそのまま、すぐに答えた。

「耐えられるかどうかはわからない。でも待つわ。それでダメだったら私はもう限界かもしれない。けど今までこんなことがあつて少しは待つことを覚えた気がするから」

そこまで言っただ蘭は平次に向かって照れ笑いを浮かべた。そしてそ

のまま立った。つられて平次も席を立とうとしたそのとき声が聞こえた。

「蘭ちゃん、ええ考えやん！ウチは笑ったりせえへんで！！」

file 16・蘭のキモチ（後書き）

唐突ですが、次で第1章は終了いたします。

新しく違う小説として書くのではなくて、この中での区切りみたいなものです。そんなに気にしなくてかまいません。

前にも言ったとおり蘭と和葉の考え方の違いを見てもらえれば嬉しいです！

でわ（^^／”

## file 17：彼らの心境

気が付いて後ろを見ると、和葉がいた。

「和葉ちゃん、何でここに？」

蘭は驚きが隠せない様子だった。同様に平次も驚いていた。和葉は蘭の質問の返事をした。

「さっきうち、蘭ちゃんと一緒にコンビニに行く予定やったやんかー。それを断って1人で出かけるとこまでは良かったんやけど、大丈夫と思うてたら全然分かんかってー。しゃーないから帰って来たんや。そしたらな、平次と蘭ちゃんが2人で深刻そうな顔してたから気になってしもて・・・」

和葉は照れくさそうにそういった。

「ごめんねー。やっぱり付いていけばよかったね」

「ええって。うちの買い物なんやし」

そう和葉が行った後蘭は和葉を近くに引っ張った。

「もしかして、私と服部君が付き合つか話してると思った？」

和葉はすぐに言い返した。

「思ってたへんよー！！だって、うちは平次のお姉さん役やからそういうのは知っとなあかんやんー！！」

そうは言ったが、和葉の顔は真っ赤だった。蘭はそんな和葉を見てちよつとからかった。

「顔に出てるわよつ。和葉ちゃんやっぱ可愛い！」

そういつて和葉を抱きしめた。

「ちよつと蘭ちゃんっ！！」

和葉はちよつと戸惑っていた。その後、しばらくはさっきの話題で盛り上がっていたが、和葉はふと一言漏らした。

「でも、さっきの平次の質問、コナン君と同じやったね？しかもなんかリアルに聞こえたことあらへん？」

そこまで聞くと蘭は急いで、平次を和葉から離して問い詰めた。

「ねえ、服部君、もしかしてあなたたちなんかキケンなことをするつもりじゃない？」

「ええっ！！そんなことあるはず無いやないか」

平次はそう切り返したが、うろたえようから見ても、それは嘘だと分かった。

「うろたえてるじゃない！やっぱキケンなことをするのね！もし本当にするのなら和葉ちゃんにすべて話したほうがいいわ」

蘭がそこまで言ったとき、真下から声が聞こえた。

「それは止めておいたほうがいい」

その声の主はコナンだった。

「どうしてよ！！和葉ちゃんは何も知らなかったら、服部君のこと  
でいろいろ悩むことになるわ・・・」

そこまで言ったあとうつむいた。蘭は自分と和葉を重ね合わせて考  
えているようだった。それを感じて、コナンは胸が痛くなった。そ  
んなコナンの気持ちを察して平次が言った。

「姉ちゃん、もし俺が言うても和葉は悩むで？それに、姉ちゃんが  
言っただけだったつちゅー気持ちに分かるけど、知ることによって  
命のキケンにさらされるんや。それでも工藤は言った方がええと思  
うたから、姉ちゃんに言うたんや」

「でもっ！！！」

「時がきたらいずれ話さなあかんのや。それやったらキケンになら  
へん方を選んだほうが賢明やろ？」

それを聞いて、蘭はうなずいた。平次はすべて本音を言った。だか  
らこそ、それを聞いて納得してくれた事が嬉しかった。

コナンはそこまで聞いて、言った。

「俺が言いたかったこともそんな感じだ。だからしばらくは言うな  
よ」

「わかった。時が来るまでは言わない」

そうして3人は和葉の元に戻った。

和葉は何を話してたのか聞いてきたがコナンを使って何とかごまかせた。

## file 17：彼らの心境（後書き）

これで1章は終わりとなります!!

それでは2章をお楽しみください

2章ではやつと快斗&青子が出てきます。

少年探偵団etc… もどんどん出して行こうと思います！

今回のサブタイトル思いつかなかったのでこれにしてみました、  
なんかもつといいのを思いついた方がいらっしやいましたら教えてください！

file 18・内部作戦by組織

ジンとウォツカは仕事で東京と少し離れた大阪へ行っていた。  
その日の天気は快晴で、午後から雪や雨が降ると予報されていた。  
その予報通り午後からは雪が降って来た。

「兄貴、雪ですぜ」

「ああ」

ジンはそれだけしか言わず、ただ無意識に運転していた。  
その後、ジンは珍しくタバコを車道に落としてしまった。  
そんな普段の様子と違うジンを見て、ウォツカが声をかけてきた。

「兄貴、どうかしたんですかい？」

ジンは少し黙っていたがやがて口を開いた。

「ああ、昔のことを思い出してな」

「どんな話なんですかい？」

ウォツカはジンにさらに聞いた。

しかしジンはそのまま沈黙して答えてくれなかった。  
ウォツカはもつと聞いたそうだったが、状況を察し、これ以上聞か  
なかった。

その代わりに違う話を持ち掛けた。

「例のプロジェクトはどうなるんですかい？」

ジンは珍しく丁寧に教えてくれた。

「例のプロジェクトのことか。安心しろ。少しでもスパイの疑いがあるやつには、たいした仕儀とはさせないつもりだ。情報も今回は必要最低限しか流してないからな」

そこまで言ってウォツカはジンをたたえた。

「さすが兄貴ですぜ！そこまで考えてるなんて！」

ジンはその言葉を訂正した。

「これを考えたのはあの方だ。まあ、俺も少しは考えたがな」

「これで奴らを始末することが出来ますぜ」

ウォツカのその言葉を聞いて鼻で笑い、独り言を呟いた。

「フン・・・工藤新一・・・か。楽しみに待ってるぜ」

2人を乗せた車　　ポルシェ356Aは順調に大阪まで進んで行った。

**f i l e 1 8 ・内部作戦b y組織（後書き）**

ついに第二章作成しました！！

・・・って変にテンション高いですねッ（汗）

2章は1章と違って気持ちだけじゃなくて、内容もどんどん入れていこうと思っています！

今後もぜひ読んでください！

p v 2 0 , 0 0 0突破しました！！

## file 19：連休明けの登校／朝の様子

次の日、とうとう休日も終わり、蘭は帝丹高校、コナンは帝丹小へ行かなければならなかった。

「ごめんねー。せつかく来てもらってるのに2人に留守番させちゃって。お父さんもないから自由にしてて。ここに入ってるお金は好きにしていいいからね」

蘭はせつかくきてもらった平次と和葉に申し訳なさを感じていた。しかし、逆に和葉は困ってしまった。

「そんな、蘭ちゃんええって。元々うちのせいなんやから。じゃあ、また後でな。いてらっしゃい!!」

そうやって和葉は蘭を見送った後蘭の部屋へいった。

コナンは今日は蘭のあとに登校する予定だったので、部屋には平次とコナンだけが残った。

まだ、歩美たち少年探偵団は来てなかったので、しばらく2人で話していた。

「工藤が小学校行くななんてなあ。みんなが知ったら笑えるで!!」  
東の高校生探偵が小学校へ登校したのか!!』  
『みたいな感じで冷やかされるんちゃうか?」

平次はコナンが小学校へ登校するのを見るのは初めてだった。今のコナンの状況を知っている平次にとってその光景を見ることが面白くて仕方がなかった。

そんな平次を見て、コナンはいらだってきた。

「俺だって好きでこんな姿になってるわけじゃねえんだ！！笑うな！」

その気持ちをあらわすかのように、コナンから殺気が漂っていた。平次はそんなコナンを見て一歩後ずさった。そんな風に話していると下から声が聞こえてきた。

「コナン君！！一緒に学校いこ！！」

その声は歩美の声だった。続けて、他の声も聞こえてきた。

「コナン君、早くしないと学校遅刻しちゃいますよ！」

「おっせえなあ。コナン早く降りてこいよ！！」

探偵団のみんなは次々にコナンを呼んだ。コナンはいつものことのように対応し、支度をしていた。

「お前って、意外と慕われとったんやな」

そんな慕われているようなところを見て平次はただただ感心していた。

コナンはそんな平次に当たり前だ、と言った後、平次だけに聞こえる声で伝えた。

「もしかしたら、もう俺らの居場所がばれてるかも知んねえ。お前はしっかり和葉ちゃんを守ってやれよ」

そこまで伝えた後、コナンはそのまま走って探偵団のところまでい

ってしまった。

平次は部屋に一人残され、

「分かつとる。和葉は俺が守つとくから、お前は蘭ちゃんをしっかりと守つてやれや」

と一人つぶやいていた。

file 19：連休明けの登校〜朝の様子〜（後書き）

第二章本編突入！！

これは、題名通りの内容なハズ！！！！です！  
登校前の様子が描かれています！

それと今週はテストのため、ストックは投稿しますが、新しくは書けません（><）  
投稿頻度も金曜までは良くないと思います。  
その後は結構投稿できると思いますけどね

それでは次回まで

## file 20・登校中の様子

場所は帝丹小までの通学路――ちょうど雪が積もると景色がきれいな米化公園のあたりだった。

歩くときはいつものように歩美、元太、光彦が前で、コナン、哀が後ろだった。

前の3人は明日ある、仮面ヤイバーの特番の話をしていた。

「歩美、今日のスペシャル楽しみ！」

「歩美ちゃんもですか！ボクも楽しみです！なんていったって、今回は仮面ヤイバーの過去が語られるんですから」

光彦も歩美の意見に賛成した。元太も話に加わった。

「ああ、今回は仮面ヤイバーの彼女が出るんだろ？どんななのか気になるよなあ」

こんなに盛り上がっている3人とは反対に、後ろの2人は組織の話をしていた。

コナンは最近になつてずっと悩んでいることを哀に相談した。

「なあ、灰原。お前は大事な人を守る自信があるか？」

哀はそれを聞いてなぜか心がズキとした。なぜだかは分からなかった。しかし、それを聞いて、哀はなぜか悲しくなったのだ。そうやって自分の中で考えていると、コナンが再び声をかけてきた。

「聞いてんのか？」

そういわれて、哀は平静を取り戻して、答えた。

「私には無理だわ。だって私には大事な人がいないもの」

そこまで言つて、哀は再び心が揺れた。なぜならさっきの台詞に違和感を感じたからだ。

しかし、今の哀には、それがなんだか分からなかった。

コナンは哀のそんな異変に気づかなかった。  
それどころかその話に納得してしまった。

「そっか。俺ももつと割り切ったほうがいいかもしれないな」

それだけ言つてこの話を打ち切り、今度は組織について話し始めた。  
哀は結局その心のもやの正体をつかむことが出来ず、この話をした  
ときのことを忘れてしまった。しかし、哀の心の中のもやは消えな  
かった。

2人は自分のことに気をとられすぎて気づかなかった。  
自分たちの背後にいる怪しい人影に・・・

## file20・登校中の様子（後書き）

コナン君と哀ちゃん中心で2〜3話続きます！

それで平次と和葉を少し入れて、その次の話（って言っても関連する話です）が続きます。

そこからあとは考え中です

大体は決めましたけどね

あとfile4、5はサブタイトル変更させていただきました！

では（\*^ ^\*）ノ

## file 21・帝丹小での誘拐

2人はそれぞれに複雑な気持ちで学校に着いた。ふと前を見ると歩美たちと距離が離れていた。追い付こうと思って走り出したその時、予想もしていなかった事件が起こった。

「キャー!!」

歩美がそう叫んだ。

そう……その時前では歩美は包丁を突き付けられていたのだ。生徒たちはグラウンドの上で身動きが出来ないようだった。

そこまでは普通の反応だった。しかし決定的に違うのはコナンの反応だった。

コナンが誘拐犯に手を出さなかったのだ。

なぜなら、その時歩美を誘拐しようとしていた人は、全身黒いスーツで身を固めた男だったからだ。

その上、バックアップしている仲間が何人かいることも分かった。

コナンと哀は顔を見合わせた。

助けるべきか迷っていたからだ。

そうなやんでいる間に、歩美はいなくなっていた。――いや、誘拐犯とその仲間が車に連れていっていた。

「歩美!!」

「歩美ちゃん!!」

元太と光彦は叫んで、歩美を見ていた。

歩美の行動を見るまでは・・・

コナンを初めとする少年探偵団はただ呆然と立ち尽くしていた。帝丹小の子供達はその場で泣いていたり、パニックを起こして家の方まで走っていったりと様々だった。

校庭には生徒しかいなかったため、コナンが担任である小林先生に報告に行こうとしていたその時、思わぬところから声がした。

「コナン君、ちょっと来て下さい！」

光彦の声だった。

有無を言わせない言い方だったので、すぐにコナンは駆け付けた。コナンがやって来たとき、2人は小さい声で話していた。

「じゃあ、元太君はこれちゃんと聞いとして下さい！」

光彦は元太にそういった。コナンはなんの事か分からなかったが、丁寧に今までの事を話してくれた。

「実はですね・・・歩美ちゃんが誘拐される前、犯人と僕らがすれ違ったの覚えてます？」

「ああ。犯人はなぜかあそこを通って行ったよな」

光彦はその答えを聞いて、空咳を一つしてから次に進めた。

「その時にですね・・・歩美ちゃんは探偵バッジを指差したんです。」

奴らに見えないようにそつと・・・それで急いでスイッチを付けました。今情報を探している所です」

コナンは感心していた。光彦が小学1年生にして、冷静さと鋭い観察力を持ち、チームワークを生かすことが出来、指示を的確に行う事ができていたからだ。

光彦は冷静さと観察力と命令力は劣るものの、チームワーク能力だけはコナンをはるかに越えていた。

それは凄いことだと思っていると、後からやってきた哀が光彦に話しかけた。

「凄いわ。円谷君、冷静に行動出来て。本当の探偵みたいよ」

哀にそう褒められ、光彦は嬉しそだった。だがすぐに気持ちを切り替えたようで、バツジに集中していた。

コナンは少し考えた後、元太に言った。

「おい、元太。小林先生に今までの事言いに行ってくれねえか？」

元太は歩美の様子が気になるらしく、露骨に嫌そうな顔になった。

「帝丹小のみんなは、今の状況に戸惑ってる。今冷静なのは俺らだけだ。たがら代表してお前に行つて欲しいんだ」

コナンはそう言って元太をなだめた。

元太はそれで納得したらしく、走って職員室へ行った。

**f i l e 2 1 ・ 帝 丹 小 での 誘 拐 ( 後 書 き )**

今回の話についてはコメントはありませんねー

しいて言うなら次回で帝丹小編は終わりって事ぐらいです! !

では ( ^ ^ ) ノ

file22：誘拐後・・・

コナンは元太が行ったのを見た後、光彦に聞きとれないほどの声で哀に話しかけた。

「これは組織の犯行だ。」

コナンは断言した。そう断言したことに哀は驚いた。

「なんで？確かに黒いスーツを着てたし、集団で行動はしてたわ。でも組織があんなに目立つ行動をするはずないわ」

哀はそう反論した。そう言ったのも当然だ。今まで人前で殺人をしない組織がいきなり学校に現れたのだから・・・  
コナンはそう考えている哀に言い聞かせた。

「お前は気配を感じなかったのか？」

「ええ、全く。いたら気づくはずだもの」

哀はそう言った。コナンはそれを聞いて笑った。

「なにがおかしいの？」

「いや。それで確証が持てたからつい、な」

コナンはそこで空咳したあと順序よく説明しはじめた。

「まず、組織だと分かる理由だけ・・・歩美ちゃんを連れ去った

奴らの顔を見たか？」

コナンは質問した。

「ええ、でも誰も知らなかったわ」

コナンは続けてもう一つ質問した。

「その時に目が本堂瑛祐とそっくりな奴が居ただろ？」

哀は一生懸命思い出していた。

「……いたわ。一番危険そうだった奴ね。……あつ、もしかして！」

コナンはその返事を待つて居たかのように笑った。そして、言った。

「そう。あれは瑛祐の姉さんだ。テレビに出てた時は水無怜奈って言われてた」

「彼女はCIAだったのね。スパイってところかしら」

「察しがいいな。じゃあ2つ目にお前が気が付かなかった理由なんだけど……」

ここで、コナンは哀のほうから光彦のほうに向いた。そして、指示を出した。

「それは俺が聞いとくから、お前は元太の様子を見てきてくれ。遅すぎるからな」

光彦は元太のときと同様に顔をしかめた。しかし予想より早く返事が来た。

「分かりました。行ってきます」

そして職員室に向かつていった。それを見送った後、コナンは話し始めようとした。しかし、それを哀がさえぎった。

「円谷君を行かせたのは正解ね」

コナンはそれを聞いて驚いた。まさか質問をしている哀からそんな言葉を聞くとは思わなかったからだ。

「お前、大体理由が分かんのか？」

哀は答えた。

「さっきのはあまり分からなかったけど、今回は分かるわ。円谷君を行かせた理由もね。むしろ私のほうが詳しいと思うわ」

哀は一息つくと滑らかに話し始めた。

「まず今回の話なんだけど――気配を感じなかったのは使い捨てのメンバーだったからでしょ。雇ったら働かせて最後に殺す人材の行かせたのはもし聞こえてたとき私がメンバーだと気づかれる恐れがあるから――あと、あれ以上聞かせないためね。でも話してる間はバツジの内容聞いてないんじゃない？」

「ああ、おそらくそうだ。あと、内容はちゃんと最初から録音してあるから安心しろ」

そこまで話して一段落着くと、2人は光彦と元太の帰りをその場で待っていた。

さすがのコナンも気が付かなかった――

同時刻の誘拐に――

file22：誘拐後・・・（後書き）

この話異常に長いですね（汗）

けど、とりあえず区切りが付きました。

次はやつと快斗（怪盗キッド）と青子が出てきます！

この話は小学校のほうより長くなるかも・・・です。

ではまた

こちらのミスで背景が黒となっていました。よって修正しております。

## file 23・留守番にてゝ意外な事実

平次はコナンを見送った後、なにもすることが無かったので、和葉の所へ行った。

和葉はドアが開いた瞬間、持っていた紙のようなものを隠した。平次はそれに敏感に気付いたようだった。

「なに見てんねん？俺にも見せーや」

そう言って手を伸ばしてきた。

和葉はそれを決して手から離さなかった。

「そんなに見せたくないんか？・・・もしかして好きな奴の写真とかやないか？」

和葉は否定した。しかし顔は赤く染まっていた。

「凶星なんやな？ちよつと見せてみい！」

平次は和葉の態度にいらついていた。好きな人がいること、またその写真を大事そうににぎりしめている事がそうさせていた。ただ、本人にはいらついている理由が理解出来ず、いらつきだけがどんどん溜まっていった。

平次はその相手を探して、殴り込みに行こうと意気込んでいた。

和葉の方は平次が奪いとれないようにすることに必死で、他の事を考える余裕は無かった。

「和葉！後ろ！！」

和葉はそう言われて後ろを向いた。

その僅かな一瞬で、平次はそれを奪い取った。

「あっ……」

和葉は声が出ないようだった。その写真を見た平次も同様だった。

「和葉、お前……」

しばらく沈黙が続いた。2人はお互い見つめ合っていたが、すぐ和葉の方が目を逸らせた。

「平次なんてもう知らへん!!」

そう行つて出ていってしまった。すぐに平次は後を追ったが、見つからなかった。

この日から2人は今までのようにはいかなくなっていた。

file23・留守番にてゝ意外な事実（後書き）

快斗&青子の予定でしたが平次&和葉を入れることにしました！  
いつも予告と違っててごめんなさい（T―T）

次こそは快斗たちだしますからね！！

ではまた

file24・快斗×青子／園子の驚き

その日、快斗と青子は帝丹高校へ向かって歩いていた。

「かつたりいなあ。何で俺がいかなきゃなんねえんだよ」

「全員参加でしょ！！忘れたの？」

2人はいつものように学校へ行っていた。違うところは目的地が違うところだ。

今日は学校交流会。だからいつもとは違う道を通っていた。

「ここって案外迷いやすいね」

「ああ・・・って青子、迷ったのか？」

しばらく沈黙が続いた。

「うん・・・実はね」

「おいおい、青子裏道知ってるって言ってたじゃねーか！」

「そんな事いつてないわよ！ここら辺来たことあるとは言ったけど」

快斗は青子の話を聞きながら、時計を見たりして考えていた。

「もうあんまり時間がねえ。そこにいる子に聞くぜ」

快斗は怪盗キッドの口調にして、その子に近づいていった。

「お嬢さん、帝丹高校ですよ？ 私たちに道を教えてくれませんか？」

その子は驚いていた。無理もない。いきなり同年代の子に敬語で話しかけられたのだから。しかしその子はすぐに気を取り直し返事してくれた。ケータイを触っていたので前を見ていなかったが・・・その子が発した言葉に快斗は驚くことになる。

「ああ、今日は学校交流会だったわね。いいわ、一緒に行きましょう。でももう少し待ってくれる？ 連れがいるから・・・って新一君？」

「えっ?!」

快斗は驚いた。まさか新一と間違われるなんて思わなかったからだ。その子は続けざまに話した。

「新一くん！どこ行つてたのよ!・・・まあいいわ。もうすぐ蘭が来るわ。私相手にそんな他人相手見たいに話さなくて良いのに。そんなことしなくてもわかるわよ!」

快斗は急いで否定した。

「俺、工藤新一じゃありませんよ!」

「えっ!!うそよ!こんなに似てる人なんているわけないもの」

「本当ですつてば。なあ、青子」

返事の代わりに青子はかばんで快斗の頭をたたいた。

「青子、何すんだよ!!」

「快斗しゃべり方おかしい!!青子にそんなしゃべり方しないじゃん」

「青子にはそんなしゃべり方は似合わないよ」

そのときその女の子には始めて青子の顔が見えた。

その子は話しかけられたときよりびっくりしていた。

その後、その子は唐突に叫んだ。

「蘭!？」

「「えっ?」」

青子と快斗は同時にびっくりした。まさかいきなり名前を・・・しかも違う名前で呼ばれるとは思っても見ていないからだ。

逆にその反応にその子のほうがびっくりした。

「あれ?蘭じゃないの?」

青子はすぐに答えた。

「私、中森青子と言います」

その後すぐ快斗をつかんで言った。

「これが黒羽快斗。新一君・・・でしたっけ。その子ではないです

よ。あなたは？」

その子は納得したようで、さっきと顔が違っていた。しゃべり方も優しくなっていた。

「私は、鈴木園子。よろしくね。」

その後3人は蘭が来るのを待っていた。

file24・快斗×青子〽園子の驚き（後書き）

待ちに待った快斗君の登場です！

（私だけかな？）

快斗出したくてたまらなかったんですよ！

やっと出せました！！

出来たら白馬君も出したいです

昨日やっとテスト終わりました！

古典がボロボロ・・・どうしましょ（泣）

12月はテストないので更新いっぱい出来ると思います！多分ですがね・・・

感想＆評価待ってます

ユニーク1万突破しました　ありがとうございます！

file 25・快斗×青子／蘭の驚き

蘭は園子の家へ行けなかった。というより、行く勇気がなかった。なぜならばそこに新一と違う女の子が仲よさそうに園子と話していたのを見たからだ。

しかし、その割には、ショックを感じなかった。ただ、その風景に違和感を感じていたのだ。蘭は勇気を振り絞っていくことにした。ゆっくり歩いていると、園子が声をかけてきた。

「あ、蘭？今日はこの二人と一緒によ！新一君と蘭みたいでしょ」

蘭は顔をあげてみた。そうしたら驚きの光景が目に入った。

「新一？私？」

蘭はしばらく戸惑っていた。

だが、雰囲気や長年一緒にいたせいかわ別人だということに気づいたようで、快斗に質問した。

「新一じゃ無いですよね？」

快斗はそれを聞いてどこか嬉しそうだった。

「俺、黒羽快斗って言うんだ。分かってくれたの初めてだよ！！君は？」

快斗は聞いてみた。聞かなくても知ってはいるのだが・・・それを知らない蘭は、挨拶した。

「私、毛利蘭って言います。隣の子はなんて言っんですか？」

蘭は快斗に聞いたつもりだったが青子が答えた。

「私はね、中森青子って言います！今日交流会で一緒だよ！」

その後青子はいきなり大きな声を出して提案した。

「そうだ！！一緒に回ろうよ！せっかく知り合っただからさ！」

園子もその意見に賛成した。

「いいわね！一緒に回ろっか。蘭もいいよね？」

「あ・・・うん。一緒に行こう」

蘭はたじろぎながらも返事をした。

蘭は本当はまわりたくなかったのだ。決して2人と居るのが嫌なわけじゃない。むしろテンポのよさが好きだった。しかし嫌だったのだ。2人を見て、蘭は心が痛んだ。

（何であの2人は私と新一と似てるの？こんなに似てたら快斗君と青子ちゃんを私と新一に重ね合わせちゃうのに・・・今はそつとしておいて欲しかった・・・）

そう・・・2人は蘭と新一に似すぎていたのだ。それが容姿だけなら良かった。しかし性格までも似ていたのだ。それは新一がいない・・・いや、新一として本人がいないという悩みを持った蘭の心を痛ませるのに十分だった。

園子はそのことに気が付いたようでなだめた。

「新一君は新一君、快斗君は快斗君よ。気にしなくていいわ」

そう言われ蘭の心は少し落ち着いた。

そんな風にして4人は登校していった。

file25・快斗×青子、蘭の驚き（後書き）

快青第2弾！！です。

これかいてて新一を思い出す蘭がちょっとかわいそうになりました。  
正体が分かってるからこそその辛さ・・・みたいな？

ぜひ評価・感想お願いします！

## file 26・帝丹高校交流会

正門前にいる生徒にパンフレットをもらい、4人は一緒に正門を通った。すると交流会のせいかいつもより人が多く、グラウンドがとても混んでいた。

今日は交流会という肩書きだが、実際は文化祭のような感じで、最初の2時間だけ理数系と文系に分かれて説明会を行うが、これも高校3年生だけで、高校2年生の蘭たちには関係なかった。

「良かったわね、高3じゃなくて。高3だったら説明会行かなきゃならなかったもんね」

園子は思ったまま素直に口にした。すると隣にいた快斗が同意した。

「ああ、説明会なんてかったりいもん行けねーよな」

2人は永遠に話続けるような勢いで話し続けていた。そんな2人の話題を変えるため、蘭は手元のパンフレットを見ながら言った。

「みんな、最初どこに行く？」

「私、ここ行きたい！」

青子はそういつてパンフレットの右上のほうを指していた。

そこは“魚の生態”について調べられているところで、パンフレットには珍しい魚がたくさんいると書かれていた。

快斗はそれを見て真っ先に否定した。

「こんなところに行けるわけねーだろ！」

蘭と園子はその反応を不思議がっていた。

「快斗君どうしたの？かわいい魚だつていっぱいいるわよ？」

蘭がそう聞いたが、快斗は聞く余裕がないようだった。

その時青子が手招きして蘭と園子呼び寄せた。

「実はね、快斗魚嫌いなもの。だからパニックになつてるでしょ？」

青子はそう耳打ちした。蘭はそれを聞いて、良心が痛み、青子に反論した。

「快斗君がかわいそうよ！違うところ行きましょ」

それを聞いて青子は言った。

「大丈夫よ。それで死ぬ訳じゃないんだからさ」

その意見に園子も同意した。

「そうね。快斗君を連れて行ったほうが面白くなるかも・・・」

「じゃあ2対1だから行くことに決定！！」

そう言つと快斗に向き直つて言った。

「快斗！早く行くよ！！」

「うつせー！行かねーよアホ子！」

「うるさいわね、バ快斗！！」

そういつて始まった喧嘩をただ2人は眺めるしかなかった。

知らない間に喧嘩は終わっていた。どうやら青子が勝ったようだった。快斗はこれで魚を見に行かせられることになってしまった。

周りの生徒はこの騒ぎに戸惑っていたが、当の本人たちは大して気にする様子もなく進んでいった。

file26・帝丹高校交流会（後書き）

最近事件続きだったので平和な彼らを書いてみました！実はこの後その様子を入れるか迷ってるんですが、どちらがいいですか？希望を教えてください！それによって決めますので！待ってます！

ついでに評価&感想もください！

file27・それどころじゃない！！

交流会も半分を過ぎた頃、その事件は起こった。

4人は外にある帝丹大学の出し物を見ていた。そのとき黒いポルシェ正門前に止まった。

「すっげー珍しいぜ、あの車。誰だろ？あれに乗ってくるの」

快斗がその車を見て興奮していると、青子がそれを止めた。

「担当の先生とかじゃないの？後から見せてもらえば？」

「そうだな、後から見にいくか！」

そのときだった。

「どけ！」

そういわれて生徒はどんどん払いのけられていった。  
1人ある勇敢な生徒が歯向かった。

「何するんだ！！ここは交流会をする場だ！用がないなら出て行ってくれ！！」

それを聞いて2人組のうちの1人は舌打ちした。

「兄貴、こいつどうしますかい。殺しますかい？」

もう1人・・・兄貴といわれた方が言った。

「ああ、サイレンサーをつけておけ」

そういつて子分――ウオツカは言った。

「お前が目的じゃねえんだよ――俺らの目的は毛利蘭だ」

「ウオツカ、余計なことを吐くな」

「はい」

その瞬間、ウオツカはその生徒を撃った。その生徒からは血がドクドクと流れてきた。

「きゃー!!」

生徒は叫んでいた。ウオツカはその生徒らに一喝した。

「お前らは黙つとけ! そうしたら殺したりはしねえよ」

そう言われ生徒たちはみんな黙った。そして拳銃を持ったまま歩いていきある場所で止まった。

「そう、お前だ。俺らの狙いはな」

そういつて青子をひったくつていった。

「何すんのよアンタたち! 女の子をさらうなんて!」

園子は勇敢にも2人に突っかかっていった。その瞬間園子の肩を銃弾が掠めた。

「うっ!!」

「こいつさえ差し出せば他のやつらは無事なんだ。黙っておけ」

「園子!!」

そう言つて蘭は園子のところへかけつけた。しかし、それが蘭であるということに2人は気づかなかった。ジンでさえも――

「俺らの目的は達した。帰るぞ」

「分かりました」

そして彼らは去ってしまった。

その後も生徒たちは恐怖におののいていた。

3人を除いて・・・

遠くでサイレンの音が聞こえていた。

file27・それどころじゃない!!（後書き）

誘拐されましたね・・・

元々はこの設定じゃなかったんですが・・・蘭ちゃんが居なくなるのは悲しかったので替えました！

自分勝手ですね・・・

けど蘭ばかりより良いかも・・・思ったり・・・

結局意見はなかったので、抜きました！

## file 28・警視庁の異変

蘭、園子、快斗が警視庁に着くと、美和子と渉が出迎えてくれた。

「蘭さん、園子さんと・・・工藤君？黒羽君じゃなかった？」

渉は快斗を見て、頭がこんがらがっているようだった。そこで自己紹介をした。

「俺、黒羽快斗です。工藤じゃないですよ」

渉は納得しづらいようだったが、美和子が上手くまとめてくれた。

「蘭ちゃん、園子ちゃん、快斗君、取りあえず上行きましょ。ここじゃ寒いしね」

そうして美和子を先頭にして進んで行った。

「ここよ」

やって来たところは机の数に合わず、がらんとしていた。

「今日はずいぶん人が少ないんですね？」

蘭が尋ねた。渉はそれを聞いてため息をついた。

「そうなんだよ。実は帝丹小でも同じ事件が起こったらしいんだ。

しかも誘拐されたのはの・・・歩美ちゃんなんだ」

「歩美ちゃんが!？」

園子と蘭はいつになく驚いていた。まさか帝丹小で――しかも歩美ちゃんが誘拐されるなんて・・・と感じていたからだ。

「そう・・・これは同一グループの犯行の線が高いんだよ・・・」

そこまで蘭に話した時、美和子が声をかけた。

「高木君!！」

そこまで言って渉を手招きしてきた。

「一応蘭さんたちは被害者なの!事件の情報をばらさないの!」

「は、はいっ」

そして2人は蘭たちの元へ戻っていった。

「ごめんなさいね、じゃあ、事件のことについて話してもらえるかしら?」

ここからは蘭と園子が協力して話していった。

「黒羽君も話すことはない?」

始まってからずっと話さない快斗を疑問に思っただけだ。

「はい・・・特には・・・」

「そう」

美和子はその態度に疑問を持っていると、園子がこっそり美和子に耳打ちした。

「そのさらわれた子、快斗君の連れなの。雰囲気は幼馴染っぽかったからシヨックが大きいのよ」

「そうだったの。じゃああまり聞かないほうが良いかもね」

その後高木が事件のまとめにかかった。

「ようするに、黒のポルシェが止まって、中の人而降りてきたら誘拐犯だった。で、奴等が男の子1人を撃って、中森青子さんを誘拐したんだね」

「はい、でも帝丹小のほうはどうなったんですか？」

「ああ、あの子達は後から来るわ。ここで待ってる」

蘭は即答した。

「はい、あの子達のことか心配ですし・・・」

「じゃあ、ここに居て。高木君を置いておくから。私は迎えに行ってくるわね」

そういつて美和子は走っていった。

file28・警視庁の異変（後書き）

久しぶりの投稿です

次は平次達出します  
恐らくですが・・・

明日はクラスマッチです。私のクラスは弱いので一勝目指して頑張ります！

では

## file 29・急に訪れる衝撃

和葉はさっきの事にショックを受けて、外を歩いていた。というよりは、蘭がいると思われる帝丹高校へ行って相談をしようとしていた。

風景がどんどん変わって行くなか、和葉は勘だけを頼りに、脇道に入った。

その時にもう2つ先の道からちらっと、衝撃の光景が見えた。

「このガキ、どうする？」

「そのまま組織に連れていきましょ。抵抗する力も無いだろうし」

「分かった。じゃ、アタシは先に行く」

そして2人組の内の一人は行ってしまった。

残った方の車に入れられている子は先程誘拐された歩美だった。

（歩美ちゃんや！このままやと連れ去られてまう！）

和葉は頭より先に体が動いていた。

合気道2段の実力で犯人に袋を当て、歩美に向かって走って行った。

「大丈夫なん？」

「和葉お姉さん！」

感動の再会もつかの間、和葉は歩美を抱いて急いで逃げようとした。しかし、犯人に頭に銃を突き付けられてしまった。

「なにやってるの？命なくなるわよ？早く乗りなさい。あなたもよ」

和葉は精一杯反論した。

「嫌や！連れていくんならうちだけ連れていき！！この子こんなに怖がつてるやん」

犯人はふつと笑うと言だけ言った。

「今回のプロジェクトにはこの子が必要なのよ。・・・待つて、あなた、毛利探偵のこの子供と知り合いじゃない？」

「知り合いやけど・・・あんたらには関係ないんじゃないん？」

（良かった。瑛祐の話が役にたったわ）

和葉にはこの時の間の意味が分からなかった。

そのすぐ後、その人は声を細めて言った。

「あの子に伝えて！お願い！あなたは解放するから！さすがにこの子は無理だけど」

その時のその人の顔が助けを求めているように見えたので、理由もたいして聞かぬまま言うことを聞いた。

「もう時間がないわ。1回しか言わないからよく聞いて」

その人は周りを気にしながら言った。

「カラスが地上に降り立つ時、血に飢え、それゆえ荒れている。それらの数が100羽を越えると、鷹達さえも召される。高き所にある巢は廃れるも、畏は廃れず。それらを喰うには、知性と行動、冷静さが試される」

それだけ言うと、和葉を置いて去った。歩美が気になるが、今は言うことが最優先と思い、これを早く伝えるべく、事務所まで戻っていく事にした。

## file29・急に訪れる衝撃（後書き）

今回は予告通り平次たちを書きました！

次も平次たちです！平次たち主体の話にしては結構長いです！

話は変わりますが、前言ったクラスマッチ勝てました！女子はバスケットですが2位だったんです！

私もシュートを2本入れることが出来ました  
感動です！

サッカーは最下位ですが、ソフトは2位でした。  
結構勝てて良かったです！

雑談（ってか自分の話）ばっかでしたね（汗）  
読んでくださった方、関係ないのにどうもありがとうございます！

では、次話で（笑）

file30・和葉を見つけた平次

和葉は走っていた。さっき襲われ、早く逃げたかったのもあるが、歩美を助けられなかった不甲斐なさ、そして、あの犯人を信用してしまふ単純さに心が痛んだから、一刻も早く助けを求めるためだ。

（歩美ちゃん、うちのせいで捕まったんや！どないしよう・・・あの人もいい人とは限らへんし、あれもよく分かったから・・・）

今平次に相談するのは気まずいが、歩美ちゃんを連れ去った犯人みたいにきけんな人物がうろついているので単独で行動するより2人で行動したほうがはるかに安全という判断のためだった。

しばらくして、和葉を呼ぶ声が聞こえた。

「和葉ア！！！！どこおるんや！」

それは紛れもなく平次の声だった。和葉はそれを見て足が止まってしまった。平次は和葉に気づいたようだった。

「和葉、和葉やな？心配したんやで？勝手に居なくなるもんやから」

和葉はその言葉を聞いてその場に泣き崩れてしまった。

「か、和葉！！大丈夫か？お前無理したんとちゃうやろなあ？」

和葉は声を出す代わりに首を振った。和葉は平次に言われて少し落ち着いたようだった。

平次は和葉が泣き止むまでずっと隣にいた。和葉が抱き着いても抵抗せず、なにも言わず、和葉の好きにさせた。

「平次、もうええ」

和葉は平次に言った。平次は和葉を離すと、和葉に聞いた。

「何があつたんや？大変な事があつたんやないか？」

和葉はさっきまでの事を平次に話した。

「あのな・・・歩美ちゃんが誘拐されてしもてん。うち、助けられへんかった・・・」

平次は悩んでいる様子の和葉に一言言った。

「泣くなんてお前らしくあらへん。いつもの和葉やつたらもつとポジティブやないか」

平次にそう言われてはつとした。和葉は言葉が詰まりながらもゆつくりと話した。

「そつやな・・・色々あつたから・・・甘えがあつたんかもしれへん・・・今後はちゃんとせーへんとな」

平次はそんな和葉を見てニカツと笑った。

「な、平次？あのな・・・」

「なんや？」

「ううん、何でもない」

「なんや、和葉腹空いとんか？」

「ちゃうわー!!」

結局和葉は聞かなかった。これ以上平次に聞きたくは無かった。

今までの関係を保ちたかったから・・・

file30・和葉を見つけた平次（後書き）

今回は普段と違う平次を書いてみました！

普段とうって変わって優しい平次。

なんか良いですね・・・（って私だけ！？）

第13作の映画「漆黒の追跡者」早く見たい！

劇場版特報とか特に最高ですよ〜！！

関係ない話がまた入りましたね・・・

ではまた次回も見てください！

file 31・お待ちかねの・・・

帝丹小学校で事件が起こって1時間ほどたった頃、学校に千葉がやって来た。

「君達！！大丈夫かい？」

千葉は血相を変えていた。

それを見てコナンが真っ先に駆け出した。

哀も一緒に走った。

元太達は他の子を慰めていたので、気づいてない模様だった。

「うん、僕らは・・・でも歩美ちゃんが・・・」

「やっぱり。その情報を警察も聞いたんだ。服部と言う少年が電話してきたんだよ」

哀はそれを聞いて怪訝そうな顔をしていた。

「どうしたんですか？灰原さん」

慰め終わって駆け付けて来たばかりで息を切らしていたが、大きな声で光彦は訪ねた。

「なんでもないわ。ただ千葉刑事の表情が気になっただけよ」

みんなは一斉に千葉の顔を見た。  
いつもの顔より苦しそうだった。

「千葉刑事、どうかしたんですか？」

光彦は心配そうな顔になっていた。そんな顔をされ、千葉は少し戸惑っているようだった。

「あ、ああ・・・ちよつと撃たれてね・・・」

そう言つて腕の包帯をみんなの方へ向けた。そこからは生々しく血の跡が付着していた。

「大丈夫ですか？」

真剣な表情で聞いた。千葉は笑つて返事した。

「大丈夫だよ！このぐらい！」

コナンはそれを聞いて急いで質問した。

「誰にやられたの？」

その話し方には少し焦りが読み取れた。千葉はそれを怪訝がつていた。

「あつ、ああ・・・これはね、知らない間――いや、1キロぐらい遠くから撃たれたんだ。後から目撃証言があつたんだよ」

（多分キャンティとコルンだ）

コナンは思った。そこまで腕のいいスナイパーは2人しかいないと思つていたからだ。

コナンが推理の迷路に入っていったところ、千葉が話題を変えた。

「そうそう。君達を迎えに来たんだよ。つい長話しちゃったね。僕はこんな腕だから由美さんに来て貰ってるから早く行こう。怒ってるかな・・・」

「学校は行かないでいいのか？」

元太は訪ねた。

「ああ。学校側には言ってるから。今まで、警察に協力した、少年探偵団を連れて行きます、ってね」

そうしてコナン達はパトカーに乗り込んだ。

file31・お待ちかねの・・・（後書き）

最近は投稿頻度が上がりました！

っていつてもここ3日ですけど・・・

それに最近は早寝できるところがいいですね！！

カンペキに雑談ですが・・・

今回はちよつと戻って少年探偵団編を書きました！  
忘れてるかも知れませんが・・・

後瑛祐君はもう少ししたら出ます！！

では、また！！

## file 32：知られざる真実

4人は呼ばれるままに、由美さんの待つパトカーへ進んでいった。

「もう！結構待ったんだからね、千葉くん！」

「由美さん、ゴメン。じゃあ、君達乗っってくれるかな？」

「……はい……」

そうして、みんな乗り込んでいった。

パトカーはすぐ発進した。由美さんは運転しながら話し掛けてきた。

「でも、災難だったわね。誘拐だなんて」

コナンが返事した。

「一番大変なのは歩美ちゃんさ。で、由美さん、なにか警視庁で大きな事件がほかにあったんじゃない？」

由美は驚いて後ろを振り返ってしまった。

「え？よく分かったわね。どうして？」

コナンは推理を話した。

「まず気になったのは由美さんが来たこと。交通課が来るのはおかしいと思ったんだ。あと、怪我してる千葉刑事が来たこと。わざわざ怪我してるのに来るのはおかしいと思って。一瞬スパイかなと思ったけど、事件の事、話してくれたから違々と推理できたんだ」

由美は感心していた。

「コナン君凄いわね。ーーじゃ、ホントは言うつもりなかったんだけど、役に立つかもしれないし、教えてあげるわ。これはホントに極秘なの。周りにばらしたらだめよ」

「うん」

由美は分かりやすく説明し始めた。

「実はこれは同一犯なの。手口、荒さ、用意周到さからね。でも今までこんな犯罪グループを見た事がなかったわ。これは犯人の慎重さもあるんだろうけどーー」

そこで一瞬空気が止まった。由美はそこで息を整えると言った。

「警察ーーーしかもかなり上層部の関わりがあるわね。これはかなり真実味がある情報を使ってるから、信じてもらっていいわ」

パトカーは警察署前に着いてしまった。由美は千葉に命令した。

「千葉君、あなたは先に行つて。私はこのパトカー下ろしてから行くから」

「子供達は下ろします?」

「私が連れていくわ。じゃ、後でね」

千葉はパトカーを降りると。歩いて表玄関へ行つた。

それを見届けるとパトカーは違う道へ進んだ。

「ミニパトの姉ちゃん、こっちじゃねえんじゃないか？」

「ええ、ここから先は聞かれたら困るからそうしたの。それで、重要なのはここから。警察上層部って言ったけど、正確には‘上層部’に対して発言力がある人’なの。あと、そういう情報は警視庁に來てから流れるの。で、そのスパイと思われる確率の高い人は表向きには3人いるわー！まず、白鳥君、次に松本警視、後、白馬総監よ。みんな権力があるわ」

由美は一息着くとミラー越しにみて、いつになく真剣な表情になった。

そして話した。

「裏向きにはね、2人ー！千葉君と高木君よ」

file32：知られざる真実（後書き）

由美サン＆少年探偵団編、もう少しです！

次はどうしようかな、と考え中です。

文章がなかなか思い浮かばないんで・・・

瑛祐君はこの章（？）が終わらないと出せません（汗）

出来るだけ早く進めたいんですけど、書きたいことが多くて、行きませんね・・・

次は来週までには投稿できると思います！

途中で投稿している部分がありました。すみませんでした。

file33・警視庁前での談話

「えっ！」

みんな驚いていた。

光彦と元太はすぐに否定した。

「そんなはずありません！！あの2人に限って・・・」

「そうだが、ミニパトの姉ちゃん。あの2人は意気地ないからな」

由美は少し笑って言った。

「だといんだけど・・・でも高木君だけは敵じゃないといいな・・・」

光彦は悩んでいる由美に思い切って聞いてみた。

「どうしてですか？高木刑事も千葉刑事も友達じゃないんですか？」

由美は小さな声ながらも教えてくれた。

「高木君はね、美和子をお父さんや松田君の影から救い出してくれたから・・・私じゃ出来ないわ、でも高木君はやってくれた。だからあまり敵に回って欲しくないの」

由美はそのあと、高速でパトカーを運転し、警視庁の前の駐車場に綺麗に車を止めた。

「意外と上手いのね」

灰原が言った。

「一応交通課だからね。じゃ、行くわよ。降りてちょうだい」

「はい」

そう言いながら車から降りた。

「そついえば千葉君は？あれっきりだけど」

由美はふとそう発した。

「知らないわ。お菓子でも取りに行ったんじゃないの？」

哀が皮肉を言ったときドスドスと走りながら、千葉がこっちに向かってきた。その手にはお菓子は無かった。

「あら、お菓子は持ってなかったのね」

千葉は哀のその言葉を聞いて反論した。

「僕だってそこまで食い意地張ってないさ」

そのあとすぐ由美の方に向き直った。

「そんなことよりも、さつき佐藤さんが、由美さんに予定より遅いって怒ってましたよ。寒そうだったし、相当怒ってたから僕に八つ当たりされたんですから！一応、怒りを鎮めるために戻ってもらい

ましたよ」

千葉は由美に事のあらましを話し、訴えた。しかしそのことは無視された。

由美は呟いていた。

「しまったわね．．．どうしよう．．．美和子真面目だからな．．．」

元太は由美を慰めた。

「まあいいじゃねえか！！理由は適当につけようぜ！」

「そうね。元太君ありがとう」

そしてコナン達は佐藤達のいる所へ向かって行った。

file33・警視庁前での談話（後書き）

とうとう冬休み突入しました！！

嬉しいですね、やっぱり！！宿題がなければ最高なんですが・・・

投稿もめっちゃ遅いんでもっと早く進められるよう頑張りたいと思います！！

これで探偵団編は終わりです！！ちょっとネタバレなんですが次は組織です！しばらくします！！

また会える日まで、すごく長くなりそうです。

それでも読んでくださったら嬉しいです！

では

何度もミスばかりで申し訳ありません。

サブタイトルにミスがありました。訂正いたしました。

## file 34・拉致された歩美

組織に捕まった青子と歩美は・・・

「なんで私を誘拐したの？」

歩美は聞いた。犯人は少し話すかどうか悩んでいたようだったが口を開いた。

「あなた、もしかしてシェリーではないの？」

歩美は初めて聞いたその言葉に首をかしげていた。

「・・・やつぱり。おかしいと思ってたのよ。どうしようかしら。まあ、向こうのせいにすれば・・・」

「お姉さん、どうしたの？」

「うつん、なんでもない。ところであなた、外部と通信する手段あるかしら？」

歩美はワナかも知れないと迷ったが、それはそれで仕方がないと思い、探偵バッジを出した。

「これは？」

「私の友達にかけれるの。コナン君が一番かける回数が多いかな」

その人は少し笑ってそれを盗った。

（コナン君か。好都合ね。良かったわ、連れ去ったのがこの子で）

歩美は、

（余計なこと言っちゃった・・・あーあ）

と思っていた。

その人はそれに口元を近づけると、話し始めた。

「コナン君ね。聞いてもらえるかしら。本堂瑛海よ。私達は哀ちゃん  
の代わりに違う子を誘拐しちゃったの。仕方がないからこのまま  
連れて行くけど、ジンに何か言われるかもしれないから、その時は  
コナン君、お願いね。ーコナン君に頼むのはちょっと変かな。  
それで、組織は蘭ちゃんも誘拐してるわ。気をつけて。あとー  
今、組織は崩壊しかけているわ。それがどうなるかは分からないけど、  
アジトを変えるって事だけは知ってて。もうすぐ・・・何かが  
起こるわ。じゃないとこんな無謀な賭けには出ないはずだから。じ  
ゃあ、よろしくね」

そういった後、探偵バッジを壊した。

「何してるの！！せっかく通信できるのに！！」

歩美は言った。すると瑛海は歩美の口に手を当て、こうささやいた。

「だからよ。もしばれたら、命をなくすかもよ？こうしてる方が安  
全だから。それに、コナン君ならきつと気づいてくれるわ。ね、安  
心してて。私が守ってあげるから」

「うん、分かった」

2人は車に揺られながら、組織のアジトへ向かっていった。

file34・拉致された歩美（後書き）

今回はすぐ書けました。

今回は結構前から考えていたのでね

おまけに近いんですが、組織のことも書きたかったんです。やっぱり組織との戦いですから

冬休みは毎日投稿頑張りたいと思います！

結構大変ですけどね（汗）

ではでは！

## file35・誘拐された青子

一方青子のほうは・・・

「兄貴、どうしますかい？この女。アジトまで行くんですかい？」

ジンは小さい声で答えた。

「工藤新一の彼女だ。おびき寄せるおとりに使える。生かしておけ」

青子は急な展開に戸惑っていた。

（私が有名な工藤君の彼女？ありえない！！だって会った事もないし）

青子はそのことを言いたいのには山々だったが、口にタオルを巻きつけられていて声が出せなかった。

そうしている間に、ウォッカがジんに質問していた。

「工藤新一は毒薬で殺したはずじゃなかったんですかい？」

ジンはさっきよりもさらに不機嫌そうな顔で答えた。

「ああ、あのガキは生きている。あのデータを最後に更新したのはシェリーだと分かったからな。それに、あの方が、その情報をつかんだらしい」

「そうなんですか。意外ですねえ。あの方が情報を提供するなんて・・・」

青子はそれを聞いてさらに心配になってきた。

（なによ！！工藤君が殺されたとかされてないとか・・・あの方って誰？）

ジンはウォッカに最後に一言言った。

「あの方が出てくるなんて、かなり重要な件だからな。工藤新一が生きているかどうかで、この件が成功するかどうかが決まるのだから。ウォッカ、無駄話はここまでだ。その女に聞かれてたら困るからな」

それから車の中は静かになった。

ジンは窓を開けて、一言吐いた。

「工藤新一、お前の居場所をさっさと突き止めてやる。首を洗って待ってる」

そういつて握っていたタバコを握り潰した。

ウォッカは怖い顔をしているジンを見て心の中で後ずさった。

この車は、アジトに向かって進んでいく。3人を乗せて――

file35・誘拐された青子（後書き）

毎日投稿頑張るつもりのangelです

今日は眠いけど頑張りました！

自分というのかもしれませんが応援して下さい  
じゃないとめげそう・・・  
では

file 36・夜の約束

コナン達、蘭達、平次達はみんな警視庁に集まっていた。

「新——コナン君、大丈夫だった？」

「あ、うん。でも歩美ちゃんが、誘拐されて・・・」

蘭は一気に顔が暗くなった。

「あ、私達も青子ちゃんが・・・」

「青子ちゃんって誰？」

コナンは初めて聞いたその人の事が分からなかった。蘭はそれを聞き、答えてあげた。

「ここに居る快斗くんの友達よ」

コナンは快斗の顔を見て快斗に一つ聞いた。

「僕と会ったことない？見たことある気がするんだけど」

快斗は急いで否定した。

「いや、ねえよ。コナン君、ちょっといいか？」

その急な願いにちょっとびっくりしていたが了承した。

「いいよ、快斗兄ちゃん」

そして2人は部屋から出た。人氣が無いところへ行くとコナンが先に切り出した。

「で、キッド、俺になんか用か？」

快斗は観念したように首を竦めた。

「やっぱバレたか。ま、仕方ないな。用件は1つだ。今日探偵事務所行くからな」

コナンは口に出してこそ言わなかったが、はあ？とその顔が物語っていた。

快斗はそれを無視して、最後に一言だけ言った

「取りあえず言いたいことがあるんだよ。大事な事がな。警察にはスパイが居るようだし、なあ、名探偵？」

「ああ」

コナンは名探偵と言われても否定しなかった。それは正体はばれていると薄々感じていたからだ。そんな事を思いながらぼーっとしていると、快斗が声をかけてきた。

「じゃ、戻るか」

そうして、戻って来ると佐藤が怖い顔をして立っていた。

「コナン君、遅いわ！もう聞き終わっちゃったわよ」

「ごめんなさい」

コナンは謝ると元の場所に戻っていった。すると光彦がこっそり聞いてきた。

「コナン君、快斗さんとなに話してたんですか？」

「あ、ああ。なんでもないさ」

「ふーん」

歩美は何か納得していないようだったが、無理やり納得したようで、元太たちのところへ帰っていった。

それで、気を抜いていると何者かに持ち上げられ、廊下に出された。

「なにやってるんだよ！服部！！」

平次はコナンが怒っているのに気がつくのと急いでコナンをおろした。

「すまんすまん。さっき会ったばかりのやつと何であんな親しげに会話してるのか気になってなあ」

コナンは同じことを聞いてくる平次にいらだってきていたが、それでも親切に答えた。

「お前は、俺の部屋に居るんだからそのうち分かるさ」

「分かったわ。じゃ、今日はずっと居るで！！」

「勝手にしろ」

そんな風に普段の会話のまま終わった。

この日は特にめまぐるしく事件があつた。後は夜に怪盗キッドが来る。それをコナンは待っていた。

## file 36・夜の約束（後書き）

昨日は仕返しのX' M a sを投稿していたのでこっちは投稿できませんでした。

けど、毎日投稿は続いています！！  
割としんどいですけど・・・

今回の警察に裏切り者がいるってのは最近終わったドラマ“ブラッディ・マンデイ”に似せて見ました！！

では、また明日（？）

アクセス4万突破！！  
いちいち細かいです（汗）

## file 37・空から現れる鳥

とうとう夜になった。

もうすでに満月が昇った頃、そこに白色の鳥が飛んできた。  
その鳥はあいていた窓に止まると、入ってきた。

「待たせたな」

そういつてそれは入ってきた。

これに最も驚いていたのは平次だ。

「怪盗キッドやないか！工藤、早う捕まえんと」

平次が慌てふためいているのをコナンが止めようとしたとき、代わってキッドが止めた。

「まあ、落ち着け。俺はこんな格好で来たが、キッドとしてじゃない。工藤君と同じ立場に居る高校生として来たんだ」

キッドが衣装を脱ぐと、平次はいろいろ言つのをやめ、真剣に話を聞くことにした。

「で？何があつたんだ？」

コナンは言うように促した。キッドはゆっくりと話し始めた。

「俺は黒羽快斗って言うんだけど、8年前に親父を亡くしたんだ。  
そのときの犯人がパンドラって言うんだよ。彼らは宝石を搜してる。

それで、お前が新聞に載らなくなったとき、よく調べたんだ。そして目撃情報があったよ。あの日なその男2人と接触したのを見たってな。しかも黒っぱかったらしい。だから、ちようど会えたことだし話そうと思ってな」

そこまで話すと、コナンが聞いた。

「何で言い切れるんだ？ ニュースではステージで亡くなったって言うてただけ」

快斗はそのときのことについて話し始めた。

「あの時、抜け道があるはずだったんだが、塞がれてたんだ。そのせいで死んだといわれてる。死体がいらいしいけどな」

コナンはその話を聞いて考え込んだ。その間平次が話していた。

「何で、宝石を捜してんのやろ？」

そういわれて快斗は盲点を突かれたようだった。

「なるほどな、それも調べるか」

そっという話をしているときコナンは話しかけた。

「キッドの行動範囲から見て、東京に住んでんだろ？ なんか分かったら教えてやるよ」

「ああ、あと俺、お前ら手伝いてえんだけどいいか？」

コナンは頷いた。

「ああ、逆にお前が居たほうが良いかもしんねえしな」

そういったら、快斗はキッドに変身した。

「じゃ、また」

そういうと去ってしまった。

「お前と同じようなやつが居たなんてな」

平次が言ったのと同時にコナンに電話がかかってきた。

「はいもしもし?」

「クールキッド? 明日来れるかしら? 夜よ。あのときの代わりの会議ね。あと瑛祐君、君に話があるんだって」

その後細かい予定を聞いた後、電話を切った。  
平次がその後聞いてきた。

「俺も行つてええか?」

「ああ、迷惑かけんじゃねえぞ」

コナンは快斗に電話をかけようかと思ったが、結局かけるのをやめた。

コナンは明日を待つ。組織撲滅に向けて――

## file37・空から現れる鳥（後書き）

知らない間に37話も行っていましたね・・・  
時が経つのは早いなあ・・・

よくよく考えたらコナンたちの1日を私は1ヶ月ぐらいかかって書いてますね（汗）

それに元々40話ぐらいしか書かない予定がもう40話行っちゃう？  
やばいですねー；

下手したら60話越しちゃうかも（-\_-）；

2つに分けようか最近考えてるんですがどうでしょう？よかったら新しい話の案と一緒に教えてください！いろんな方の話聞きたいので・・・

新しい話については人物を誰出して欲しいかを主に募集してます！！

では

## file 38・FBIの談合

次の日の夜――

コナン、平次はFBIの集まりに来ていた。

「ここで何を話すんだ？」

平次がこっそり聞いてきた。

「計画を立てたりするんだよ」

話していた所に瑛祐がやってきた。

「待ってたよ、コナン君、いや、工藤君って言った方がいいかな？」

平次は驚いたが、もう口を挟まなかった。

コナンは言った。

「どっちでも。で、なんで俺に会いたかったんだ？」

瑛祐は待っていたと言わんばかりの顔をして、話しはじめた。

「これは姉さんが前、言ってたんだけど・・・」

少し間を置いてから話しはじめた。

「組織は表向きのボスと裏のボスの2通りあって、裏のボスが主権を握ってるらしいって。後、組織は大きなプロジェクトを始めるって」

コナンはそこまで聞くと我慢できなかった。

「なんで今まで言わなかったんだよ！」

コナンの気持ちとは反対に瑛祐は静かだった。

「今まで、信用できる人がいなかったんだ。やっと君に言おうと思ったんだ」

そこまで言われるともう否定出来なかった。

「分かった。これでちょっと推理する」

コナンが推理をしていたら、いきなり博士の隣人の沖矢昴がやって来た。

その隣にはジョディもいた。

「聞いて欲しい事があるの。こつちを向いてくれる？」

そう言われ、みんなそつちを向いた。

平次はコナンに聞いた。

「あれ、俺らが前疑ってた奴やんか。FBIの人間やったんか？」

「ああ。今は仲間に近いな」

コナンがそこまで言ったころ、ちょうどジョディが昴の説明をしていた。

「……今回手伝ってくれる事になった沖矢昴さん。一緒に闘ってくれるそうよ」

他の人は昴の登場に喜んでいたが、コナンは喜べなかった。それに平次は敏感に気がついた。

「どうしたんや？なんか心配そうな顔やで？」

コナンはそのわけを平次と瑛祐だけに言った。

「実はあいつから灰原は組織の臭いがするっていったからな。一応、信頼してもいいと思うけど、少し心配だな」

瑛祐がそれを周りにいた人に言おうとしたのを急いで止めた

「ダメだ。今、FBIは不信感が高まってるんだから余計な事はするな」

そこまでいわれて、まだ言おうとするほど瑛祐は馬鹿では無かった。

話が終わったコナンは1人になっている昴に近づいて行った。

file38・FBIの談合（後書き）

やっと瑛祐君出せましたよ  
遅かったですね・・・

でも楽しいですよ！！  
書いてる時は・・・

もし話でこの人出して欲しいとかあったら教えて下さい！

出来るだけ入れます

では

file 39・昴の真実

「ねえ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

コナンはそう言って昴を呼んだ。昴は意外にもすぐに来てくれた。

「なんだい、コナン君、話って」

コナンは単刀直入に言った。

「昴さん、赤井さんじゃない？今はバーボンとして組織に居るでしょ」

昴は拍手した。

「さすがコナン君、90%当たってるよ。理由は？」

昴は訪ねた。

「まず、赤井さんっていう理由は、灰原を殺すチャンスがたくさんあったのに殺さなかったことかな。あとは条件が一致したってのが大きい。バーボンっていうのは聞いてた条件と、赤井さんの能力が一致してるから」

昴は口を開いた。

「なるほど、意外と証拠が少ないね。後、その推理には一つ間違いがある」

そこで息をつくと話しはじめた。

「今、組織にはいない。死んだことになってるからな。ジンは俺の正体が分かっていても、追放出来なかったんだよ」

すでに昴の口調は赤井の口調になっていた。

そして続きを話した。

「あの方が・・・といっても会った事はないが、お気に入りらしくてな、最近まで抜け出せなかったんだ」

赤井はコナンだけに耳打ちした。

「組織の中の主要人物はそれぞれ深い関係がある。そこを潰せば、恐らく勝てるはずだ。後はジョーディの案次第だな」

そこまで話した時、ちょうど、哀から電話がかかってきた。

「なんだ？」

コナンは少しかつたるいような返事をした。哀は逆に危機迫る感じの話し方だった。

「あなた、探偵バッジの録音してるでしょ！今すぐ聞いて！」

「なんだ？今忙しいんだけど」

「いいから早く！」

哀のあまりの剣幕に押されて急いで録音を聞いた。

聞き終わって哀に再び電話した。

「聞いた。歩美ちゃん取りあえず無事みたいだな」

「ええ、でもそれもいつまで持つか・・・」

コナンは深刻になった雰囲気消すため言った。

「水無さん、組織の情報言ってたな」

「ええ、それで一番大変なのは、円谷君が聞いているかもしれないということよ。あれを聞いてたら危険な真似しかねないわ」

「ああ、じゃ、それについてはまた話そう、じゃな」

そう言って電話を切った。

その同時刻には平次も電話していたのだ。

その電話では・・・

「そついや、言い忘れたんやけど・・・めっちゃ大切な事や」

そついつて前言われた暗号を言った。

平次はそれを聞いてすぐ分かったようだった。

「要するに頭だけじゃあかんっちゃーことやな。武力も人数もいるんやな。後、廃ビルにいるって事ぐらいやな、わかるんは」

平次がそう言ってしばらく話して切ろうとすると、和葉が急いで止めた。

「後、一個だけ・・・今日帰ったら話したい事があるんや。早う帰ってきーや」

和葉はそう言っていると電話を切ってしまった。

平次はさっきの事よりも和葉のこの言葉が気になって仕方なかった。平次は今日はこの言葉が頭から離れなかった。

## file39：昴の真実（後書き）

今回は昴の正体そして、希望があったので、平和を出しました！進展すると良いですねゝ（なんて無責任な！！）

今回は家のパソコンが壊れてたので直るまで、ケータイ投稿してました！今日はパソコンが直るまで投稿しなかったらこんな時間に・

一応直りましたがまた壊れるかも・・・ってのが心配です・・・

続きはまだ考えてません！！（石を投げないで！！）

けど、頑張って完成させたいと思います！！

内容はあまり考えてませんが、言わせたい言葉とかはたくさんあるのでそれをどんどん入れていきたいと思います！！

ではまた次回会いましょう！！

## file 40：話し合い

コナンも平次も同時刻に話し終わったので2人のことをまとめて話すことが出来た。

「……ってな訳なんだ」

そしてコナンと平次の話を聞いた昴、いや、赤井は言った。

「要するに組織は弱ってるんだろ。だけどアジトを変えるから手が出せない。嫌な状況だな。今すぐぶっ潰したいんだが」

赤井は今すぐにでもやりかねない雰囲気だった。平次はそれを止めさせるかの様に言った。

「でもよう考えてからやないと失敗するで」

「分かってる。だから手をださなかったじゃないか」

赤井はそんなことは当然だ、というような態度をとった。その頃瑛祐はこっそりコナンに謝った。

「話によると君の友達、姉さんに捕まってるんだろ。ごめんね」

「仕方ないさ。だってCIAの諜報員なんだから。そっぴゃお前はCIAに入るんじゃないかったのか？」

コナンがそう聞くと瑛祐は強い意志を持った顔で答えた。

「僕はその組織を倒すのに協力するよ。これは向こうに行くときから決めてあったんだ。今倒すときならやっぱり知ってる人とやりたいから」

コナンが止めさせようとすると瑛祐が言った。

「君のことだから止めさせるつもりだろうけど、僕はもう決めたから。だから無駄だよ」

その瑛祐の発言からコナンは強い決心を感じ取り、否定することが出来なかった。

ちょうどその時会議が始まったようだった。

「決まったことを発表するわ。突入は10日後に決定よ。今まで何回か試行錯誤してみたけどそれが一番いいわ」

しかしジョディ無念そうな顔で言った。

「けど、組織はアジトを変えるの。だからそれまでは情報を待つわ・・・」

それを止めたのは赤井だった。

「今思い出したんだが・・・組織は移動する場所を言ってたぞ。暗号になってたがな」

「秀？その口調は秀なの？」

ジョディはそういつと喜びのあまり泣き崩れた。

「今までみんな心配してたのよ！！どうして帰ってこなかったの！！」

「それは後からだ。今から俺が解読した答えを言う」

赤井は一息つくと言った。

「米化町2丁目の廃ビルだ」

そこまで言うと言いつつ部屋がざわつき始めた。

「おい、黙れ」

赤井のその発言に部屋は静まり返った。  
そしてジョディは残りのことを話した。

「じゃ、今日は解散。また計画前に集まってもらっわね」  
そうしてみんな帰っていった。

平次は特に急いで・・・

file 40：話し合い（後書き）

今回、結局平和を進展させられませんでした。  
明日になりますね・・・

今回書いてて気が付いたんですけどこの話めっちゃ長くなりそうですね・・・困ったなあ・・・

話は進展してますけどね！

リクあれば言ってください！！  
希望に添えるように、どんどん話の中に入れていきますので！

ではまた次回で！！

file 41：あなたの気持ちは・・・？

平次は急いで探偵事務所へと帰った。

3階のドアを開けると、和葉が立っていた。

「和葉、話って何や」

平次は単刀直入に言った。和葉は平次を引っ張って歩きながら言った。

「ここは蘭ちゃんもいるし、おっちゃんもいるやろ。それにもうすぐコナン君も帰って来るやん。だから外で話そつや」

平次は納得したのか抵抗しなかった。

それに和葉は戸惑っていた。

（いつもの平次とちゃう。やっぱうちがやろうとしてること分かつとんかなあ。一応あれでも高校生探偵やもんなあ）

そんなことを思いながら歩いていた。しばらくすると平次から声をかけてきた。

「手え繋がんでも歩けるわ！」

いつもの平次に戻って少し安心した。しかし、完全に安心したとは言えなかった。なぜならそれっきり言葉を発さないからだ。

それに耐えられなくなった和葉は急いで店を探すとそこに入っていた。

2人とも席に着くとすぐに話題を切り出そうとした。  
しかし平次は飲み物を頼んでいて、話せなかった。

「和葉は何も頼まんのか？」

「ええわ！！」

和葉は勇気を出そうとしたときにさえぎった平次に腹が立っていた。  
その怒りを腹の底に押し込め、もう一回言おうとした。  
しばらくしてもう一度言おうと決心した。

しかしまたしてもトイレに行くなどといって止められた。  
和葉はもう我慢できなかった。

「平次のアホー！！」

席を立つたばかりの平次は驚いて再び座りそうになった。  
その平次に啖呵を切った。

「うちがどんな思いで呼んだかわかってへんやろ！今日話すために  
どんだけ不安やったかわからんやろ！！」

そういった和葉の顔は泣いていた。平次はそれを見てうるたえた。

「分かった。すぐ話聞くからおとなしくせえ」

そついても無駄だった。平次たちは他の客ににらまれていたが、  
それに気が付く余裕はなかった。和葉は興奮してつい言ってしまった。  
た。

「うちの写真見たから、うちの好きな人知ってんのやろ？じゃあ、

何でいつてくれへんの！そっちから言ってくれたほうがまだ楽やったのに・・・」

そして間をおくと言った。

「うちが好きなんは、平次やってなあ！」

そこまで言つと、気を張り詰め過ぎていたのが原因か気を失ってしまった。

「和葉、和葉！！」

そう言つても反応がなかったので、客のなんとも言ひ表せない目線を浴びながら、平次はおぶって帰った。

自分の本当の気持ちを考えながら・・・

file 41・あなたの気持ちは・・・？（後書き）

待ちに待った平和書きました！（待ってない？）

次も平和ですね！

その次は・・・どうでしょう？（おいおい）

前も言いましたけどリクあったほうがストーリー作りやすいので、もし何かあれば言ってください！

基本的に載せますので！！

部活もとりあえず年末で休みなので、投稿しやすいです！

それと、新連載、元旦からの話はどうか、とコメントいただきましたが、今はこれで手がいっぱいなのでまた今度。すみません。でもまた言ってもらえれば書けると思います！

では！！

file 42・自分の気持ちは・・・？

平次は自分の気持ちについて考えていた。

（俺はどうなんやろ？和葉の事好きなんやるか？）

平次は考えてこそいたが、心の奥底では本当の気持ちは分かっていた。

だからこそその真実から逃げたかったのだ。

今までの関係を保ちたかったから・・・

平次は和葉に布団をかけると一人部屋にこもって考えた。

（和葉のこと考えとるとドキドキするな。他の奴らとは違った気持ちや。これが好きっちゅーことなんやるか）

平次はこの瞬間、和葉が好きなことを自覚したのだ。

そのすぐ後さっきの和葉の泣いた顔を思い出した。

（さっき泣かしたなあ。俺がもつと早う言つとけば良かったんか。これ、俺に似とるとか言うべきやったな。2人とも変に距離置こうとしたからあかんかったんや）

平次はそう思い、自分の行いを反省した。

しかし平次の変なプライドが和葉にその気持ちを伝えるのを許さなかった。

（でも俺は言えへんなあ。和葉みたいに強うないから）

平次はそんな自分に少し苛立っていた。  
しかしやはり言う決心はつかなかった。

しかし次の瞬間、平次は決心を変えることになる。  
さっき倒れた和葉が起きたのだ。

「平次、さっきはごめん。つい、かっとなって・・・」

和葉は平次に謝った。平次は和葉を慰めるように言った。

「そんなこともうええわ。それよりも言いたいことがあるんや」

そう言われて和葉は不思議そうな顔をしていた。

平次は一息つくと言った。

「俺、和葉に言われて考えたんや。俺が好きな人は誰やって考えた  
ら和葉しかおらん。今まで俺は自分の気持ちに気いついてなかった  
わ。今は工藤助けなあかんから無理やけど全て片ついたら付き合っ  
てくれ」

これが平次が考えた精一杯のプロポーズだった。

和葉は急な展開に戸惑っていたが、返事を返した。

「うん、ええで」

和葉はとても嬉しかった。片思いだと思っていた恋が成功したのだ  
から。

（平次・・・今、うちめっちゃ嬉しいで。自分の思いが伝わったんやから）

平次は・・・

（和葉に思いが伝わったんや。俺、嬉しいで。和葉に気持ち伝わって）

2人とも思いが伝わって嬉しく、ぼーっとしていたが、和葉は、ある一つの事に気がついて言った。

「工藤君が大変って？」

平次は余計な事を言ったと思った。

「それはやなあ・・・工藤が風邪って事や・・・」

平次はそうごまかしたが、隠せるほど甘くなかった。

「そんな嘘、つかんでええ。それよりなんなん？工藤君の危機って」

平次はそれをごまかして貰うため、新一に電話した。

「もしもし、工藤か？ーーー」

file 42・自分の気持ちは・・・？（後書き）

あけましておめでとうございます

昨日投稿出来ずにごめんなさい

毎日投稿は失敗です・・・

忙しかったんですよ・・・

ま、頑張ります（・・）

次は予想出来ますね？だから敢えて言いません  
ってか普通言いませんね・・・

では、また

リク待ってます

file 43・助けるために・・・

「ああ、服部か。なんか用か？」

コナンは冷静な対応をした。平次はできるかぎり真剣な声で言った。

「実は、和葉が工藤の危機ってなんやって聞いてくるんや。だからちよつと代わるな」

そう言つて和葉に電話を渡した。

和葉は携帯を受け取ると一言目にこう言つた。

「工藤君、危機って何なん？あの工藤君の危機なんやからめっちゃヤバイ事なんやろ？うちが思うに蘭ちゃんの悩みに関わるんとちゃうん？」

コナンはそれを聞いて驚いた。いくら平次といつも一緒に居るとはいえ、そこまで鋭い読みができるのだから。

コナンは変声機を使って工藤新一の声にして聞いてみた。

「どうしてそれが知りたいんだ？」

和葉は間髪入れずに答えた。

「うちはあるなりに辛そうにしてる蘭ちゃん見たくないんや。蘭ちゃんはな、笑つとるとき天使見たいに和ませてくれるんやから。だから、うちはそんな蘭ちゃんを助けたいんや。多分工藤君もなんか関わってるんやろ？じゃないと、あそこまで辛そうにせーへんし。だからお願い。教えてくれへんか」

和葉は自分の気持ちを精一杯伝えた。  
新一はそれを聞いて考えを変えた。

「和葉ちゃん、聞いてくれ。俺は最初、適当にごまかして終わらせるつもりだった」

そこまで言った時、和葉が怒り出した。

「やっぱり。工藤君、今まで隠しとったぐらいやから言えへん事やと思うけどなー」

そこまで和葉が言うのと耐えられなくなったのか、コナンは言った。

「続きがあるんだ。俺は最初はそう思ってたが、さっき和葉ちゃんが言った事で考えを変えた。純粋な気持ちが分かった。――和葉ちゃん、蘭の支えになってくれるか？知る事で命がなくなるかもしれないけど良いのか？」

コナンがそう言うと和葉は即答した。

「もちろん！！そのために聞いてるんやから！」

コナンは安心した。多少心配もあったが、それは気にしないことにした。そしてついに言った。

「そう――俺が今まで言えなかった事――それは工藤新一は」  
そこで変声機を外すと言った。

「江戸川コナンってことだよ」

当たり前だが、和葉は驚いた。

「そんなゲームみたいな事本当にあるわけ・・・」

コナンは諭すように言った。

「でも、本当の事なんだ。理解できないかもしれない。それでもいい。それもよく分かるからな。けど、この事が蘭を悩ませているんだ。お願いだ、蘭を支えてやってくれ」

新一の真剣な願いは和葉に届いたようだった。

「分かった。まだ、状況がよく掴めんけど、ここにいる平次にでも聞くわ。じゃ、また」

和葉はそう言って電話を切った。

和葉はまだ本当の命の危険というものを知らない。本当の命の危険を知るのはこれからとなる。新一の正体を知ることによって――

file 43・助けるために・・・（後書き）

コナン君、とうとう和葉に正体ばらしちゃいましたね（

大丈夫かな、和葉ちゃん（・|・;）

ってか私が書いたんですけどね

平次もどうなるのかな・・・

頑張ってほしいです！！

もしかしたら明日投稿出来ないかもしれませんが・・・  
投稿するかもしれませんが・・・

では、また（^ ^）ノ

file44・聞かないほうがいいの？

和葉は携帯を切ると、平次に突っ掛かった。

「平次、あんた工藤君の事知ってるんちゃうん？」

そう言われても、意外にも動じず言った。

「それは俺から聞く事ちゃう。それに、深く聞いたらあかん事もあるんちゃうか？どうしても聞きたいなら工藤から聞きや」

和葉はそう言われてはっとした。

「そうやな、うちが聞く事ちゃう。けど、1つだけ気になる事あるから聞かなあかん」

平次は納得したのか一言だけ言った。

「あんま踏み込みすぎんな」

「分かってるわ」

そう言って和葉はコナンへ電話をかけた。

「もしもし」

和葉は遠慮がちに話しはじめた。

「2回もごめんな。今話せるところにおる？聞きたい事あるんやけど」

帰る途中だったコナンは瑛祐と少し話した後言った。

「今、外にいるからまた後で。あんまり外で話せる事じゃないんだ」  
和葉は反対しなかった。

「分かった。じゃ、待ってるな」

電話を切った後、瑛祐が言った。

「君の事についてかい？僕も聞いてみたいな。興味あるんだ」

コナンはしばらく考えた後言った。

「じゃ、来るか？」

「うん、行かせてもらおうかな」

そうしてしばらくして探偵事務所に着くと蘭が出迎えてくれた。

「お帰り、新・・・コナン君。あ、瑛祐君、出すものないけどゆっくりしてって」

「はい」

瑛祐がそう答えた後コナンに耳打ちした。

「名前、まだ慣れてないね」

コナンもそつと耳打ちした。

「それももうすぐなくなるさ」

コナンはそう言うつと上に上がって行ってしまった。

上に上ると和葉と平次がいた。

「工藤、すまんなあ。和葉が聞きたい事があるっていうんや」

平次のコメントを無視したのか、答えず、和葉に話しかけた。

「俺のことが聞きたいんだろ？ちょうどみんな正体知ってるから話すな。っていつても服部は知ってるだろうけどな」

「ああ」

そついったのを合図に話し始めた。

「まず、俺は、蘭の都大会優勝の祝いにトロピカルランドに行ったんだ。それで事件があつてー」

そついつて全容を話した。

「なるほど、大変だったんだね」

瑛祐は同情するかのように言った。コナンは意外にも否定した。

「最初は俺もそう思ってたさ。けどな、それで、いいこともあったんだよ。探偵団も面白かったしな。めんどいことも多かったけどな」

そういつて笑った。それを見たみんなは、少し安心したようだった。

「何で命のキケンがあるかって事は分かったわ。で、うちは蘭ちゃんに何してあげたらいいん？」

和葉は聞いた。コナンはゆっくりと答えた。

「俺が出来ないことをしてやってくれ。それだけで良いから」

「分かった。任せとき。うちがやれば完璧や！」

平次がすかさず突っ込んだ。

「ほんまか？もしそれで出来んかったら和葉責任重大やで」

「平次は要らん事言わんでええ！」

その普段どおりの様子を見て、コナンは少し嬉しかった。その気持ちを汲み取るかのように瑛祐が言った。

「よかったね。あんまりプレッシャー受けてなくて」

コナンがうなずきながら答えた。

「そうだな。実際はわかんねえけど」

その頃蘭は、

「さっき新一、もうすぐ名前間違えることも無くなるって言ったよ

ね。あれって、キケンなことにまた首突っ込むってことかな)

その心配が消えなかった。

このことは蘭と新一を絆で結ぶのか、それか亀裂を生むのか。それは2人の信頼が関わってくることになる。

これから彼らは大丈夫なのか。それは誰にもわからない・・・

file 44・聞かないほうがいいの？（後書き）

今回は長かったですね（汗）  
量を一定に出来ません。

したいんですが・・・  
書きたいことが多くて・・・。

今週コナン無いですね・・・  
悲しいです・・・

明日から部活です。  
試合も近いんで頑張ります！！（ってこじで言っことじゃないです  
ね）

では！！

## file 45・警視庁に巻き起こる騒動

事件があつた3日後、警視庁は大変なことになっていた。それに気づいたのは目暮だつた。

「君達なんかあつたのかね？勤務時間中だが。もし言いたいことがあるんなら遠慮せず言いなさい」

目暮はそついうと周りを見渡した。そこに白鳥が目暮の元にやってきた。

「実はですね、例の事件のスパイについてなんですか、金持ちだから僕とか情報が仕入れやすいから警部とかという噂ではなく、最有力の2人が見つかったんです」

警部は音を立てて椅子から立ちあがった。

「なんだって！！誰だね、それは」

目暮は早く聞きたそうだった。それに比べて、白鳥は言いたくなさそうだった。

「どうしたんだね？」

目暮が白鳥を真剣に心配し始めたので、白鳥もこれ以上は待てないと思い、耳打ちした。

「犯人候補は高木君と千葉君です。優しそうなあの2人が有力なんです」

「・・・そうか。分かった」

目暮は自分が育てたにも等しい刑事が犯人だということが信じられなかった。しかし理解できないから怒るなどという、かつこ悪い真似はしなかった。だから、こういった返事になってしまった。白鳥もこの空気の中には居づらかったのか、早々と退散した。

「そうか、あの2人か」

目暮は知らぬ間にそう言っていた。

その頃、美和子は由美と話していた。

「今日高木君いないのよ、仕事が増えて嫌だわ」

「違うでしょ、美和子が来て欲しいのはただ会いたいからでしょ」

そういつて手に持った缶ジュースを飲んだ。

「由美！！違うって何度言ったら分かるの！！」

そう言っている美和子の顔は赤くほてっていた。しかしその後、美和子が聞きたくない話を聞かされることになる。

「そうそう、美和子、実はね・・・」

そう言ったきり黙り込んでしまった。

「なんなの、由美。あんたのキャラに合わないわよ、そういつの」

そう言われて口を開いた。

「ホントに言いにくいんだけど・・・今回の事件のスパイ、高木君にも容疑の疑いがあるって事になってるわ」

「嘘よ！高木君にそんなことできる訳がないわ！」

美和子はもう理性を維持できなかった。

「美和子、落ち着いて！それには訳があるの！！」

そういつて美和子を落ち着けた後話し始めた。それまでの間は長かったが。

「あのね、私の友達のお父さんは偉い役職についてるから教えてもらったんだけど、ちょうど警察のことが外部に洩れ始めた時期があったじゃない？あの頃から事件はあつたって言われてるんだけど、その中で1回だけ東京都の警察が全員集合することがあったのよ。その時休んだのが奇跡的に高木君と、千葉君なわけ。分かった？無罪だって証明したいんなら私も手伝うわよ」

「うん、後で頼むわね」

そういつて美和子が行ってしまった。涉にその真偽を確かめるために――

file 45・警視庁に巻き起こる騒動（後書き）

こんにちは。

投稿遅れてすみません（汗）

短編書くのに力入れすぎました（笑）

今回はリクにお答えして高佐を書いています！  
上手くいくといいですね！！この2人・・・

明日も高佐ですので！！

では、今回はあとがき短かったです・・・  
また！！

file 46・高木の元に・・・

美和子は、今日は非番で警視庁にいない渉の下へ走り出した。由美が止めようと声を出したがそれも届かず、仕事場を抜け出したのだ。

（また減給だわ。でも今はこっちのほうが大事なもの。急がないと・・・）

そんな事を思いながら走っていると偶然にも道で渉を発見した。

「高木君！！」

美和子は気づかぬ間に声を張り上げていた。高木は荷物が重いのか気づいていない様子だった。それに気づいた美和子は渉のそばまで行った。

そばまで行くと渉の肩をたたいた。それでやっと気づいたようだった。

「あ、佐藤さん、今日の仕事はどうしたんです？まだ職務時間中ですよ？」

「そんなことどうでもいいの！！それより今大切なのはあなたよ！」

渉はそういわれてもよく分からないようだった。

「は・・・はあ」

そんなばーっとしている渉の手を取って美和子は走り出した。

「さっ、佐藤さん！！何してるんですか！！」

渉は手を握られて驚いているようだった。

「いいからついて来て！！」

そういつて連れて来られた所、そこはファミレスだった。  
2人は中に入るとすぐに椅子についた。

「ごめんね、ほんと。どうしても確かめたかったの。聞いてくれる？」

「分かりました。なんですか？」

渉は少し動揺しながらも落ち着いた声で聞いた。  
美和子は周りの人々が自分達の話听不懂ないように見回してから言  
った。

「高木君・・・今回の警察で起こった事件の・・・スパイじゃない  
よね？お願い！！違うって言うてよ！！」

美和子は最初の冷静さの割りに最後のほうはかなり冷静さを失って  
いた。逆に渉は今まで以上に冷静になっていた。

「落ち着いてください、佐藤さん。何でこんな事聞くんですか？」

美和子はすでに泣きそうになっていた。

「だって・・・だって・・・スパイの可能性あるの・・・千葉君と  
高木君・・・あなた達だけなんだもの・・・」

そう言った美和子の頬を涙が伝わった。渉はいわれた事よりも、涙を見て動揺したようだった。

「佐藤さん！！泣かないでください！！お願いします！！それに・・・」

美和子は泣くのが本格化して、話を聞けないような状況だったが、渉がそういったのを聞くと、自然と泣くのをやめた。それを見計らってか、渉は言った。

「それに、僕達は将来家族と一緒にトロピカルランドに行くんですよ？今そんなことしたら行けなくなっちゃいますよ。僕は佐藤さんと行きたいです！家族と一緒に・・・」

それを聞いた美和子ははっとした顔をした。

「そうよね。高木君は私の心の闇を払ってくれた人だもの。疑う私が馬鹿だったわ。トロピカルランド、私だっと一緒に行きたいもの。それにね・・・うつん、なんでもないわ。ありがとう高木君」

「いえ。佐藤さんが元に戻っただけで嬉しいです」

そう言って美和子にキスをした。美和子はとても驚いて、慌てふためいた。渉はそんな佐藤の耳元でささやいた。

「これから大きな事件が起こることは確かです。それまでは恋人らしいことしたいじゃないですか」

「うん・・・」

・その後2人はしばらくファミレスにいた。この時を実感するために・

file 46・高木の元に・・・（後書き）

今日は新しい話を書いてたのに、次話、投稿できて嬉しいです。

ま、それは熱出して、部活休んだからなんですけど・・・  
まだちょっと頭痛いんですね・・・

なのに執筆する矛盾があるんですけどね（笑）

次話は本編に関わる話です！！多分・・・

今はせっかく休んでるんで、戦慄の楽譜と、探偵達の鎮魂歌見てます

## file 47：敵からの指名

それからさらに1日経つと、FBIに電話がかかってきた。

「もしもし、なんか情報入ったの？」

電話に出たジョディは聞いた。電話をかけてきた瑛海は言った。

「今日、決まったわ。移動は1週間後。ただ、今の所より、新しい所の方が畏が少ないから、待った方がいいわね。荷物は同じものを購入してるから、有利なのよ。けどデータは移動日に全てを運ぶらしいわ。紙のやつは少ないかー」

そこで、電話の声が聞こえなくなった。しばらくすると、冷酷な声が聞こえてきた。

「こいつがスパイだという事は前から分かっていた。証拠が無かっただけ。FBI、お前らは人質を助けるために、江戸川コナンを呼べ。東京都にある廃ビルだ。ヒントは10階建てだな。夜8時に来い。もちろん俺一人で行くから、一人で来させるんだ。分かったな。1人で来なければ人質の命はないと思え」

そこまで聞いて一方的に電話を切られてしまった。

「みんな、どうする？」

ジョディがそう聞くと色々な意見が出た。しかし、それをまとめたのは赤井の一言だった。

「あの子は頭が切れる。ここは一人で行かせる振りをして俺が護衛しよう」

「俺も行きます！」

あちこちからそんな声が飛んだが、赤井は一蹴した。

「人数が多いと逆にダメだ。お前らは来るな。それに相手はジンだ。リスクは少なくするんだ」

そこまで言われて、押し切るものはいなかった。

決まると、今が6時だということもあり、急いでジョディが電話した。

「コナン君、本当は民間人である君を巻き込みたくないんだけど、どうしても来てほしいの。ダメかしら？」

ジョディは出来る限り声を普通にだそうと思っていたが焦りのためか声が上擦ってしまった。それに感づいたコナンは了承した。

しばらく待つてコナンが来ると、さっき話した内容を話した。

「ふーん。なんで僕を選んだか分かんないけど、行くよ」

コナンはこの状況をいいものとは思っていなかった。むしろ、人質がいて、自分が名指しされたことに疑いがあった。

（正体ばれたかしんねえな。これを灰原に言う・・・いや、やめといった方がいいのか？）

コナンはそのことばかり考えていた。  
ジョディは赤井に車の鍵を渡した時に言った。

「言われた条件で当てはまったのはここの廃ビルはここよ。そこま  
でしか出来なかったから、後は分からなかったからあなた達で考え  
て」

その後、車はすぐ発進した。

「わかるか？」

運転席から、赤井が聞いてきた。助手席に座っていたコナンは地図  
を見ながら考えを話した。

「この条件で街中にあるのを除くとこの3つなんだ。それから・  
・あ、分かったぜ!!」

赤井は何も言わず、コナンの推理を待っていた。コナンは話し始め  
た。

「人質は全部女だ。あまりにもぼろいところだと上がれなくなる。  
だからもつと楽なところだ。・・・となるとここだ！」

そういつて指差したのは今居るところのすぐ近く・・・米化町内だ  
った。

それをチラッと見た赤井は言った。

「米化町が好きなのか、そこばかり選ぶな。なぜだろう」

（もしかすると・・・）

そんな不安が頭をよぎったが、それは後から聞いてみることにして、今はもの前のことに集中した。3人の人質を助けるために・・・

## file 47・敵からの指名（後書き）

今回は本編に関わることなのですが、前回よりもなんか調子よくないです・・・

何ででしょうね？

次はお待ちかね（って待ってないかもしれませんが）のジンの登場！

！本当に一人で来るのか？そんな不安がありますね（笑）

ジンは敵キャラの中で結構好きです！あのクールさが！

人質が殺されるなんて展開にはなりませんから安心してください！！

明日は部活の試合なので、楽しみです！

file 48・危険に立ち向かって

行く予定のビルの近くに行くと、赤井が車を止めた。

「ここで降りろ。ここら辺からは1人で来いと言われてたんだから、1人で行け。頼んだぞ。俺は、近くにいて守っておくからな」

「お願い、赤井さん」

そう言うтусぐに去ってしまった。それを見送った後、コナンは歩き始めた。

コナンはさつきもらった地図を頼りに進み、ついにビルの近くまで来た。

進んで行くと、不自然に足元に真っ白な紙が置かれていた。

（おかしい。この廃ビルのぼろさだったらこの紙はもっと黄ばんでいるはず）

そう思ったコナンは紙を拾い上げて読んだ。

“誘拐されたやつらを助けたければ5階まで来ることだ。お前の仲間に連絡すると子供達の命はないと思え。お前の動きは読めているんだからな”

そう書いてあった。コナンはその紙をポケットの中にしまうと、進んでいった。途中で爆竹や、もっとひどいものは毒矢など、下手すれば命さえ無くすようなワナを乗り越えついに5階へ到着した。しかしそこに居たのは歩美だけだった。歩美は椅子に手足を結び付け

られていた。その上意識を失っていた。

コナンは歩美のそばまで行ってロープをはずし、歩美に声を掛け続けた。しばらくして歩美は気が付いたようだった。

「あ、コナン君。来てくれたんだね。ありがとう」

「そんなことはいいんだ。大丈夫か？」

歩美は立つと言った。

「うん、全然平気だよ」

その返事を聞いたコナンは歩美に聞いた。

「歩美、他の人はいねーのか？」

そう聞くと、歩美は泣き始めた。しかし、ちゃんと言った。

「私が捕まってどつかの牢屋に入れられてた時にあつた人のこと？  
その人は・・・もっと上に連れてかれたよ・・・でも、もう1人  
連れてかれてた。歩美を誘拐した人が」

「歩美、落ち着け。上だな。俺が行って来るからお前はFBIに助けてもらえ。すぐ連絡するから」

そういつて携帯を取り出した時、さっき泣いてたとは思えないほど  
大声で泣くのをやめさせた。

「だめ！！コナン君、私達を連れてった人がそれしたら殺すって言  
ってた。私も上に付いていく！！」

コナンも負けないほど大きな声で言った。

「ダメだ！！それは危険すぎる！！ここに残ったほうが安全だ！！」

歩美は自分を落ち着けると、コナンの前に立ち言った。それは驚くほど静かな口調だった。

「コナン君、私達少年探偵団だよ。迷惑掛けてばかりだったけど、歩美だって一緒に行きたい。さっきのこととかも言っておいたほうがいいしね。それに一緒に行けるだけで満足だもん」

コナンはまだ止めようとしたが、ここにいるのもキケンだと思い連れて行くことにした。

「しゃーねーな。ちゃんと付いて来いよ。守ってやるから」

それを聞いて歩美は頬を赤らめた。

「うん、お願い」

そしてコナンは進んで行った。残りの人たちを助けるために・・・

file 48・危険に立ち向かって（後書き）

しばらく投稿しませんでしたね。ごめんなさい。

今回は歩美ちゃんの話でしたね（^^）

歩美ちゃん、コナンの邪魔にならないかな？それが心配です（汗）

ここの話長くなりそうです。でもここ終わったら結構展開速いと思います！取りあえず進み具合の予定です（笑）

あと、せっかく明日誕生日なのに投稿出来ないのが残念です（  
）

ではまた（・o・）ノ

## file 49・意外な援助

歩美を連れて行くことに決めたコナンは歩美と一緒に階段を上っていった。もうすぐ次の階だという時、歩美は何か硬いものを踏んだ。その瞬間、突然機械音が鳴り出した。

「なに？この音？」

歩美は自分が踏んだことが原因だと気が付かずにそう言った。歩美はその場で立っていたが、音源のほうの壁から、刃物が見えたコナンは急いで歩美を遠ざけようとした。

「歩美！！」

そういつて歩美を突き飛ばした。歩美は上の階の床に飛ばされたので、かすり傷程度で済んでいた。

「コナン君、いきなりどうしたの？歩美びつくりした」

そういつて後ろを見ると思いもよらない光景が見えた。コナンは階段から落ちた上、足から血が出ていたのだ。

「コナン君！！どうしたの？」

そついうとワナを無視してコナンのところまで降りてきた。

「だ・・・大丈夫だ。歩美こそ・・・大丈夫か？」

コナンはかなり苦しそうだった。見てみると太ももには刃物が刺さ

っていたのだ。それはかなり深くまで刺さっていた。

「こんなひどい怪我なら帰ろう？歩美が上に行って助けてもらってくるから」

そういつて上に行こうとしたときコナンは一生懸命止めた。

「ダメだ、そんなことしたら歩美が死んじゃう！！俺が行く」

そういつてゆつくりと立ち上がったが、1歩歩くのにも苦勞していた。

「やっぱりダメだよ！！」

歩美がそういつて止めた時、後ろから声がした。

「ダメやあらへんで」

コナンはその声に驚いた。そういつた人物、それは紛れもなく、西の高校生探偵と呼ばれる服部平次だった。その隣には怪盗キッドと呼ばれる黒羽快斗、さらにその隣にロンドン帰りの白馬探もいた。

「服部、黒羽、それに白馬まで・・・なんでここに？」

その理由は探が説明してくれた。

「まず服部君が帰って来ない君のことを心配して、FBIに電話したんだよ。そしたらこのこと聞いたらしくてさ、黒羽君に電話したんだ。そしたら僕のところにも黒羽君から電話がかかってきたんだよ。自分の正体をばらしてまでも僕に助けてもらいたかったみたいだよ。

君を守るために。だから僕は来たんだよ。まあ、君を助けたかったのもあるけどね」

「でもよー、紅子連れてきた方がいいって俺言ったぞ？何で連れて来なかったんだ？」

その顔は本気でそう訴えた顔だった。

「だってか弱い女の子を危険な目に遭わせるのはだめだからね」

それを聞いて快斗は呆れた。

（紅子がか弱い？ありえねえ）

そう思ったが来てないものは仕方ないと思い、コナンのほうに向き直った。

「蘭ちゃん、園子ちゃんに預けたからな。あの子金持ちっぽいし、彼氏は空手強いんだろ？だから大丈夫なはずだ」

コナンは一瞬だけ、微笑んだが、痛みが悪化したらしく、辛そうに呻き声をあげた。そうだったのを見て、探が駆け寄った。その病状を見て、顔が青ざめていった。それを見て平次が焦りながらも聞いた。

「な、なあ、工藤そんなヤバイんか？ちやうやんな？」

そうは言っていたが実際は信じたくないという気持ちがあるのは見え見えだった。

「服部君、落ち着いて聞いてください。今の状況は極めて危険です。かなり傷口が深い上、化膿が早くなるようになってきているみたいだ。化膿し始めたらアウトです。それに頭も打ってる見たいですね。後から病院に連れていかないとまずいですよ」

それを聞いて快斗もうろたえ始めた。

「そんな・・・これじゃ不利だ・・・しかも、人質もいるし・・・」

そうつぶやいていると、後ろから声がした。

「遊びはそこまでだ」

file 49・意外な援助（後書き）

お久しぶりです！！皆様（笑）

学校行つてるとなかなか投稿できないです（汗）

今回ちょっとだけジンが出てます！！さあジンはこのあと何を言うんでしょうね？

今回はまたいつか投稿するので待っててください！！お願いします！！！！

では、また！！

file50・ビルで会ったジンくまさかの裏切り

完全にとはいかないにしても少しは安心してたコナン達に大きな不安が押し寄せてきた。そうーッジンがいたのだ。ジンの目は冷酷で優しさなど、微塵も感じさせなかった。

「あんた、もしかして・・・工藤に薬飲ませた奴・・・なんか？」

ジンは不気味な笑いを漏らしながら言った。

「そうだ、そこにいる工藤新一が生きているなんて思わなかったがな」

「ジン・・・やっぱり・・・」

コナンは意識が朦朧としながらも、出来る限りの力を振り絞って言った。

「工藤君、もう話さないで下さい！」

そういう探の声も虚しく、コナンはまだ話した。

「お前・・・灰原と・・・なんか関係・・・ある・・・の・・・か？」

コナンはその時、普通なら意識を失ってもおかしくない状態だった。しかし、コナンの執念がかりうじて意識を保たせていた。

「ふっ・・・知りたいのなら、自分で調べるのだな」

その時、コナンはあることに気付いた。しかし、その時、意識を失ってしまった。

「おい！！工藤大丈夫か？」

服部はそういつてコナンを抱きあげた。快斗も叫んだ。

「なんてことしてくれんだよ！もし、死んじまったりしたら・・・」

「それはそのガキに言ったらどうだ？それに黒羽盗一のように死にはしないだろう」

その顔はなにか知っているような顔だった。

「やっぱパンドラはてめえらか！」

ジンは鼻で笑うと言った。

「さあな。・・・長話し過ぎたようだ。死んでもらう事にしよう」

「赤井さんがおるから無理や！撃たれるで！」

ジンは馬鹿にしたように笑いながら言った。

「今、あいつは仲間さ。前はそっちの仲間だったらしいがな。だからお前らが撃たれるだけだ。まず、お前からだ」

そういつて快斗に銃を向けた。快斗にはジンが歩いてくる足音が大きく聞こえた。しかし2、3歩歩いたところでジンは足を止めた。

「いや・・・ここで殺すのは面白くない。FBI達がなにか企んでいるようだからその時に殺す事にしよう。しかし2人の人質は返せないがな。どうしても返して欲しいならまた来ることだ」

そういうと、ジンは去っていった。しばらくしてからジンを追いかけたが、その時はもう去ったあとだった。

「くそっ！結局この子しか助かんなかったか。もっと早く分かってくれば・・・」

快斗がショックを受けていると探が言った。

「今悩んだって仕方ありません。今考えるのは、工藤君の状態と、2人の事です。早く工藤君を病院に！それにジンの言葉も気になるすし」

平次は驚いて言った。

「そつやな・・・って、工藤の事知ってたんか？」

探はいかにも当然という顔で答えた。

「それぐらい分かりますよ。僕だって探偵ですからね。服部君、工藤君頼みました。黒羽君は、FBIに行ってください。僕は情報もつと集めます」

「とりあえず降りようや。危ないから2人に連れていってもらってくれや」

そういうと、平次は降りていった。

しばらくして下につくと一言だけ話した。

「任せたで。その子は俺が連れて帰るわ。やること終わったら連絡くれや。頼むで」

「ああ」

「分かりました」

そして3人は別々の道に進んで行った。そして平次は電話をかけた。

「もしもし、聞きたい事あるんやけどちょっとええか？」

file50・ビルで会ったジンくまさかの裏切り（後書き）

遅れてすみません（汗）

今回はジン結構話しましたね（笑）

平次の行動も気になります^^

コナン、大丈夫かな？つてのが心配です。

次回も遅くなるかもしれません。

では！！

file 51：電話での頼み

平次が電話した相手――それは蘭だった。

「別にいいけど、服部君、急いでる？声が荒っぽくなってる」

平次は真剣さをだして言った。

「走ったからや。しゃーないで。頼みうちゅーのは・・・そうや、哀ちゃんや。その子を米化総合病院に連れてきて欲しいんや。頼んだで」

走ってはいないが、その場をこまかすために言った。すると蘭が聞いてきた。

「病院？なんかあったの？」

沈黙が訪れた。その沈黙を破ったのは、先程まで意識を失っていた、コナンだった。

「蘭・・・か？はつと・・・り、・・・代わって・・・く・・・」

そこまで言ってまた意識を失ってしまった。

「工藤！！大丈夫か？」

その声はこの場にそぐわず大きすぎた。それで、蘭にも聞こえてしまった。

「工藤？新一になにかあったの？」

服部はいつも通りにごまかす事にした。

「くどいって言うたんや。今、預かってる子かな」

下を見ると、歩美が頬を膨らませて怒っていた。平次は目をそらせると、電話に耳を傾けた。

ちょうどタイミングよく、考えをまとめた蘭が話しはじめていた。

「じゃ、その子、哀ちゃん連れていったついでに預かるつか？園子、だめ？」

これは、蘭の仕掛けた罠だった。これで、うるたえたら、新一になにかあったと判断するつもりだったのだ。しかし、本当にいた場合、預かってあげたかったので、蘭は園子に聞いた。園子はためらいなく言った。

「いいわよ。でもマセガキだけは勘弁して」

平次が口を開けようとした時、歩美が平次のズボンの裾を引っ張った。平次は携帯を耳から離すと聞いた。

「なんや？嫌なんか？」

歩美は少し暗い顔で言った。

「蘭お姉さんは好きだよ？けど・・・コナン君こんな事になったの歩美のせいだから、ついててあげたいの。だめ？」

平次は少し悩んだが、その気持ちがよく分かったから、ついでいくのを許した。

「しゃーないなあ。迷子になるんやないで」

「うん!」

その顔は周囲の人もつい止まるほどかわいかった。そんなことを考えていると、右手のほうから声が聞こえてきた。

「・・・とり君、服部君?居るの」

平次は急いで携帯を耳にあてると言った。

「スマンな、この子、行きとくない言うてるからやっぱりええわ。じゃあ、頼んだで?」

そう言うと、返事も聞かず切ってしまった。平次はつぶやいた。

「早う行かんとな、どんな事になるか分からへんし」

歩美は自分に言われたのだと思い、答えた。

「うん。コナン君心配だし・・・」

「そうやな」

そんな会話が2人には重くのしかかった。2人は口裏を合わせたように同時に走り出すと、病院に向かって行った。



file 51：電話での頼み（後書き）

発言と行動が一致しない作者ですみません。

たまたま執筆が早く進んだものですから（笑）

今回は逃げ切った後の様子です！次もそれになりそうかな？？

今まで振り返ってみると病院、前もしましたね。

今回はコナンの一大事なので仕方ないですけど（笑）

アニメも1時間スペシャル2週連続で嬉しいです！！しかも、新一登場だし！！

それと、今回のサンデー読みましたか？（ここからはサンデー読んでない方は見ないほうがいいです！！ネタバレなんで）

立ち読みしたんですけど、赤井さん記憶失ってますね。私の話とずれが発生してショックです（泣）

では、また^^

出せる時に出しますね！！

## file 52：連絡で知った真実

快斗は決められた役割――つまり、FBIに連絡するところだった。

取りあえず、盗み聞きされないような道まで行くと、急いでさっきとってきたコナンの携帯を取り出し、ジョディに電話した。

「大丈夫？ さっき大変だったんでしょ？」

少しの沈黙が訪れ、ジョディは心配になったようで、もう一度言った。

「ねえ、聞いてる？ 話してくれないと分からないわ」

快斗は心を落ち着けると、ジョディに話した。

「落ち着いて聞いて下さい。僕、黒羽快斗です。今、コナン君、頭と足に怪我を負ってます。頭はともかく、足はかなり危険な状況です」

「知ってるわ。だってさっきその情報伝わってきたもの。でも……やっぱりコナン君が大怪我負ったなんて信じられなくて……」

ジョディは悲しみと、諦めが入り混じった複雑な心情だった。

しかし、快斗は今の発言に疑問があり、コナンの事を忘れていた。考えていると、ジョディは違う事を話しはじめた。

「でも、コナン君、1人で行くって言うてたけど、やっぱり他の人

も連れていく事にして良かったわね。じゃないと死んでたかもしれないし」

「えっ？」

快斗はついに疑問の気持ちを言葉にしてしまった。

「なに？おかしい事言った？」

快斗は慌てて体裁を取り繕うと聞いた。

「いえ、別に。あの、その事誰に聞きました？」

ジョディはその発言を不思議に思いながらも、答えた。

「確か・・・情報収集員だったわ。でも・・・口止めされてたみたいでそれ以上は分からなかったわ。でも情報漏れがないようにいつも口止めしてるから気にしなくていいと思うわ」

「もう1つだけ・・・その時間、自由に動ける人は？」

「いっぱいいたわ。動けなかったのは、潜入員ぐらいよ。けどたいてい2人とかで行動するわ。1人で動くのは本部に信頼された10人ぐらいよ」

ジョディは、親切に快斗に教えてくれた。

快斗は最後に一つだけ頼んだ。

「その人達の名簿、頂けませんか？」

その発言には少しだけ疑いがあったようだが、1つだけ質問しただけだった。

「分かったわ。でも、1つだけ聞きたいの。君は探偵なの？聞かれると逃げ切れない気迫があるのよね」

快斗はふっ、と笑うと言った。

「いずれ分かりますよ。では」

そう言って電話を切った。

「青子、ぜってえ助けるからな！！待ってるよ」

快斗はそうつぶやいた後、携帯をしまうと病院に急いで向かった。この驚きの事実を伝えるために――

file 52：連絡で知った真実（後書き）

お久しぶりです、皆さん！！

今回は快斗君！！

コナンのため、青子のために頑張ってますねー！！

快斗君敬語で話してますけど、それは怪盗キッドの口調で話してるからです！！

では、次回お会いしましょう（笑）

### file 53・警察の協力を得て

探は警察方面に協力を要請するため、父である警視總監に連絡をとった。

「もしもし」

これだけで誰か分かったようだった。

「探か！めったに電話して来ないのに急にどうしたんだ？」

探は簡単に、言える範囲で言った。

「僕の友達が・・・ある組織に負傷させられたんです。メンバー全員、全身黒ずくめなんですけど・・・そんな奴らの情報あったら教えてくれませんか？」

探の父は少し悩んだようだったが、ゆっくりと口を開いていった。

「本当は情報を流すと、重い処罰があるんだが・・・それが分かってかけてきたんだろ？」

その時の言葉には、普段のおおらかな印象とは打って変わって、全てを見透かされるような気迫があった。探は、それに負けず、答えた。

「はい。どうしても助けたいんです」

探はこんな事だから、しばらく返事はないものだと思悟していた。

しかし、意外にもすぐ答えてくれた。

「分かった。調べるからその間に来てくれ。1人で来るんだぞ」

そのあと、電話を切った探は急いで警視庁へ行った。出来る限り速く歩いて警視総監の個室までたどり着いた。その部屋のドアをノックすると、秘書らしき人がドアを開け、そのまま立ち去っていった。探の父は、来客用の椅子に掛けていて、探にも、座るよう指示した。探が座り、元々置いてあった紅茶を飲み始めると、探の父は、おもむろに口を開いた。

「探か？面白い事が分かったぞ。警察にとっては悲しい・・・事実だな。まず、警察にスパイが居ることだ。これは、すでに流れている情報と見て間違いない。私が流したんだからな。2つ目は・・・あの組織は、何故か宝石を捜すみたいなんだ。なんでも、ビッケジユエルの一つに不老不死の効果があるらしいのだよ。これは極秘なのだがな。3つ目に・・・組織は幹部が仕切っている、という言う情報があつたぞ。しかも、あの組織でともに戸籍に入っている人があまりいないから、世襲制だろう。これが何かの役に立つといいが・・・また情報が入ったら連絡するからな、取りあえず今日は帰ってくれ」

「待つてください！」

探は一生懸命止めた。その勢いは普段以上だった。その発言に総監である父は小声で言った。

「今、2人だけになれる隙を狙って話し合ってるんだ。だから出来る限り早くな」

探はその言葉通り簡潔に言った。

「なぜわざわざ流す必要があったんですか？」

その質問をした後、探は父がため息をつくのを見た。

「探なら分かると思ったんだがな・・・あの時、既に警察への不信があつたんだ。そこで私はわざと真実を流したのだよ。そうしたら彼ら警察官が自分で考えてくれるだろうと思つたからね。彼らしか知らない事実もあるだろうし。分かつたかい？」

探は感心していた。

父の深い所まで考えた行動は素晴らしいと思つた。反対に自分の裏の裏まで考えなかった浅はかさに腹がたつた。探はその気持ちだが、まだ小さいうちに戻ろうと思い、言った。

「では、今日は失礼します。友達と会う約束があるので」

探はそう言つて立ち上がると、ドアを回した。その時、父は一言言つた。

「私でよければ力になろう、と伝えておいてくれ」

探はその言葉を聞いて、もう腹立たしさはおさまつたようだった。ただ感心するばかりだった。それを悟られないように、探は何も言わずその部屋を去つた。

file53・警察の協力を得て（後書き）

やっと53話投稿することが出来ました^^  
書いてたんですけど・・・投稿できなくて・・・

今回は、滅多に光を浴びない白馬君を出させていただきました！  
楽しんでもらえたら嬉しいです！！

明日はアニメですね！！早くみたい

では、また次回（笑）

file 54：誰か倒れてる？

部屋を出て階段を降りていると、探は目暮と出会った。

「君は、白馬総監の息子の探君ではないかね！今日はこんな所まで来てどうしたんだい？留学してたんじゃないかな？」

探はさっきの事を話す訳にはいかなかったので、笑ってごまかした。

「何でもありませんよ。警部こそ、どうされたんですか？ずいぶん忙しそうに見えましたが」

目暮は同情を求めるような目で、探に話した。

「いや、白馬総監がさっき私たちの管轄に連絡を入れられたんだ。至急、会いに来てくれとな。用件は何か分からないが、とても急ぎの用らしいんだ。けどうちの管轄も忙しいんだ。面倒な事であればいいんだが・・・すまない。君に話す事ではなかったな」

「いいですよ。それよりも・・・もしその内容がこんな話なら、僕に連絡入れてくれませんか？」

そう言うと、探は目暮に内容を伝えた。目暮はその内容に驚いていた。

「構わないんだが・・・でもどうしてだい？」

探は真剣な顔をして言った。

「今は言う事は出来ません。けど、連絡しなければならぬ場合はお話することになると思います。その時はここに連絡してくださいね」

そういつて連絡先を書いた紙を渡した。目暮は納得出来ないようだったが、さすがにそれを顔にださなかった。

「分かった。その時は必ず連絡をいれよう」

探は最後に一言だけいった。

「他言してはいけませんよ。人の命に関わる問題なんですから」

「分かっておるよ」

目暮がそう言ったのを聞くと、探は目暮と別れ、再び進んで行った。

そして、ちょうど1階に降り、人々が行き交う玄関ホールを歩いている時にそれは起こった。目の前を歩いていた女の人が倒れたのだ。探はその女の人に駆け寄って声をかけた。

「大丈夫ですか？」

そう呼び掛けたが返事が無い。再び呼び掛けたが、全く反応しなかった。仕方がないので周りの人に声をかけようとする、その人は起き上がった。

「大丈夫ですか？」

「ええ。助けて頂いたんですか？ありがとうございます」

そう言っていたが、顔色は悪かった。

「本当ですか？顔色悪いですよ。念のため、診てもらった方がいいと思います」

「仕事が終わったら行く事にします。この事は絶対に他言しないで下さいね」

そう話していると、新米に見える刑事が駆け寄って来た。

「佐藤さん、どうしたんですか？いきなり部屋から居なくなってるから心配したんですよ！」

探は黙って動かなかった。いや、美和子が心配だったのだ。

「高木君、部屋から出ただけでしょ！！そんな事で心配しないでよ」

探はさっきの事を話そうと思ったが、約束だったので、黙っておくことにした。その時、渉が声をかけてきた。

「ところで、あなたは誰なんですか？さっき佐藤さんと話してましたよね？」

美和子はさっきの事も見られていたのかと心配していた。それが表情に出ていたので、探が上手く話した。

「知り合いですよ。顔見知り程度のね」

「顔見知り・・・ですか」

渉は本当か疑っているようだった。だから探は去り際に耳元で呟いた。

「高木さん、佐藤さんを幸せにしてあげて下さい。お似合いですよ、お2人」

「えっ！！そっ、そんな関係じゃ・・・」

渉は顔を赤らめた。その態度は、とても分かりやすかった。

「分かりますよ。本当に幸せにしてあげてください」

「はっ、はい！」

渉は知らぬ間にそう呟いていた。

（ふっ、これであの2人上手く行くといいんだけど。あの2人奥手そうだったからな）

探はそう思っていた。その時、美和子と渉も話していた。

「いい人でしたね」

「ええ、本当に・・・」

2人はそう呟いていた。

file54：誰か倒れてる？（後書き）

探君シリーズ2話に及びましたね。

書きすぎかな？

次は忘れ去られているであろう事を書きますo(^-^-^o  
少なくとも、私は忘れてた(-.-;)

今回、白馬 探、佐藤 美和子、高木 涉と、その人を表す言葉、  
変わってます！

では、次話でお会いしましょうー(^-^-

## file 55・青子の様子

青子は組織のある部屋へ連れていかれると、その中に入れられた。

催眠薬を飲まされていたせいで意識を失っていたが、しばらくして意識を取り戻した。周りを確認して、先程と違う所にいるのに気がついた青子は叫んだ。

「何でこんなところにいるのよ！」

ジンは至って普通に言った。

「お前を監禁するに決まってるだろう？結局あの時、工藤新一はお前を助けられなかったんだからな。それにお前はいい餌になる。これほど便利なものはないだろう。もしもの時は殺せるからな」

青子はその言葉に違和感があった。それは前から聞きたかった事だったので今のうちに聞いた。

「私をなんで殺さないの？ううん・・・あの時なんで私を殺さなかったの？あの時は気づかれなかったけど、結局あの時は逃げてなかった。だから、もしかしたら見つかったかたかも。そのリスクを知ってて、私を守ってくれたでしょ？本当になんで？」

青子は、自分を私と言う事に苦労しながら言った。ジンには余裕の表情が消えていた。しかし、それがわかるくらい露骨にするほど馬鹿ではなかった。

「これからも餌としてもらうためだ。組織の新しいアジトはこ

こだ。恐らく、工藤新一は来るからな。それだけお前の価値は高まるんだ」

「でも、それだったら、さっきの男の人・・・確か、赤井さんだったかな？その人にもすれば・・・うっ」

そう・・・さっきの言葉に耐えられなくなったジンは青子を殴った。それは1発ではなかった。数発殴って意識をなくした、と確信すると呟いた。

「お前は俺の好きだった奴に似てるんだよ・・・結局殺したせいで、今は違うがな」

そう言うとその部屋を去っていった。しかし青子は意識を失ってはいなかったのだ。

（好きな人って誰かな？その人が分かって、外部との連絡手段があれば快斗に伝えられたらいいんだけど・・・）

青子はこの部屋に防犯カメラがないのを確認すると、部屋を探しはじめた。

すると、コツコツと靴の音が聞こえてきたので、青子は急いで気を失った振りをした。

「angel、もう演技しなくていいわ」

「えっ」

後ろを振り向くと、有名な女優、クリス・ウィンヤードが立っていた。

「クリス・ウインヤードさん!？」

「え、ええ。あなたに情報を与えに来たのよ。欲しいでしょ？今探していたようだし」

青子は急に来たクリス・ウインヤードーいや、ベルモットに驚いたようだったが、しばらくすると口を開いた。

「はい。えつと・・・さっきの人の好きだった人って・・・」

ベルモットは少し躊躇ったが、話しはじめた。

「ジンね・・・私が初めて会ったのは、私が20才の時だったわ。あの時、ジンは6才・・・シェリーとよく一緒にいたわ。あの2人は組織では有数の頭脳と言われていたし、外に行けない生活だったから、本当に仲が良さそうだった。あの時新入りだった私でもそう思ったわ。でここからが聞いて欲しい所なんだけど・・・」

ベルモットは少し間を置くと言った。

## file55・青子の様子（後書き）

青子の様子・・・すっかり忘れてましたね（汗）

けど、本当に私、文章が無駄に長くなっitingいきますね・・・本当は  
あっさりしたいところあるんですけど、書きたいことが多すぎて・

どうにかなりませんか？

次の次からは、コナンの様子に戻ります。後1回は青子の話、見て  
ください。

では

## file 56・ジンとシェリーの関係

「あの2人はね、一緒に外へ出かけたのよ。洋服を見たり、テーマパークにも行ったわ。そして、抜け出すのが3回目になって、外をうろついていると、宮野明美――シェリーの姉を見たの。その瞬間一目惚れしたらしいわ。けどね・・・いる訳には行かなかった。だって本当は出てはいけなかったのだから。その時、ジンは諦めたらしいわ。けど、我慢がでずに泣きそうになったのよ。あのジンが。その時、シェリーが“また会いに来よう？絶対来れるよ！”って言ったわ。私、あの時、あの方に命令されて尾行してたから、見たの。ここからは想像なんだけど、あの後、ジンはシェリーにも恋してたわね。迷った末の出来事だったんじゃないかしら。しばらく、あの2人は小さいのに付き合ってたみたいだったわ。けど、シェリーは留学させられてジンは1人に・・・そんな悲しみに暮れて何年もたったある日、そう――赤井秀一が宮野明美と付き合ってたのを見たの。その頃にはシェリーも帰って来てた。あの時からだったわ。ジンがシェリーを“もう離さない、2度も失敗したくないから”って言いはじめた。最初の方はシェリーも嬉しそうだった。けど、時が経つにつれ、ジンは仕事に必要なことから連れていく事が増えたわ。シェリーも段々嫌になったんでしょうね、もう、嫌そうな顔しか見せなかった。そして、結局は逃げたのよ、姉妹2人共。だからもう・・・だから今、私が付き合ってるけど・・・ジンの慰めにさえもならないわね。あの姉妹とは大違いだわ。姉は亡くなったけど、シェリーは18才、まだ生きてる。だからジンはシェリーを探してるのよ」

青子はどうしても違和感を感じる所があった。

「あの、シェリーさんは今18才なんですよね。ジンが9才の時、

生きていたんですか？どう見たって30才は過ぎてますよ」

ベルモットはさらに青子に寄ると言った。

「そう。ジンは組織が新開発した、と言われた毒薬を飲んだのよ。組織の幹部になるために・・・そうすればジンの願いが叶うから・・・」

青子は驚いていた。組織には謎の薬があることに・・・また、ジンの願いがとても気になった。

しかし青子がそんなことを考えるより先にさらに衝撃的な事実を知らされる事になる。

「シェリーもその薬を飲んだの。けどジンが飲んだのは成長するための薬。シェリーが飲んだのは若返りの薬なのよ。実は薬は2種類作ってあったのよ。私データを見に行った時確認したわ。そう、組織にはその薬が必要なのだから・・・」

しかし、連絡手段が青子にはなかった。そこでとても悩んでいると、ベルモットがケータイを出した。

「これ、あなたのケータイよ。今、同じ機種のとすり替えてるから、伝えるんなら早くね」

青子はベルモットに感謝の気持ちで一杯だった。青子は精一杯その気持ちを伝えた。

「ありがとう・・・ございます。こんな私に教えてくれて・・・」

ベルモットは笑って答えた。

「いいのよ。もう、こんな馬鹿げたこと辞めたほうがいいんだから」  
しかしその2秒後、険しい顔をして答えた。

「まずい。誰か来るわ!!」

そう言うとはベルモットは早足で逃げていった。その後入って来た人  
――それは、ジンだった。

「お前、さっき誰かと話していただろう。言え」

ジンの目は冷酷だった。その上、青子の頭に銃を突き付けた。青子は快斗に鍛えられた大胆さで、表情一つ変えずに言った。

「誰も話してくれる人なんて……いませんから」

そう言うとはジンは妙に納得して言った。

「そうだな、ここには信用出来る奴しか通してないんだからな」

そう言うて去っていった。青子は安心しながらも心の中ではびくびくしていた。しかし、もう慣れてきたようだった。それはベルモットが味方をしてくれた所が大きいかもしれない。

これから青子はメールを打つ。この話を伝えるために……

## file56・ジンとシェリーの関係（後書き）

青子バージョン2話にする予定ではなかったのに・・・と少し悔やんでいるangelです！

やっと次からコナン君ですね。あんなに大変なのに、しばらく無視されててかわいそうです 私のせい

でも、次からはコナン君です。これは絶対なので安心してください！！

ただ・・・長すぎて、せっかく読んでくださった方々が“付き合い切れねーよ！！”っていなくなりそうなのがとても心配・・・

そんなことがないように祈ります！！

では！！

file 57・追及

平次が病院に着き、コナンを医者に見せ、手術が終わったのを見届けると、病院の表に立った。しばらくしていると、哀をつれた蘭がやって来た。

「ごめん、服部君！！色々用意してたら遅くなっちゃって」

平次は笑って言った。

「ええで、別に。こっちやってそんなに待ってへんしな」

しかし、次の瞬間、真剣な顔になった。

「で、哀ちゃん連れて来てくれたか？」

蘭は少々ためらいながら言った。

「う、うん、連れてきたけど・・・こんな夜中にどうしたの？哀ちゃんも大変だったでしょ？」

哀は精一杯の皮肉をこめて言った。

「ええ、とても疲れたわ。こんなに疲れてまでしてこないといけなかったのかしら？」

平次は頭をかきながら言った。

「キツイなあ、少しぐらい我慢してくれや。ちょっと聞きたいこと

があるんや」

「もう、仕方ないわね、早くしなさいよ」

その2人のやり取りを見て、蘭は不審に感じたようだった。それにいち早く察知した平次は蘭に言った。

「ああ、姉ちゃんは帰ってええで！！姉ちゃんとはまた行くわ！！じゃ、またな」

「えっ！！ちよっ・・・！！」

蘭は焦った。このままだと、なぜ病院なのか、新一は大丈夫なのか・・・など、聞けないからだ。しかし努力もむなしく、平次に無理やり帰らされてしまった。

その頃病院では哀、歩美、平次は3人で討論していた。

「で？蘭さん追い出したってことは、重要な話なんですよ？」

平次は口を少し上げて、笑いながら言った。

「ああ、当たり前や。工藤が今まで聞かんかったいろんな事聞いたろと思ってな」

哀は一瞬びくつとしたが、それにめげず、言った。

「あら、あなたが聞く必要はないわ。工藤君なら理由があるかもしれないけどあなたには理由がないもの」

哀は勝ち誇った顔をしていた。しかし平次が言った一言で、それは崩壊した。

「今、工藤はやばい状態や。命には別状ないけど、かなり熱が出てるしな。もしかしたら後遺症が残る可能性だって・・・だから俺らが聞いて、少しでもこの状況を直そうと思うんや」

そういった眼は真剣だった。哀はこれを見て、あっさりと折れた。

「仕方ないわ。言っわ。本当なんでしょ？ 吉田さん」

哀は歩美に聞いた。歩美は小さく頷いた。

「じゃあ、吉田さん、少し席を離してくれる？ あなた達はいないほうがいいの。これから生きていくには・・・」

哀は歩美をいたわりながらも、きつく有無を言わせない声で言った。しかし今回だけは、歩美も引かなかった。

「嫌だ！！歩美だって聞きたい！！それに今からする話って、誘拐してた人のことでしょ？ 歩美が居たっていいもん！！ね？」

そういつて平次に同意を求めてきた。平次は少し悩んでいたが、決めたように言った。

「いや・・・今回は聞いててええで。むしろ他のメンバーも呼びたい位やな。今回は夜も遅いし呼ばんけどな。じゃ、話してもらおか」

そういつてもものすごい威圧感で哀を見た。しかしこれで哀も引き下がることは出来なかった。

「なんで？吉田さん、いや、少年探偵団のみんなを巻き込むの？こ  
んなの、私と工藤君だけで十分なのに！！」

平次は、顔から威圧感を消すと、言った。

「恐らくなんやけどな・・・少年探偵団のメンバーの両親は、組織  
で働いていたはずや。だから、無関係じゃないんや。決してな・・・」

さすがにそこまで言われると黙るしかなかった。

そしてしばらくして話し始めた。丁寧に、細かく話した。哀は話す  
のにはかなり抵抗があつたようだが、最後まで話してくれた。

「なるほどな、いろんなことがあつたんやな。なんかスマンな。こ  
んなに掘り下げて聞いてしもて」

哀は静かに言った。

「いいのよ。これはいずれはなさなければならなかったことだもの」

「けど、ホントいきなり聞くと戸惑うなあ。うまく整理できへんわ」

平次は本当にそう思っていた。しかし一番戸惑っていたのは歩美だ  
った。

（分かんないよ。歩美のお父さん、お母さんってホントに悪い人？  
どうなの？教えてよ、コナン君！）

そう思いながら手術が終わり、眠っているコナンを見た。しかしコナンは何も答えてくれなかった。

file 57：追及（後書き）

2週間ぶりですね^^

この小説を投稿したのは・・・  
停滞です・・・

すみませんね（汗）

今回コナン君一応出てましたよ。気づきましたか？  
出す・・・って程でもないですね。  
哀ちゃんの役目があったので・・・ね。

次話までは書いてあります！

次はもつとはやく投稿しますね

あと、英検昨日あったんですよ^^

受かってたらいいな、と思います（汗）

英語、壊滅的な成績なんです・・・  
神頼み！？

では、早めに投稿しますね

## file 58：彼の復活

快斗は重い足取りで病院に向かった。しかし、それはさっきの出来事が恐ろしかったからではなく、コナンの体調を案じてのことだった。

しばらくして、病院に着き、先程言われたとおりの階へ行き、エレベーターから降りると、平次が見えた。

「あ、平次、どうだった？」

快斗はできる限りの笑顔で言った。期待していたのだ、“なんでもなかったわ。安心してええで！”と平次が言うのを。しかし、実際にはそんなに上手くいかなかった。

「・・・快斗、工藤、意識、戻らんのや。下手したら・・・組織と戦えへんかも・・・」

「えっ！！あれは本人がケリつけないと意味ねえじゃん！！そんなのだめだ！！」

快斗は今にも暴れだしそうな雰囲気だった。平次は少し寂しそうな顔をしながら言った。

「快斗・・・実はな、工藤が前から調べてたらしいんやけど、これ見てくれるか？」

そういつて、一枚の手紙を取り出した。快斗は読み進めていくうちに唖然とした。なぜならそこにはこう書かれていたからだ。

“服部、黒羽、そして白馬、これを見てるとき、俺はここにいなえかも知れねえな。これは、それ覚悟で書いた手紙だ。今回ジンと会うなら死んでもおかしくねえからな。

本題は、1つは蘭のことだ。俺がいなくなっても、幸せでいられるようにしてやってくれ。蘭が幸せなら俺はそれでかまわねえ・・・蘭が幸せならな・・・”

そこにはたくさん書き直した跡があった。それをみて、コナンの思いをさらに感じたようで、その思いに感動すると同時に、気持ちを伝えられないかも・・・という事実を思い出し、いたたまれなくな

った。

続きにはこう書いてあった。

“2つ目は、組織のボスのことだ。いろいろなコネを使って調べたところ、あの方は、FBIにいる。おそらく俺らのこともよく知ってる奴だ。でなかったらもう俺と服部は殺されてる。ハロウィンの時には・・・だから気をつけてくれ。下手に戦うより家に居たほうが安全だ。だから家に居てくれ、これは最後の願いだ。もうこれ以上願わねえから・・・”

細かいことはお前らにしかわかんないようにあるところに隠してあるから探してくれ。たのんだぜ”

そうつぶられていた。

「そう、工藤君は最初から覚悟していたんですよ。もしものことを・・・僕達と違ってね」

「はっ、白馬!!!なんでお前が?」

快斗はびっくりしていた。背後に立っていた探の存在に・・・しかし、当の本人はそんなこと意に介さなかった。そして会話を続けた。

「そう、工藤君はとても考えていたんですよ。それこそ僕達の何倍も・・・」

平次はそれに同意した。

「ああ、工藤、本当に凄いわ。死ぬかもと思ってんのに俺らの心配なんかせんでええのにな」

平次はもうすでに泣きそうだった。それにつられて快斗、探も神妙な顔をした。

ソファで座っていた哀と歩美も同じような顔をしていた。

その日から5人はコナンの看病をした。たとえ雪で外が寒くても、雨が降っていても必ず1日1時間はみんな見に来ていた。

「まだやな。早く意識が戻らんかなー」

「気長に待とうぜ。あせりは禁物さ」

「そうですよ。ここは辛抱してください」

「すぐ意識も戻るわ」

「そうだよ！だから落ち着いて！」

などと、話をしながら・・・

コナンが意識を失ってから、かなり経った、決戦3日前のある昼下がり、ちょうど、3人が集まった頃だった。

「・・・今日もダメですか。もうすぐ決戦だというのに・・・」

探がそういつて落ち込んでいると、平次が声を掛けてきた。

「前は白馬が“気長に待とう”って言ってたで。俺らは結局それしか出来んのや。だから落ち着いて待ってようや」

平次がそう諭すと、探は少し笑いながら言った。

「服部君にそういわるなんて・・・僕としたことが・・・そうですね。気長に待ちましようか」

そっついのを聞いて、平次は満足したようだった。

快斗はケータイを見て深刻な顔をしていた。探、コナン、平次の順に顔を見回しながら・・・

そんな時、普段と違うことが起こった。

「ん・・・あ・・・」

コナンの声だった。

file 58：彼の復活（後書き）

コナンがやっと復活しましたね！

これで組織と戦えますね

嬉しい限りです

それはそうと、3月7日から前売り発売されますよね？

皆さんは買いますか？

私は友達と一緒に買いに行きます！

前遅かったせいでファイルもらえなかったんで・・・

そろそろ調子戻ってきた感じします！

これからはもつと頻度上げたいです！！

では

file 59・自覚めた男の子

それは夕陽の光が窓から差し込んで、ちょうど一番綺麗に見える時間帯だった。

平次は急いで駆け寄ってコナンに話しかけた。

「工藤か！？ここどこ分かるか？」

コナンは平次の質問を聞いて、一回ベッドに座ってから周りを見渡すと言った。

「病院・・・か？そっいやジンに会って・・・その後質問してから・・・」

「もう一回寝てろ。組織と戦うなら取りあえず体力つけないとな！」

そう言ったのは快斗。快斗は寝たのを確認すると、平次と探に話しかけた。

「で、どうする？こいつ今は闘える状態じゃねえ。足に後遺症が残るかもしれないな。けどちゃんと闘わせてやりたいんだ・・・お前らはどっちがいいと思う？」

平次は当然かの笑みを見せると言った。

「闘った方がええ。工藤が後悔する結果になるんは辛いしな」

しかし、探は全く反対の意見だった。

「僕は反対です。やっぱり周囲の方の悲しみを見たくありませんし・・・」

そう言った探の目には過去を思い出させるような雰囲気があった。平次と快斗はそれには触れなかった。

嫌な沈黙が訪れた。それを敏感に察知した快斗は自分の意見を言うことにした。

「俺は・・・アイツの思い通りにさせるべきだと思う。聞いていってなんだけどな。アイツが止めるんならそれもいいし、やるんならそれもいいと思ってる」

快斗の意見を聞いて、2人ははつとした。

「そつやな。俺らが介入することやあらへん」

「僕、最近変ですね。そんな当たり前の事に気がつかないなんて・・・」

平次と探はお互いにつぶやいていた。

その後しばらく大人しくしていると、コナンが再び起きた。

「どうや？疲れとれたか？」

「ああ、おかげさまでな」

コナンはそう言って、ベッドから下りようと足を下ろした。

「……っ!!」

コナンは足を見ると、あの時を思い出したようだった。

「ああ、あの時……」

コナンは少しの間考えていたが、しばらくして、考えるのを止めるとベッドの上に座って3人に話しかけた。

「今日はいつだ？」

快斗はついに来た、と身構えると言った。

「闘いの3日前だ。どうする？ 闘えるか？」

「当然。そのために色々やって来たんだからな。もしかしてそんな心配してたのか？」

コナンは笑いそうになっていた。無駄な事を考えていたであろう3人に向かって……

「まさか。そんな訳ないだろ」

しかしコナンは笑うのをやめなかった。それを見ていて普段の日々に戻った気分になっていた。

コナンは笑いがおさまると、再び質問した。

「それで、なんか情報集まったか？」

快斗はそれを言われてすぐ携帯を取り出すとコナンに見せた。

「青子からだ。色々書いてあんぜ。それ以外にも色々情報は集めといたからな」

その言葉を聞いて、探がパソコンを取り出した。それを立ち上げると文書ファイルをコナンに見せた。

「けどここに書かれた事を知ってるのは僕らと高木刑事、佐藤刑事だけです。それほど大事な話なんですよ」

コナンはそれよりもここでパソコンを立ち上げた事を気にしていた。それで患者に悪影響を及ぼす事を気にしているのだろ。それに気がついた平次はさらっと言った。

「これは白馬と快斗と俺が一緒に作ったんや。医療機具には影響を与えず防備が抜群にいいから安心せえ」

「お前らって凄いな・・・」

そう言いながらその文書を見ていた。

その内容と自分だけしか知らない事を組みあわせながら・・・

file 59・自覚めた男の子（後書き）

やっとコナン君、まともに動きだしました。

次は平次とコナンの好きな人出します

その後戦う・・・はずですが、  
(、、;)

戦いのところは、文字数だけ増やして、話の数は減らす・・・という予定です。

少なくとも普段の2倍以上は書かれています。

だから投稿頻度自体は減る・・・という予定です。

皆さんは普段どおりか、さっき言ったほうかどちらがいいですか？  
教えてください！

ちなみに白馬君の過去は第二作で出したいと思います

読みたくないかもしれませんが、書くので良かったらよんで下さい

m ( . . ) m  
| . .

ではまた (^ ^ )ノ

file 60・隠していたこと・・・

コナンは長い休養をとったお陰もあり、足は少し痛む程度に回復していた。

担当の医者も看護師も明日には退院できると言った。

「よかったなあ！これで組織とも戦えるやないか！もし明日、目覚ましたんやったら間に合わへんかったかしれんしな」

平次はその事実<sup>に</sup>素直に喜んだ。しかし快斗と探はいまひとつ納得できていないようだった。

「どうしたんや？」

平次が聞くと、快斗がためらいがちに話し始めた。

「今回、なんで、こんなに遅く目が覚めたのか気になるんだよ。大体、こいつは撃たれたことあるんだぜ。そういうことに対する耐性が出てたっておかしくねえ。そう・・・あまり本人の前では言いたくねえんだけど、何か後を引きずったことがあの時あったんじゃないか？」

平次はうなずくと言った。

「確かにそうやなあ。工藤心当たりないんか？」

平次のがそう聞いた。もちろん、コナンの助けになるように、と考えてのことだった。

「えっ、ああ、あいな・・・」

コナンはとても焦っていた。平次の配慮はよく分かったが、それを教える事はできなかったのだから・・・

コナンはそんなことを考えながら、3人を見ると、快斗と探はコナンの気持ちが分かるのか、コナンに深く突っ込まない姿勢でいるようだったが、平次はイライラしてるのが良く分かった。

それを見て、手に持っていた缶コーヒーを落としてしまった。コナンはそれを見て、自分がどれだけ焦っていたかを自覚した。

「あっ、大丈夫か？」

快斗が缶コーヒーを拾ってごみ箱に捨てた。そしてその後、平次に向き直り、言った。

「お前・・・俺らみたいに組織になんか関わってるだろ」

さっきまでと打って変わったその話にコナンはおろか、探までもが驚いた。

平次も2人ほどではないもののびっくりしていた。

「な、なんやねん、そんないきなり・・・」

快斗は少し間を置き、3人の動揺が収まってから言った。

「いきなりじゃないさ、俺らの作ったファイルを見る」

そう言われ、コナンと探は、ベッドに備え付けられている机の上のパソコンを見た。

しばらく2人は考え込んでいたが、何か見つけたのか、同時に頭を

あげた。

そしてコナンが言った。

「この一文を見てみる、服部」

そしてある一文を見せた。

“1990年、大阪にポルシェ356Aを発見。その車を停めた建物の内部ではボスと呼ばれる人物がいた。・・・”

そして探も言った。

「たぶん黒羽君は気づいたんですね・・・警察にはこんな記録が無いことに・・・そうです、こんな普通のこと書いてあるはずがないのですから・・・それに、僕も、黒羽君も、工藤君も、この年には大阪に行っていないせん。だから分かったんです。君の思い出だね・・・」

平次はそれを聞いて、あきらめたのか、話し始めた。そのときのことを・・・

file 60：隠していたこと・・・（後書き）

前回は平次、コナンの好きな人を出す！

と言っておきながら病室での話を出してしまいました（汗）

次回も・・・と思っている方も多いでしょうが、今回は蘭たちです。というわけで、平次の過去は短編で出します！

よかったら読んでくださいね

白馬君のほうは、第2編になってからしか関係しないのですが、平次は第一編に関係します。

が、ここで書かなくてもいいかな、という判断です。

\*ついにPVアクセス10万突破です！

ユニークも3万行きました！

これは読者の皆様のお陰です！

本当にありがとうございます

file 61・蘭の想い／新一に向けて

「なんで・・・なんで・・・新一は私に言ってくれないの？」

蘭はそう言葉を漏らした。隣に和葉が居るにも関わらずそんなことを言うのには訳があった。

それは昨日コナンの見舞いに行った時だった・・・

「やっと目え覚ましたで！！姉ちゃん来てみいや！」

服部からそう電話を受け、園子と遊ぶのもキャンセルして、急いで病院へ向かった。そしてコナンの病室へ向かい、ドアを開けようとした時のことだった。

「まだ、毛利の姉ちゃん来んよな？」

「当たり前じゃないですか。さっき電話したばかりなのに」

そう言ったのが聞こえた。

（服部君と白馬君の声だわ）

そう分かれると、蘭は気配を消した。コナンたちは油断していたのか、蘭に気づくことなく続きを話し始めた。しかし小声で話していたらしく、ところどころ途切れてき終えた。

「お前は・・・闘って・・・命を落としたら・・・毛利の姉ちゃんが・・・やないか」

「でも、俺はやらねえと。・・・と新一として会いたい・・・だろ？」

「そうですね、彼も・・・だし、・・・」

「そやな。分かったわ。頑張りや！」

「でさ、俺らの分担・・・ねえから・・・」

それからしばらく聞いていたが、コナンが闘うこと、死ぬかもしれないことを聞くと、蘭は静かに病院を出た。

家に着き、自分の部屋に入ると、今まで耐えていた分、一気に涙が出てきた。

その涙はずっと止まらなかった。どれだけ泣いても、泣き止まなかった。

蘭は夕食を作ることも出来ず、蘭を慰めようとした和葉にも“構わないでよ！”と半ばキレ気味で言ってしまった。

蘭はその夜、寝ることも出来なかった。

2人はしばらく気まずい雰囲気になっていたが、和葉は名案を思いつくと、部屋を出て行ってしまった。

「新一・・・私はどうでもいい存在なの？大事な話も出来ないよう

な・・・」

蘭は夜空を眺めながら言った。眠さは自然と感ぜられず、ただ、悲しみだけが襲った。

しばらくぼうつとしてしていると、蘭の部屋のドアが開いた。その主は和葉だった。

和葉は少し笑うと言った。

「蘭ちゃん、何の助けにもなれへんかもしれへんけど、多分、今必要なのはこの人やと思うで」

そういうと和葉の後ろからコナンが出てきた。

「ほな、頑張りや〜!!」

和葉はそういうと部屋から出て行ってしまった。

蘭とコナンは2人きり・・・

自然と、気まずい雰囲気 flowed。

最初に話し始めたのはコナンだった。

「戻ってきたんだ。まだ少し痛みが残ってるけど、安静にしていれば大丈夫」

「そう・・・よかったわね・・・」

コナンは心配になった。その反応はおもいがけなかったからだ。

「ら、蘭？」

「なに？」

蘭自身は気づいてなかったが、蘭の目から一粒の涙が流れていた。  
コナンは蘭の近くへ歩み寄ると、ゆっくりと、落ち着かせるように言った。

「どうした？大丈夫か？」

「・・・んで・・・なんで、私に言ってくれなかったの？」

コナンは驚いた。まさかこんな日に限って聞かれるとは思っていなかったからだ。

「私だって、新一の力になりたいよ！別に一緒に戦えるなんて思っていない。けど・・・けど・・・せめて心配事とかは聞いてあげたい！だから、私にも教えて！」

蘭は涙を流しながら言った。それは本気でそう思っているからこそ  
の眼だった。

コナンはそれを見て蘭には言おう、と決意した。

「ごめんな、蘭。俺はお前に言えなかった・・・ホントに勇気ねえ  
よなあ・・・お前と違って・・・けど、今なら言える・・・俺、明  
後日、闘うんだ。組織と・・・お前に言うが無茶しかねないから黙  
ってたけどな・・・本当は服部とかを巻き込んだことに不安があっ  
たんだ・・・お前がそういつてくれるだけで少し安心できた。あり  
がとな」

これが今のコナンに言える最大限の言葉だった。蘭に言ったその言

葉は本当に嘘偽りはなかった。蘭はそれを聞いて笑うと言った。

「うん。これからも心配あったら何でも言ってよ！新一が安心できるようにしてあげるから・・・」

それから2人の空気は穏やかになった。

それらをドアのそばで聞いていた和葉は言った。

「かわいいなあ、蘭ちゃん。工藤君もかっこええわ。けど、今は・・・」

そついうと和葉は外に出て行った。

file 61：蘭の想い／新一に向けて（後書き）

今日仕上げました！

早速投稿します

そっぴゃ、もうすぐコナンとルパンのアニメ見れますよね！  
結構楽しみにしてるんですよ、私

では、次回の和葉バージョン楽しんでくださいね！  
出来次第載せます

file 62・和葉の想い／平次に向けて

和葉は蘭たちのもとから去ると、平次が今いるであろう、杯戸ホテルへ行くため、待たせていたタクシーに乗った。

タクシーのドアが開くと、和葉はそれに乗った。

「ごめんなあ、待たせてしもて」

和葉は申し訳なさそうに言った。

「いいんだよ、お友達のことか心配だったんだろ？タクシー代もただでいい。だから自分のことも頑張ってこいよ」

運転手は笑ってそういった。それを聞いて和葉は驚いた。

「な、なんでおっちゃん、うちの思ってたこと知ってるん？うち一言も言っていないはずや。なのに・・・」

運転手は笑っていた。それには可愛い子どもを見ているような雰囲気があった。運転手は非科学的な推理を話した。

「君の言動を見てたら分かるよ。僕も同じ経験をしたことがあったからね。重ねあわせたら、簡単だったよ、あ、もうすぐ着くね。降りるかい？」

そう言われ、和葉がお金を取り出そうとすると、運転手は和葉の前に手を置いた。

「君は払わなくてもいいよ。これから人生でもっとも大変な時がくる。だから、もしお金が払いたいんだったら、また僕のタクシーに乗ってくれ。それでいいだろ？」

和葉は紳士的な運転手に感動した。都会でこんなにいい人を見つけたのは初めてだったからだ。

「じゃあ、おっちゃんまた今度乗るな!!」

運転手は笑いながら頷いた。それを見て和葉はタクシーから降りて、ホテル内に入っていた。和葉が見えなくなると、その運転手はタクシーを降り、言った。

「ありがとよ、うちの蘭を助けてくれて・・・本当に感謝してる・・・」

和葉は建物の中に入ると、平次が居る10階へ行くため、エレベーターに乗った。

すると一緒に乗っていた金髪でロングヘアにしている外人の女の人が声をかけてきた。

「何階に行くの？」

「10階です」

その女の人は10階へのボタンを押した。少し経つとドアが閉まり、エレベーターは上へ昇っていった。

9階まで上った時、女の人が話しかけてきた。

「このホテルは今危険よ。あまり来ないほうがいいわ」

「へっ？」

和葉はいきなりの言葉のあまり、間抜けな顔になってしまった。それを見て、女の人は有無を言わさぬ、といった表情で言った。

「これは聞いておいたほうがあなたのためだから」

そこまで言われると言い返すことも出来なかった。

10階へ着き、和葉が降りると、その女の人は言った。

「この17階では組織のメンバーが集まってるんだから・・・あの子の友達なら・・・危ないわ」

和葉はエレベータを降り、平次がいる1008号室へ向かった。

（平次・・・平次・・・お願いやからおって・・・）

そう思つて部屋に着くと、平次は居なかった。

「平次・・・おらん・・・なんでなん？うちの気持ちぐらい聞いてくれないえやん！」

そう言った時、和葉の目から一粒の涙が零れ落ちた。その時、後ろから声がした。

「あつ！！和葉やないか！」

そつーその声は平次だった。平次はたまたま外出から戻ってきたところだったのだ。

「へ、平次？」

和葉の顔を見て平次の態度はいきなり変わった。

「か、和葉！？泣いてんのか？とりあえず俺の部屋に入りや」

平次はそついつて和葉を部屋の中まで連れて行った。そして和葉に聞いた。

「なんであんなところにおつたんや？」

和葉は黙っていた。半ば意地にもなっていた。そのまま和葉がずっと反応しないで居ると、平次は和葉に抱きついた。それはほんの瞬間のことだった。

和葉はその瞬間心拍数が上がり、顔も赤くなっていた。しばらくして、平次のほうから話し始めた。

「ごめんな・・・俺んとこ来たんは俺が危険なことするから・・・なんやろ？俺がお前とどんだけおったと思ってんねん。そんぐらい気付くわ。俺はな・・・どうしてもその組織と戦う必要があるんや。危険やと分かつてる・・・けどな、俺は行く。でもこれだけは言える。俺は死なへん。生きて和葉の元へ帰ってくる。それは約束や」

「いやや！！うち、前、平次を笑って送るとか言っただけど、実際そ

んなことでできへん！！うちは平次がおらんとやっていけへんもん！！お願いやから平次、そんな危険なこと止めて！！」

和葉の言葉を聞いて平次は行くのを止めようと一瞬思ってしまった。しかし再び思い直すと、和葉を今までよりも強く抱きしめ、言った。

「和葉・・・俺を信じろや。俺は絶対に和葉との約束を破らへん。な？だから安心しいや」

平次は和葉を抱きしめていた手を離れた。その時和葉は平次の顔を見た。その顔は“きらきらしてる時の平次”そのものだった。それを見て、和葉は言った。

「うん。それでこそ平次や！！」

そういつて和葉は笑った。その顔を見ると平次も朗らかな気分になってきた。その後、平次は言った。

「和葉、眼え閉じろ」

「えっ？」

和葉は戸惑った。脈絡のないその発言に。しかし、和葉は平次に言われたとおり、眼を閉じた。

平次はそれを確認すると、和葉の唇にキスをした。

和葉は顔が赤くなった。しかし、平次も赤くなっていた。しばらくすると、キスを止め、言った。

「これは約束のしるしや」

平次はかなりテレながら言った。今日だけは、和葉も喧嘩を売らなかった。

「うん・・・」

その日はこの2人にとって思い出の一日となった。絶対忘れることのない一日に・・・

file 62・和葉の想い〜平次に向けて（後書き）

今回は長かったです。ハイ（汗）

けど、結構私としては気に入ってるんですよ！

平次君・・・大胆でしたね（＊　　）v

あ、そうそう、和葉が前言ってたことはfile 14・和葉の気持ち、に書いてありますので、確認したい方は読んでください！  
次から本当に組織編！！

書く私も楽しみにしてます。＋・（　・　、　）°。＋・  
後もう少しです！

ついてきてくれますか（笑）

では、また次回お会いしましょう（＊・・・）ゝ

”（・・・＊）

\*file 60 修正いたしました。1985年　1990年です。

## file 63・待ち望んだ日

今日は長い間待ち望んだ、組織と決着をつける日・・・そのせいか、コナン、快斗のみならず、平次、探までもが緊張していた。4人はFBIの借りているビルで、話していた。

「やっと来たって感じやなあ」

平次が言った。

「ああ、色々あつて結局先になったからな。今日はやっと・・・本当に・・・」

コナンがそうしみじみと思っていると、隣から快斗が口を挟んできた。

「けど、これでやっと因縁が断ち切れるんだ。今日はその記念すべき日だと思うぜ」

そこまで言った時、ジョディがコナンたちを呼びに来た。

「行くわよ！白馬君、コナン君はここに居て・・・いや、白馬君だけでもいいわ。君は行きたいんでしょ？どうせ止めても同じなんだから」

「分かっているなら最初から言つてよ。ね？」

そう言うと、白馬を除く3人は出ていった。

「頑張ってくださいよ、快斗君、平次君・・・そして工藤君・・・」

「けど、赤井さん迷惑じゃなかった？僕達を車に乗せて。ジヨディ先生の車でもよかったのに」

コナンは言った。――そう、ここは赤井秀一の車。赤井はコナン達を組織のアジトへ連れて行くつもりでいた。

「いいさ。君たちはかなり頭がいいみたいだからな。怪盗キッド、西の高校生探偵、東の高校生探偵の3人なんだから・・・」

「えっ？」

コナンをはじめ、平次、快斗の3人は、驚いていた。無理もない。一度も赤井には正体をばらしたことはなかったのだから。それを読み取ったのか赤井は言ったって普通に言った。

「分からないはずがないだろ。怪盗キッドは黒羽盗一がなくなってから再び現れた。そして組織の求めている宝石ばかりを狙うなんて偶然とは言いがたいだろう？ただ、工藤君がコナン君だと気づくのは時間がかかったな。まさか、幼児化なんてそんなことあるかと思っていたのが間違いだった。そう・・・あの子に会うまでは・・・あの子を見たら、幼児化のことを認めるしかなかった。そこからは簡単だったよ。毛利探偵が出てきたのが、君が探偵としてテレビに出てこなくなったちょうどその時なんだから・・・それさえ分かれば十分さ。だから分からないはずがないと言ったんだ」

コナンは赤井の話を聞いて聞き返した。

「あの子って言うのは灰原のことですよ。やっぱり赤井さんは知ってたんですね。まあ予想はしてましたけど」

赤井はそれを聞いて言った。

「まあな。あの子の薬の話は聞いた事があったからな。髪の色もそっくりだったし間違いないと思ってね」

赤井がそれを言って以降誰も話そうとはしなかった。その代わりみんな物思いにふけていた。

コナンは蘭に出かける前にもらったお守りを強く握っていた。

（絶対・・・絶対戻ってくるからな・・・蘭・・・）

平次は和葉との思い出の品でもある、鉄の鎖が入ったお守りを付けた携帯を眺めていた。

（和葉・・・お前に言ったことは必ず実現させなあかん。やから今死ぬわけにはいかへんのや。待つとけよ、和葉。必ず生きて戻って来たるから・・・）

快斗は青子のことを思っていた。

（青子・・・俺がちゃんと守ってやれなくてごめんな。代わりに今助けてやるから・・・こんな俺でも出来ることはあることだけ分かって欲しいんだ。お願いだから生きてくれ。頼むから・・・）

さらに、赤井も明美のことを思っていた。

（俺も明美が好きだ・・・お前が泣いた時は本当にずっと一緒にいたいと思った。だが・・・結局お前は俺のせいで死んでしまった。その敵を今、討ちに行く。だから・・・安心して眠っててくれ、明美・・・）

彼らは今からそれぞれの思いを抱えながら戦いの場へ踏み込んでいく。それぞれの大事な人を守るために・・・

file 63・待ち望んだ日（後書き）

ついに決戦！！

まだ組織のアジトへは入っていません（汗）

けど、やっぱり決戦のプロローグ的なものが必要ですからね。

今回は書きました！

今日は作品を書けそうです！

まあ、最近はそんなに投稿できていません・・・（・・・；）  
だから頑張りますね！！

やっぱり決戦となると深く考えないといけない・・・

それは結構大変ですね・・・

あともう少しです！

誰か私にやる気を出させてください！

最近なんかやる気が低下して・・・

お願いします！

それではまた　^（\*・・・）ノ

## file 64：遠くから見た城

コナン達はいよいよ組織のアジトまで来た。そうはいつても3キロ以上離れた街の中からはんやりとしか、今は見ることは出来なかった。

「あれが組織のいる場所・・・」

コナンはそう言った。しかし、一同は驚いても無理はないと思った。それもそのはず。彼らの使っているビルは廃ビルというには新しく、また、広さ、高さ共に普通のものを越していた。

「こんな東京都内に銃声も聞こえない場所があるとはな・・・」

赤井は素直に驚きを表した。平次はそれを聞いて何回も頷いた。

「俺もそう思うたわ！あんな排気ガス充満しとるような地域にこんな静かな場所があるなんてなあ」

しかし、快斗はそれよりも違う事で頭が一杯だった。それを見た平次が快斗を心配したようだった。

「どうしたんや？めっちゃ凄い顔しとったで？そりゃあ、青子ちゃん心配なんやろうけど余計な事考えたら失敗してしまうかもしれないで？」

それを聞いて快斗は返事した。しかし、それは平次が思っていた返事とは違うものだった。

「確かに青子は心配だけど、あいつは大丈夫な気がする・・・それ

より俺は鳥取にあつたアジトをここまで持つてくる必要性があつたのか、それが気になるんだ。それが今回の重要なポイントになる気がしてな」

そう言つた快斗に続き、コナンも言つた。

「俺も・・・それは気になつてたんだ・・・けど古い方は任せようぜ・・・恐らく関連性だけが力ギだ・・・そう踏んだからお前らはこちらに来た。・・・だろ？」

平次を始め、快斗、赤井もが首を横に振つた。そして平次がコナンに語りかけるように言つた。

「いや、確かにそれもあるけどな、俺らは全員組織の被害者や。な？」

そう言つて平次は快斗や赤井を見た。2人はそれに感づいたのか言つた。

「そうだよ。俺も父さんの敵討ちたいし」

「それに俺だつて明美のことが・・・な」

その後、間髪いれず、快斗と赤井は言つた。

「そついや、体調大丈夫か？さつきからやばいんじゃないか？」

二人は同時に言つた。それがハモつていたので、平次は笑つたが、快斗と赤井はそれどころではなかつた。

「今日はやめとくか？今ならべないから引くのも手だ」

赤井はさらに言った。それを見て、平次はスポーツバッグを持ち、赤井の横に割り込んだ。

「ほら、早う着替えてこいよ。もうすぐジョディ先生来んで！」

平次の荷物を受け取るとコナンは言った。

「ああ・・・行ってくる・・・うつー！」

そう言つてコナンは座りこんでしまった。平次はそれを見るとコナンを抱き抱え、バッグを肩に掛けると言った。

「効き目早いなー。しゃーないわ。俺が連れてつたる！あと何分くらいや？」

コナンはとても苦しそうだったがはつきりと言った。

「あと・・・3分くらいだな・・・」

「分かった。それやったら間に合うわ」

そういうと平次は全速力で走っていつてしまった。平次は焦つていたので何があるのかさえも聞かされず取り残された快斗と赤井は呆気にとられていたが、快斗が何か気づいたようだった。快斗はふつと笑つと、車の中から何か取り出した。それを見た赤井は快斗に聞いた。

「何をしているのか分かったのか？」

赤井のその質問に快斗は丁寧に応えた。

「はい。赤井さん、あいつの正体知ってるんでしょ？だったら考えてみてください。意外と簡単に分かりますよ。まあ、待ってれば分かりますが」

それを聞いて赤井は何をするのか悟ったようだった。そして再び快斗に話かけた。

「あれか。しかし・・・本当にあるとはな・・・驚きだ。俺の言った話は理論上の話だったからな・・・本当に見ることはないと思っ  
てたんだ」

そう言ったとき赤井は話さなかった。快斗もムードに呑まれたのか、話すことはなかった。しばらくすると、平次達が帰ってきた。2人の予想通り、平次の隣にいたのは“江戸川コナン”という小学1年生ではなく、“工藤新一”という高校2年生だった。

「ほら、工藤やで！」

平次がそう言うと新一は快斗と赤井の方に向き直り、話しはじめた。

「俺、この姿で組織と闘おうと思うんだ。やっぱり小さいと不利だしな」

そう言って二カツと笑った。それを見て快斗はとても喜んだ。

「うん！それがいい！やっぱり真剣にやりたいしな！あっ、そうそう、これやるよー！」

そう言つて快斗はバッグから銃を取り出し、新一に渡した。

「その中身は実弾だ。父さんの部屋で見つけたんだ。今渡したのは2つだけだけど、銃弾は一杯ある。だから持つとけよ」

そう言つてバッグも投げた。新一はそれを受け取ったが、戸惑いがあるように言つた。

「俺、外したらどうすんだ？昔やったきりだから自信ねえぞ？キツドのお前が持てばいいんじゃないか？」

新一の発言は最もなものだった。赤井もその意見に同意した。

「確かに。君は凄いがプロが持ったほうがいいかもしれない。やはり、銃は危険が付き物だからな」

その発言を聞き、快斗が思いつきり笑いはじめた。

「まさか！あいつの方が俺より銃の扱い方は上手なんだぜ？それに世間をにぎわせた時計台の事件あんだろ？あん時、あいつが撃ってきたんだ。俺、あれを見て、捕まっちゃうかと思つたもんない。だから安心しな。多分赤井さんには敵わねえだろうが、俺よりはうめえよ！」

それを聞いた平次は新一の肩の上に手を置くと言つた。

「本当、俺の見込んだライバルやわ！俺はやっぱ刀やる！」

そう言つて腰に刺した2本の刀を見せた。

「成る程。真剣か。これは期待出来そうだな。君が負けたって悔しそうに言ってた沖田君はジュニアチャンピオンらしいからな。君はこういうことがあるだろうと思った時から習っているんだろ？君の父に」

「まあな。少ししゃくやっただんやけどな」

平次は照れながらも言った。平次は話題を変えるため、新一に話しかけた。

「そういえば阿笠のジイさんに頼んで作って貰ったんやろ？サッカーボール。結構凄いいんやろ？」

新一は頷いた。そしてポケットから小さな箱を取り出すと言った。

「これさ。ピンを抜くとサッカーボールになるらしいぜ。30個あるからどうにかなんだろ」

それを見て快斗は驚いた。

「どうやって作ったんだ？こんなもん見たことねえ。その博士に会ってみてえ！」

快斗はかなりテンションが上がっていた。手の付けられない程だったので、新一はさらに話題を変えることにした。

「で、黒羽は何を持って行くんだ？」

そう聞かれ、我に戻った快斗は照れながら言った。

「いけねえ。すっかりテンション上がったぜ」

そう言ったあとキリッとした顔になった。

「俺は怪盗キッド用の道具さ。まあ改良とか、装備品を増やすのとかはじいちゃんに頼んでしたんだけどな」

そう言った後、快斗は後ろに指を指した。

「FBIとCIAだぜ！俺らもそろそろ行くか！」

そういつてみんなは車に乗ると、組織のアジトに向かっていった。しばらくして組織のアジトに着くと赤井が言った。

「先に入った部隊がある。だから今出てもばれないはずだ。行くぞ」

その言葉を聞いて、3人は車を出ると、中へ進んでいった。  
楽しい未来を守るために・・・

file 64：遠くから見た城（後書き）

すみません・・・

余計なものばかり・・・

そっとうのを書くのだけは発達してしまったようで・・・  
馬鹿です、ハイ……

あ、今回のコナン対ルパン見ましたか？

私、最後のほう結構気に入ってるんですよ！  
もう一回みようかなー。

本当に次からちゃんと組織の中かきますので！

本当ですね・・・書きたいこと自制しないと・・・

では！

file 65・とうとう突入！！

中に入ると、そこではFBI、CIAの人々が、組織の人間と戦っていた。

新一達は今日のために持ってきた道具を使いながら上に登っていた。

快斗は10階に来た時、その状況を見て小さい声でつぶやいた。

「これ、ヤバイな。マジで俺ら死ぬかも・・・」

それは新一も平次も思っていたことだった。赤井はこういう状況になったことがよくあるからか、あまり反応はしなかったが、高校生三人組の思いは本物だった。

しかし、真っ先に立ち直ったのは、平次だった。

「ここでおる方が絶対ヤバイで！！取りあえず上あがろうや」

その案を赤井は否定した。

「いや・・・今は劣勢だ。だから俺がここに残る。片付けたら行く！だからお前らは先に進め！」

赤井はそれが最善策だと判断していた。もちろん、それは半分賭けだった。戦闘経験がない人間を先に進ませる事に抵抗があったからだ。しかし、今回だけはこの3人に賭けたのだ。3人はこのフロアの広さを見て判断し、言った。

「赤井さん、お願いします！任せますね！」

そう言うとすぐに登って行ってしまった。

「頑張れよ。君達なら出来るはずだから・・・」

13階まで登った時、小さな物体が快斗の所にやってきた。

「なんだ？それ」

新一はその物体を持ち上げると言った。快斗は新一の手から物体を取り返すとその物体をなでながら言った。

「これはグランパパだよ。警部からもらったのを改良したんだ。これで青子の居場所が分かったぜ！」

そう言うとき快斗はケータイ型をしたものを取り出し、ある映像を映し出した。早送りしながら快斗は素早く確認していき、青子が写ったところで停止ボタンを押した。

「青子は18階だ。騒ぎに乗じてじゃないとグランパパは壊されるかも知れなかったからな。良かったぜ、壊されなくて。じゃ、俺は青子を助けに行く！後はよろしくな」

快斗はそう言うとき上に行ってしまった。新一と平次は危険の及ばない物陰に隠れると、

「行っただけ、あいつ・・・でも妙だ。なんでここは地下がねえんだ？ここは例えれば城だ。いくら広いからって逃げ道を用意しないのはもしもの時やバイだろ？それに、俺の予想では機密は地下にあると踏んでたのに・・・」

新一はかなり深刻な顔で言った。それに加えて平次も疑問を口に出した。

「あんな、俺も気になる事があるんや。それはこの人数や。新設したんなら、もっと人数少ないはずや。そう踏んだからFBIの人数が少ないんやろ？で、苦戦した・・・と。もしかしたら鳥取の方は人があんまおらんかもしれへんなあ」

新一と平次はしばらく考え、上に登る事に決めたようだった。しかし、次の瞬間、2人の考えは180度変わった。そう、新一のケータイに電話がかかってきたのだ。新一はそのケータイを平次に渡し、護衛に回った。

『工藤君と服部君ですね？快斗君は恐らく君達とはいないんですよ？助けに行ったでしょうから・・・』

探は一息つき、深刻な口調で話しはじめた。

『実は・・・鳥取の方はあまり人がいないようです。というかしたっぱしか居ないみたいで・・・もしかしたら狙いはこれだったのかもしれないですね。僕、そっちに行きますね。さっき変わってもらいました』

平次はそこまで聞いて、やっと口を開いた。

「なるほどなあ。よく考えてんで。感心するわ」

平次はそこからずっと真剣な表情になると、探を諭すように言った。

「いや・・・あんたはあのガキ達を見てて欲しいんや。このままやったらあのガキにまで危険が及ぶからな。得に灰原つて子をな」

探が不満なのは電話越しに分かった。しかし、冷静に情勢を判断した探は了承したようだった。

『分かりました。気をつけて下さい。あの子達はちゃんと守りますんで』

その一言を聞き、平次は電話を切ると新一に返した。

「ヤバイな。今、監視をつけてないんやったら・・・って工藤？」

そう。。。平次が話している間に正面には敵が現れていたのだ。その相手は新一が小さくなった元凶の人物、ウォツカだった。ウォツカと新一達は15メートルほど離れた、柱の端と端に立っていた。

「お前らの相手は俺だよ。あの方はスピリタスと戦うのを楽しみにしてらっしゃるようだが・・・ここで殺した方が早いだろう？」

そう言つて銃口を新一に向けて撃ってきた。新一は避けたり銃を撃つて相殺したりしながら応戦していた。新一は隙を伺い、ウォツカに聞いた。

「赤井さんは味方なんですか？」

ウォツカは手を止めると怪しげな笑みを漏らした。サングラスをつけているせいか、その笑みはかなり不気味だった。ウォツカは銃口を新一の方に向けると、口を開いた。

「まさか、仲間な訳ないだろう。これで本当にさらばだ。工藤新一」

ウォツカはそう言うと、引き金を引いた。新一はさっきまで銃を下ろしていたので、反応が遅れてしまった。新一は死を覚悟し、目をつむると動かなかった。しかし、新一カン、と音が鳴り、銃弾が自分を貫かなかったのが分かると新一はマヌケな声を出していた。

「あれ？」

新一が目を開けると、正面に剣を構え、銃弾を跳ね返した平次が居たのだった。

「工藤、お前マヌケやなあ。避けれるはずやで？あいつはお前が倒しや。そうしたいやろ？」

平次は全てを見透かしている――新一はそう思った。そして新一は左手をポケットの中に突っ込むと、小さい物体を3つほど出し、地面にばらまいた。

ウォツカはそれを見て油断したようだった。

「勝ったな」

ウォツカがそう呟くと同時にそれはどんどん大きくなっていった。ウォツカは反応が遅れたせいで2つしか打ち返せなかった。

新一は残った一つを思いっきり蹴った。それはウォツカの顔面に衝突し、ウォツカは意識を失ったようだった。

それを確認すると、ウォツカの所持していた銃を全て取り出すと、離れた所に投げ捨てた。

そして、手足を縛り付け、動けないようにした後、新一は言った。

「お前のお陰で助かった。ありがとな」

平次は照れ臭いのか、頭をかいた。

「改まってええて。取りあえず薬のデータ探さなな」

その時、平次は柱にぶつかつた。するとその柱は回転し、平次は落ちていった。それを見た新一は自分もその中に飛び込んだ。落ちていく流れに乗りながら平次は新一に聞いた。

「なんでお前まで落ちて来たんや？アホちゃうか？」

それを聞いて新一は頷いた。しかしそれは肯定の意味だけではなかった。

「確かにバカかもな、俺。けどな・・・探偵の勘で何となく落ちた方がいい、と思ったんだよ」

「探偵の勘・・・なあ」

平次は何となくだが納得出来る気がした。だから、それを呟いていた。

新一は平次と落ちている間に蘭に呼ばれた気がした。そーー東都タワーの事件の時のように・・・

それは新一と蘭の絆がそうさせたのかもしれない。古くからの切つても切れない絆が・・・

file 65・とうとう突入！！（後書き）

前の更新から2週間以上たったんではないでしょうか（汗）

さまざまな理由により投稿が遅れました。

春休みの宿題が終わらないってのと、テストがあつたのが関係します。

でも！！じつはもう一話書けてるんですよ

それは何日かしたら投稿します^^

あ、平次の中学生の時の組織との思い出について、投稿しました。  
まだ1話しか書いていませんがよかったです読んでみてください！！

では！！

## file 66：園子の策略

蘭は園子の家に向かって走っていた。

蘭はかなり焦っていたので、蘭は誰かとぶつかってしまった。

「すみません。急いでて・・・」

その人は優しく微笑んで答えた。

「いいですよ。って蘭さんじゃないですか！どうしたんですか？」

そうー！ぶつかったのは涉だったのだ。周りには美和子、千葉、白鳥といった捜査一課のメンバーが集まっていた。

蘭は時計を見て時間を確認した後、少し早口で聞いた。

「今日はどうしたんですか？確か今日は非番って聞きましたけど」

蘭の問い掛けに美和子は深刻な顔付きになった。そして、蘭の耳元で小さい声で囁いた。

「あのね・・・ある事件が署内で起こったの。それを調べるために私達特別に派遣されたの。それでお願いなんだけど・・・毛利さんにも協力を頼めないかしら。全て話すから・・・ね？」

そう言われ、蘭には思い当たる節があった。

「それってもしかして・・・」

そう思い、美和子に自分の思ったことを簡潔に話した。すると美和

子の顔が驚きの表情に変わっていった。

「えっ？どこからそれを？」

「昨日園子に聞いたことと私の知ってることです。もし、本当なら危険だと思ってたんですが・・・本当だったみたいですね」

蘭は再び時計を確認すると4人に向かって提案した。

「あの・・・今から園子さん家に行きませんか？私が頼んで情報を前から集めてもらってたんです。多分役に立つと思いますから・・・」

「

最後の方は小さい声になってしまったが、4人は聞き逃さなかった。

「分かりました！行きましょう！」

渉は言った。他の3人も頷いた。それを確認した蘭はすぐに走り出した。しかし、小五郎に伝えることは、みんなすっかり忘れていた。

しばらく走って園子の家に着くと、園子が直々に迎えてくれた。

「京極さんも居るけどいいよね？ってなんで後ろに刑事が一杯いるの？」

園子はそう聞き返した。蘭は少し申し訳なさそうな顔をしながら言った。

「成り行きで・・・ね。じゃ、入っていい？」

「じゃ、詳しく説明は私の部屋で」

園子はそう言うと2階へ登っていった。

園子についていき、部屋に入った渉は驚きの声をあげていた。

「広い！園子さん、凄いですねえ。僕なんて、自分の部屋なかったんですよ！羨ましいなあ」

園子は普段は見せない寂しげな顔をすると言った。

「けどあまり友達は来ないわ。蘭ぐらいかしら、来てくれるのはね。なんか厭味に見えるみたいよ。ま、仕方ないけどね」

そう言ったのを聞いた真は園子の目の前に立ち、言った。

「僕はそう思いませんよ。ここは園子さんが住んでる家。それ以外の何物でもないです。だから・・・そんなこと言わないで下さい。そう思わなくなれば他の人も来てくれると思います」

最初蘭は冷やかすつもりだったが、それは出来なかった。

園子の生まれながらにして持ってしまったそのコンプレックスに氣付いてあげられなかった・・・それが辛かった。

周りにいた刑事達もそういうムードに引き込まれていった。

それにいち早く氣付いた園子は、両手を何回か叩き、言った。

「あ、しみりムードになっちゃったわね。気にしないで。私、蘭も真さんもいるし、幸せだと感じてるもの。それで充分よ」

そう言った後、机の周りにみんなを座らせると、園子は鞆から、あのレポートを取り出した。

「これを見て。鈴木財閥で調べた事よ。やっぱり表向きではあまり調べられなかったわ。だから裏ルートで調べたの。かなりヤバイ組織よ、警察にまで入り込めるんだから……」

そう言うのと、蘭に見せたあと、渉に渡した。

「かなり調べたね。もしかしたらこれは鈴木財閥にとっても危険なものじゃないのかな？」

白鳥は冷静に、しかしはつきりと聞いた。園子もはつきりと答えた。

「まあ、リスクは元から負うつもりだったしね。っていうか、大体この話を蘭が知ってて、組織について分かっていた時点で気づいたの。何もしなくても殺されるってことにね。これは佐藤刑事達にあげるわ。使って。ただ……私の言うこと聞いてもらうわよ」

そういうと、封筒を手渡した。美和子はここで開けていいと確認すると、ゆっくりと封を開けた。中を見て、美和子のみならず、脇で見ていた渉、白鳥、千葉も反対した。しかし、園子は反論した。

「最初は私達だけでやろうと思ってたの。けどなんかあったら頼もうと思って書いておいたのよ。これには蘭も、真さんも了承した。だから……ね？お願いします」

3人の真剣な表情を見ると、折れてしまいそうだった。美和子達は警察官として了承する訳にはなかった。しかし、このまま放って置くと無茶するのは目に見えていたし、蘭と真がいるなら、監禁しようと思駄だと思い、美和子は決意を固めると言った。

「いいわ。仕方ないわね。けど、無茶はしないのよ！」

3人はその発言を聞いて深く頷いた。

しかし、この時はだれも気付いていなかった。園子が秘密のレポートを隠していることに・・・

file 66：園子の策略（後書き）

今回の話を見て、期待はずれと思った方も多いですよ（汗）  
確かにこれだけはちよつと・・・ですよ。

けど、これは蘭や哀のようなメインキャラが出てくる重要なつなぎ  
なんです！！

決してこの話はあの4人だけの活躍ではないですよ

だから安心して下さい！！

頑張りますんで

今回の話、ちよつぱり園子×真で好きなんですよねー  
でも、余計っていったら余計かなー。

私、シリアス系より恋愛が好きなんで〇（ ）〇

学校でもよく言われます（汗）

恋愛にすぐ結び付けるねって（笑）

あ、漆黒のチエイサーいつ見に行きますか？

私は・・・1週間以内に行きますよ

今回はいつも以上に楽しみです^^

じゃあまた（\*^ ^\*）/園子大活躍ですよ^^

（けどこれは70話余裕で行きそうですね。予定の2倍！？）



## file 67・警察の裏側

園子たちはすぐ行動に移した。

いざという時のために、警察の上層部に伝えておこうと思ったからだ。

蘭、園子を始めた7人は、すぐ目暮警部のところへ行ったのだった。

7人は目暮のいる、捜査一課に行った。そこは普段と違ってがらんとしていた。それを好機と美和子はすぐ目暮のところへいくと、用件を簡潔に話した。

「目暮警部、お話があります。この件のことなんですが・・・」

そう言って、プリントの一枚目を見せた。

その瞬間、目暮の顔つきは一瞬にして変わった。そして美和子、渉、白鳥、千葉だけを別の部屋に呼び出し、蘭と園子、真を外に出した後、言った。

「この件に介入してはならない。それは分かっていたはずだろう？  
白鳥君」

その時、みんなの視線が白鳥に降り注いだ。白鳥はそれを見て、観念したようで、言った。

「もちろん知っていました。だって警部以上なら全員知っているんですから。でも、僕、昔、ある女の子にこう言われたことがあるんですよ。『桜は警察の人がみんなつけてるマークだよ！強くて優しくてかっこいい正義の花なんだから！』ってね。それに感動して入った警察です。だから私はこっちにつきます」

それを聞いた目暮は冷たい一言を発した。

「君達はしばらく監禁状態下に居てもらう。私だっただけではないのだが・・・な」

そういうと目暮は出て行ってしまった。白鳥は急いで追いかけたが、扉が閉まってしまい、どれだけ力を入れても開くことはなかった。

しばらく経って、みんな状況を理解し、落ち着いた頃、千葉が話し始めた。

「でも、僕達、かなりヤバイ状況ですよね・・・もしかしたら・・・僕達は警察を・・・」

それを聞いたとき、白鳥が首を振った。そして上を向き、見渡した後、再び千葉に向き直った。

「いや、それはないです。なぜなら、僕達が知ってしまったのは警察上層部に関係があること・・・しかも白馬警視總監に探られても理由を付けられるほどの・・・だから大丈夫です。ただ僕の勘ですが・・・毛利さんこの件に関わっている気がします」

「ちよつとっ！！そんな事言っただけならどうするの！！」

白鳥はそう言われると美和子に向かって笑い、そして言った。

「大丈夫。絶対に聞こえません。上の監視カメラ、実は映像しか撮れないんです。だから音は入らないはずですよ。取りあえず状況を整理しましょうか」

そう言うのを聞いて、美和子がささず警察手帳を開き、ポケットからペンを取り出した後、見取り図を書き出した。その見取り図は単純だが、はつきりと分かりやすかった。

「よし、と」

そう言うて美和子はペンを置いた。それを見た渉はそこに書かれている内容をまとめるように話した。

「ちょっと怪しいですね・・・写らないのがテーブルの所なんて・・・」

「まあいいじゃない！！幸運と思いましょ！」

美和子は明るくそう言うつと、カバンの中に入れていたミニノートパソコンを出した。

それを千葉に渡し、頼んだ。

「千葉君、お願い。あなたパソコン得意でしょ？たしかそういうことも出来るって・・・だからこれでこの部屋のパスワード調べてほしいの。頼れるのはあなただけなのよ！」

そう美和子に言われ断れる人間がいるわけないーそう思っていた渉と白鳥にとって意外な返事が返って来た。が、それは正論だった。

「無理です。前撃たれた所、先週の犯人逮捕の時、痛めてて・・・タイプもかなり遅いんです」

その時、白鳥が椅子から降り、千葉のほうを向くと地面に正座した。それだけでも、すでに美和子と渉は驚いていた。しかし、次の瞬間、もっと驚くことになる。そう――頭を下げたのだ。あの白鳥が・  
・  
それを見て驚いている美和子と渉は放って、白鳥は話し始めた。頭を下げた状態で。

「お願いします。そういうことに詳しいのは君だけなんですよ！君の今の調子がよくないのも知っています。けど、これは国に関わる問題なんです！お願いだからやってください！！」

白鳥が頭を下げるのを見た千葉は断らなかった。確かに白鳥はエリートで少し鼻につく奴だ、とは思っていたがこういうことを冗談でする奴ではないと知っていたからだ。その返事を聞いた瞬間から4人はここから脱出するために分担して作業を始めた。

「目暮警部！！なんか言ってください！！」

4人が四苦八苦している頃、こちらでも騒動が起きていた。刑事はほぼ出払うという奇妙な状態に元々違和感を覚えていたが、4人に対する警察の動きを見て、何かある、と判断したのだった。だから、今、目暮に追及しているのだ。しばらくお互いに黙っていたが、目暮はゆっくり口を開き、言った。

「Need not to know（知る必要のないことだ）」

目暮がそう言った瞬間、蘭は左回し蹴りをした。それを見て、園子は口をぽっかり開けたまま黙り、目暮も目を瞑った。しかし、蹴り

を目暮の目の前で止めたのだった。

目暮がゆっくりと目を開けると、蘭はきつめの口調でこう言った。

「目暮警部、この事件が国に関係あるのは分かっています。だから、警察が黙っているのも。けど、私・・・いや、私達には関係ないんです。ただ、大事な人を助けたい・・・それだけです。迷惑はかけないようにします！だから4人を助けてあげてください！！」

蘭の言葉はむなしく部屋に響いた。人がいない部屋に――

目暮は首を横に振った。それを見て、園子がげんか腰で言った。

「なんでよ！！助けるくらい！！いいじゃない！」

目暮はもう一度首を振ると言った。

「いや、あれは4人のためだ。あの組織にはもう国では歯向かえない。実質あの組織に操られているのだ。君たちは家に帰りなさい。あの組織に殺されたくないのなら・・・ね」

目暮の目は訴えるような目だった。それを見て、これ以上言い返すことは出来なかった。それに、もともと関係のない4人を巻き込むのはどうか、という結論に達し、建前上は帰る、ということに決めたようだった。

「分かりました。迷惑かけました。私達は家に帰ります」

蘭たちはそういつて警視庁を後にした。

3人を見送った後、目暮は無線機に向かって言った。

「あの3人を尾ける。もしもの時は監禁しても構わない」



file 67・警察の裏側（後書き）

10日ぶりですね（汗）

かなり執筆ペースが落ちた、と思います。

てな暗い話は置いて・・・

今回はサンデーに連載されていた、白鳥警部の思い出を織り込んでみました！

白鳥×小林のやつです！

今度短編書きたいなって思ってます！

あ、こっちも書きますよ！！

そういや、前やった全国学力テスト、めんどかったですね（汗）

授業が無くなったから、それなりに良かったですが・・・

しかもあの時執筆できたし^^

そんなことしたの私だけかな？

あっ・・・

私、まだ漆黒のチエイサー見てないんですよ  
早く行きたいのに！！

学校に身代わりでも置いて、行きたい気分です。

って、全部自分の話でしたね・・・

皆さんに質問ですが、この作者の作品はいい！！とかありますか？  
私文章能力低いんで、参考にしたいんです！

たとえば泣ける作品とか・・・

文がめっちゃ上手いものとか・・・

教えてください！勉強します！！

では!!よろしく願いします!  
良かったら次回も見てください

file 68：彼を追って・・・

蘭達は取りあえず園子の家に帰ることにした。園子はタクシーを呼んだ。真は後ろで尾けている警察の気配を察知していた。蘭も薄々察知していたが誰かは判定出来なかった。2人は自然と園子を守る体制に入っていた。それに違和感を覚えた園子は言った。

「ねえ・・・2人ともピリピリしてるわよ。もしかして誰か尾けてるのか？」

園子がそういった瞬間、2人は行動に移った。それは園子の発言で気付いたと感じたからだ。蘭と真は走り始めた。園子はその時真に抱き抱えられた。

「ね、ちよつ、真さん!？」

園子の顔は赤くなっていた。しかし、真はそれよりも後ろの追っ手の方に気がいていた。

「すみません、園子さん。僕に捕まって下さいね！」

真にそう言われ、園子は自然と“はい”と答えていた。

それから2人の行動は素早かった。

蘭がたまたま停まっていたタクシーを捕まえると素早く乗った。そして、走っていた警官を撒いたのだった。

撒かれてしまった警官の一人は呟いた。

「せっかく千葉を使つて警察を荒らしたのに・・・あの子に逃げられたら全てが台なしだわ。早くあの方に連絡しないと・・・後、目

暮をどう使うか・・・」

その頃、4人はパスワード解明作業に取り組んでいた。それは千葉でも時間がかかる程だった。

「千葉君、調子はどう？」

美和子が聞くと、千葉はパソコン画面を向いたまま答えた。

「このパソコン、性能がいいので、どうにかなりそうです。もし、ロック解除が出来たらやって欲しいことがあります」

それを聞いて全員耳を澄ました。みんなが千葉の方に顔を向けると、口を開いた。

「それは・・・」

千葉の提案に全員頷いた。そしてまた4人は個別の作業に取り掛かったのだった。

園子は自分の部屋まで来ると、ケータイをかばんから出して次郎吉に電話をかけた。

「もしもし、次郎吉おじ様ですか？・・・」

それからしばらく話し込んでいたが、話し終わったのか、蘭の方を

向き、言った。

「安心しな。あんたの旦那のところに今から行けるから！2人共ちよつと待ってて！」

そう言って出て行ってしまった。蘭と真は顔を見合わせ、首を傾げている。それを見て、園子は一人、ニヤッと笑っていた。

10分程経って園子は動きやすそうだが、ゴージャスな服に着替えて来たようだった。それを見て、蘭が気付いたようだった。

「なるほど、私達2人はSPに化けるのね！」

真もあることに気付いたようだった。

「園子さん、まさか・・・」

真が驚きの表情をしたのも無理はない。それは以前2人で話していた、危険、かつ難易度の高い計画なのだから・・・それが分かっていた園子は話を続けた。

「そうよ。それに和葉ちゃんは今も行ってるみたいだし。だから不可能じゃないわ」

「けどっ！したら僕達の約束が・・・」

園子は真をなだめるように、諭すように言った。

「真さん、私だってあの約束はちゃんと覚えてる。けど・・・親友の大事な人の危機なのに指を加えて見てるなんていやなもの！」

真は落ちついたようで、もう普段の真と変わりなかった。そして、園子の方を見て言った。

「そうですね。僕は分かってたはずなんです。けど園子さんのことを考えるとつい・・・もう大丈夫。園子さんは僕が守ります。それならいいです」

「分かった。お願い」

園子は時計を見て、まくし立てるように言った。

「時間がない！早く着替えて！真さんはあっちの部屋使って！」

そうしているうちに慌ただしく時間は過ぎていった。

しばらくして、鈴木財閥のヘリが降りてきた。3人はそれに乗るとそれぞれが決意を固めていた。

30分後、新一達が集まっていた場所にヘリを降ろしてもらうと園子はパイロットに言った。

「おじ様、ありがとうございます。事情はまた今度話します。後はよろしくお願いします」

それを聞くとヘリは飛んで行ってしまった。

それを見送った3人は和葉に出会つと、平次の話をつつそり立ち聞きして聞いた話と、3人の持っている情報を元に、組織のアジトに潜りこんでいった。



file 68・彼を追って・・・（後書き）

今回はなんとなく園真が濃かった気がしますね（汗）

次回はなんと！！ほぼすべてのカップルがアクションを起こします！！

忘れ去られていたであろう新一君と平次君登場！！  
覚えてました？

漆黒のチェイサーにも行けました！！

ジン最高！！

最後とか特にカッコよかった！！

後、新一×平次の電話かな？

なんか良かったです^^

GWに出せなくてすみません（汗）

次話は半分書けました！

あとはあの2人・・・

では！！また！！

## file 69・彼との再会

新一と平次はしばらく落下していた。意外なことに2人全く恐怖を感じなかった。

「なあ、死ぬ前ってこんな感じなのか？」

新一は普通にそう言ったが、平次は思ったよりも怒っていた。

「なに言つとんねん！助かる方法考ええや！」

平次にそう言われ、新一ははつとした。そしてそのせいかその時何か思い付いたようだった。

新一は腰に巻いているベルトからサッカーボールを作ると、それをクッションにして、着地によるショックを和らげた。

それを見て平次は純粹に感心していた。

「さすがやな。あとはここから抜け出せばええんやけど・・・」

そう言つて壁にもたれかると壁は脆く崩れ去った。平次はニヤッと笑つと持っていた剣で崩していった。

「もうこの剣使えへんわ。じゃあない、これは置いてこか」

そついつて平次は剣を置いていった。そして、新一に行こうと言おうとした時、新一の異変に気付いた。

「工藤、薬切れたんか？」

しかし新一は口を開かなかった。しかし、指がゆっくり動いて正面を指した。それを見た平次が正面を見るとそこには蘭、和葉、園子、真が立っていた。

（俺らが一番恐れてた展開やな・・・）

そう平次が心で呟いていたとき、蘭が呟いた。それははっきりしていて、響く声だった。

「やっとあえたね、新一。これからはずっと一緒にいて。私が少しでも新一の助けになるなら居たいの」

新一はショックから立ち直ると蘭の首と腰に腕を回して優しく抱くと、言った。

「分かった。ずっと一緒だ。もうここまで来ちまったんだろ。俺から離れんじゃねえよ」

「うん」

それを聞くと、新一は蘭から離れ、進んでいった。それを見た平次は和葉に言った。

「俺から一生離れるんじゃないで。お前は俺しか守れへんからな」

「えっ！？あつ、うん！」

和葉は平次の発言にビックリし、マヌケな反応をしてしまった。しかし、平次はツツコまず、和葉の手を繋いだ。和葉は顔を赤らめながら進んでいった。

園子と真もそういうことはなかったものの、しっかり手を繋いでいた。強く、優しく・・・

6人共自分達に気をとられ気付いてなかった。4人の子供達の気配に・・・

快斗は青子のいる階に行くと、持ち前の早業で鍵を開けた。青子は快斗を見た瞬間、今までの緊張が解け、安心したのか泣いていた。

「かつ・・・快斗！！怖かったよ！！でも助けに来てくれてよかった・・・」

そっというのが精一杯だった。青子を急いで抱きかかえると、青子はさらに安心したようだった。快斗がそれを見て気を緩めたその瞬間・・・快斗の肩を銃弾が掠めた。

快斗はその時、逃げられない、と肌で感じ取った。そう、その相手は・・・ベルモット。

そんな強敵に立ち向かうこと・・・それは死を意味するに等しかった。もうすでに銃口は青子を狙っていた。それでもなお戦おう、という考えをもてたのは“青子を守りたい。たとえどんな危険になっても・・・”という意味があつたからだだった。その一心で快斗は勇気を振り絞って、ベルモットに話しかけた。

「お前が俺の父さんを恨んでたことは知ってる。父さんは組織の内部を知り、ジンとベルモットが薬を使つて若返ったり、年をとらせたりしたことを突き止めた唯一の人間だからな。だけど青子は関係ない。俺は殺されても構わない。だけど、青子だけは・・・アイツだけは、無事に帰してやってくれ。それだけで、頼む！！」

快斗は真剣に訴えた。するとベルモットはしばらく黙り込んだ。そして不敵な笑みを浮かべると、言った。

「その子は助けてあげる。けど・・・シェリーを私達のところへ持つてくる、それが条件。悪くないでしょ？どう？」

快斗は考えた。仲間を人質として渡すことと愛する人を守ること、どちらが重要か、と。それを考えた末に、快斗は首を縦に振った。ある一つの条件をつけて。

「分かった、連れて来る。その代わり、組織が作った薬であの子のお姉さんを生き返らせてくれないか。恐らくそれを行うことが出来る。だからだ」

ベルモットは頷いた。

「いいわよ。じゃあ、sherryをよろしくね!!」

そういつてベルモットは青子を再び部屋の中に閉じ込めた。しかし、その時のベルモットは深い顔をしていた。まるでこの騒動の終わりを知っているかのように・・・

file 69・彼との再会（後書き）

今回かなり支離滅裂ですね（汗）

焦りですかね・・・

投稿速度は激遅ですが・・・

今回は宣言どおり、各カップル書きました！

高佐は書けてませんが・・・

そういや、雨の中の運動会ってやったことあります？

私の学校、運動会今年から6月になったんですが、かわいそうなことに2年連続雨です・・・

しかも次の日快晴なんて・・・

絶対崇られてますね・・・

では、後書きまで支離滅裂でしたが・・・

また！！

次は・・・哀ちゃん！！出てきますよ！！  
ってゆーかメインですね

## file70・哀の決意

哀を探すため、快斗は急いで下へと降りていった。しかし、その顔には未だに迷いが見られていた。

（あの子がいくら組織の手下だったことがあるからといって、あの子を売っていいことにはならない。それは分かってる。けどっ！！青子の身になんかあったら俺はもう・・・）

そして苛立ちのあまり、壁を叩いた。すると、そこには新一達が落ちていった穴があった。

「へっ？」

そしてまっさかさまに落ちていったのだった。

（何だこれは！！ヤバいんじゃないか？）

そんな危機迫った状況になった時、下から声がした。

「元太君、灰原さんを早く見つけて帰りましょうよ！！こんな危険なところに長居するなんて危険すぎます！！だからとりあえず、動いてください！！」

「そうだよ、元太君、お菓子食べてる場合じゃないって！！」

（ああ、俺は死ぬんだな、だからこんな幻聴が聞こえるんだ）

そう思った刹那、何かやわらかいものに、快斗はぶつかった。

それと同時に下からはうめき声が洩れた。

なんだろう、そう思った時、見覚えのある女の子が言った。

「あの時のお兄さん！！助けて欲しいの！！哀ちゃんがつ、哀ちゃんがつ！！」

そう、歩美は泣いていた。自分が危険な目にあっているからではない、ただ自分の友達が危険な目にあっているかもしれない、その一心で。

その涙を見て、快斗の心は決まった。

「そっか、俺が間違ってたんだな」

そうつぶやくと、快斗は歩美達に話しかけた。

「3人とも、危険なのは良く分かるだろう。正直な話、この事件は君たちも無関係とは言にくいけど・・・君たち自身が悪いわけではないんだから、帰ったほうがいい。俺は俺でちゃんとケリをつけなきゃいけないから残るが、君たちを安全なところまでは連れて行ける。だから、君たちの友達の為に、無事に帰ろう、な？」

快斗はそう言って3人をつまみあげた。しかし、3人は快斗の手から逃れ、快斗に言った。

「俺らは友達を見捨てたりなんかしねえよ！！」

元太はそう言った。それに続き、光彦、歩美も言った。

「そうです、灰原さんは大切な友達ですから！！」

「お兄さんは正しいと思う。けどね・・・やっぱ帰れないよ」

快斗はその発言を聞いた後、考えた。この3人を連れ去る時のリスク、確率などを。

その結果、たどり着く答えは1つだった。

「お前らは安全なところに隠れとけ。で、危険が去ったら探すんだ。その判断力はお前らにはある。ちゃんとカタをつけたら君らの友達と一緒に帰れるように。それでいいか？」

もちろん、3人は馬鹿ではなかった。それに同意すると、3人は安全なところに隠れていった。

哀はさつき快斗が落ちた穴の前に立っていた。

哀は少年探偵団の気配に気が付かないほど、ここへ来るのには1つの大きな目標――いや、すでにそれは賭けに等しかった。

そう――すべてにカタをつけ、ジンかベルモットに殺される・・・そのことだったのだから・・・

快斗の今の心境を察すると、その決意はさらに強くなった。

（私が誰かの役に立てるなら、嬉しい。工藤君の助けにはなれなかったけど・・・）

そんな想いを胸にベルモットの居る部屋へと入っていった。

ベルモットは突然の来訪者にびっくりしていた。しかし、すぐに中へ呼び、話し始めた。

「あら、あなた自身が出向いてくれるなんて、凄く嬉しいわ。その理由でも聞こうかしら？」

哀はベルモットになぜか恐怖を抱かなかった。それが何を表しているか、哀には分かっていた。そう、決意が固まったからだ。それが分かるからこそ、哀は本心をベルモットに言うことが出来たのだ。

「今までのしがらみを断ち切りたかったのよ。私が居なくなれば、あなたはすべての人々から手を引いてくれるんでしょ？それに、もう私の周りの人が傷ついてしまうのは嫌なの！私のせいで・・・」

ベルモットは頷くと、銃を取り出しながら言った。

「ええ、その通りよ。私はジンがあなたにぞつこんなのが気に入らない、だから、あなたを組織から消す方法を考えてた。1度は喜んだわ。あなたが地下牢に入れられた時はね。けど、あなたが組織から消えた時、幼児化したって気づいたわ。そして、再び、あなたを憎み始めた。でも、手は出せなかった。有紀子の息子と仲良くしてたからね。だからこのチャンスを狙ったの、組織崩壊のときならあなたは必ず駆けつける。それなら必ず私はあなたを殺れる。私の目的はこれだけだもの。ずっと待ち望んだことなのよ」

そして銃を取り出すと、引き金に手をかけて、哀に着々と近づいていき、5メートルほど離れた位置で止まった。

「じゃあね、シェリー」

その言葉を発すと共に、ベルモットは引き金を引いた。その時、銃声が部屋いっぱいに響き渡った。

file70・哀の決意（後書き）

哀ちゃん、とうとうベルモットの元へ！！

ベルモット、引き金を引いちゃいましたね（汗）

哀ちゃん、どうなるの？と心配なangelです（バカ）

今回の投稿・・・ほぼ一ヶ月ぶりです。

まず、それを謝りたいと思います。

テストが中3になってバカみたいが増え、ここに来れなくなっていました。

ただ、最近は少し要領をつかみはじめたのでなんとかなりそうです！！

頑張ります！！

次回も哀ちゃん結構メインですよ！！

file71:ベルモットの想い(前書き)

だいぶ遅れてすみません!!  
多分忘れ去られてると思いますが、思い出して読んでいただけた方がいれば大変嬉しいです!!

## file 71：ベルモットの想い

その瞬間、銃声は部屋全体に鳴り響いた。銃からでた銃弾は哀の肩を貫通した。しかし哀は決して動かなかった。ベルモットはそれに驚いていた。

「あら、動こうとしないのね。私、驚いたわ」

哀は肩に熱さと痛みを感じながらも言った。

「だって動いたら死を覚悟してるって分からないでしょ？」

滑らかに言ったが哀はかなりの苦しさを感じていた。しかし、みんなを守るためならその苦しみにさえ耐えられた。ベルモットはそれを聞いてさらに口を開いた。

「なるほど。だからあの子と違って解毒剤を飲まなかったのね。最初に組織との戦いに参加するはずだったのにしなかったのもあの子に黙ってここに来るため……」

「な、なんでそれを？」

哀は驚いた。それはジョディと話したことだったからだ。そして一つの可能性を見出した時、哀の顔から血の気が消えた。ベルモットは口元で笑いながら言った。

「そう、あの時は私の変装よ。そこで貴方達に組織の情報を回したの。全てを終わらせないといけないしね」

ベルモットは一息ついた。それは一瞬だったがとても長く感じられた。

そしてベルモットはマジメな表情になり銃をもちあげると言った。

「無駄話は終わり。じゃ、貴方には死んでもらうわね……。バイバイ、シェリー……」

ベルモットは静かに引き金に手をかけた。哀はそれを見たあと、目を瞑り、死を覚悟した。

（工藤君……。最後にもう一度、一瞬でいいから……。会いたかったな……。）

哀が、後悔ともとれるこんなことを考えたのと同じタイミングで、ベルモットは静かに、かつ、冷酷に引き金を引いた。

しかしその瞬間、哀の体は誰かの手によって、左に押し倒された。

哀は驚きで一杯だった。なぜなら……。押し倒した相手は、今わの際に思っていた工藤新一だったからだ。

「くっ、工藤君？何でここに？」

本当は他にも言いたいことが山ほどあった。しかし、この時、この場所では、これしかいうことは出来なかった。そんな哀をよそに、新一は哀に耳打ちした。

「灰原……。怪我、大丈夫か？あとから処置してやるから俺の後ろに居ろ」

哀は、新一がそう言ってくれたことが嬉しかった。出来ることならそうしていたい、そう思った。しかし、哀はそうするわけにはいか

なかった。なぜなら、この1年間で出会った人たちを危険な目にさらすことは哀のなかで最も許されざる行為に等しかったからだ。だから、無言で哀は新一の前に出た。

「ごめんなさい、工藤君。あなたは優しい人だから・・・みんなを助けたいと思うのも分かるわ。けど・・・これが最もいい方法なのよ。分かってね」

哀がそれを言ったのを聞き、新一がなにか言おうとするのと同時に、ベルモットが言った。

「そう、良く分かってるわね。貴方が死んでくれさえすれば、私はこの決戦なんてどうでもいいの。そう・・・貴方さえいなければ・・・ジンだって、私のほうを向いたのにつ！！」

最初は冷徹そのものだったベルモットの口調は、いつの間にか感情的になっていた。それは、ベルモットのこの気持ちこそが、哀を恨んだ理由だということを明確にあらわしていた。

新一はその態度を見ると、ベルモットに言った。強い口調ながらも包みこむような声色だった。

「今までなにがあつたかなんて、俺は知らないし、これ以上知ることもないと思う。けど・・・恨みがあるからって人に当たるのは許されざる行為だ。それに、この件に関しては、誰も悪くない。そんな事、分かっているだろ？貴方ほどの能力があれば・・・ただ、それを抑えられなかった、そう、それだけだ。だから・・・灰原を狙うのはやめてくれないか？俺を殺してもいい。だから・・・」

それを言った新一の顔には決意の色がはっきり見えていた。それを見たベルモットは銃を降ろし、そして言った。

「さすが有紀子の子ね。この私でさえ、少し動揺したわ。けどね・  
・やっぱりそれでも考え直すことは出来ないの。それほど、このこ  
とをずっと考え、恨みをためてきたんだもの。だから・・・私はシ  
エリーを殺さなければならぬのよ」

そういうと降ろしていた銃を上げ、新一の前に立っていた哀をめぐ  
けて撃った。

しかし、新一も準備を怠っていなかった。

持っていた銃でその弾を打ち落とすと、ベルモットの両足、腹部を  
めがけて撃った。ベルモットは感情的になっていたせいもあり、普  
段の実力を出せなかったのか。腹部の銃弾をよけることが出来な  
かった。

しかしそれに当たった瞬間、ベルモットは真剣、かつ、冷酷な普段  
の状態を取り戻した。それは、哀を殺す、その指令を遂行する狼の  
ように見えた。新一は哀を守り続けた。しかし、銃弾が切れ、新し  
い銃に変えるその一瞬をベルモットは逃さなかった。

（やられる！？）

そう思った瞬間、何かがベルモットの手に当たり、銃がベルモット  
の手から落ちたのだった。

file71：ペルモットの想い（後書き）

前回書いたのからいうと、ずいぶんお久しぶりになりますね  
むしろ初めての人のほうが多いかもしれません

これなかった理由・・・は、中3になって、現実の問題が多くなっ  
た、とか、一時期パスを忘れてた、とか色々です。

これからはちゃんと書くつもりですので、読んでくださいね  
お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0524f/>

---

また会える日まで

2010年10月10日23時08分発行